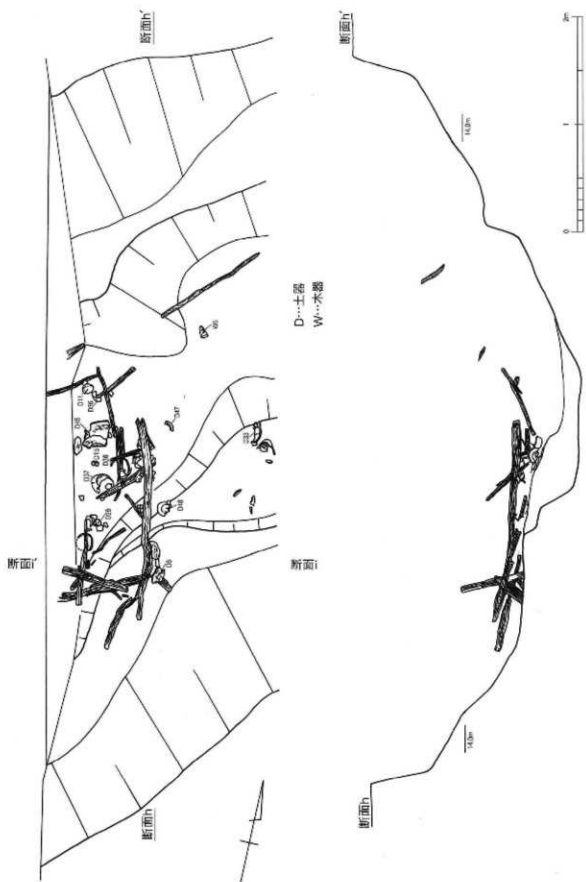
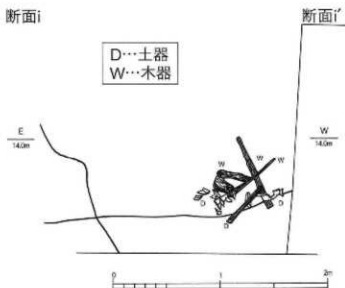




横 148 図 河川跡遺跡出土状況調査図 (2)



第 149 図 河川跡等高線図

たと考えられる (第 149 図)。

斜め杭は西へ 45 度ほど傾くものが 5 本、東へ 25 度程度傾く杭が 3 本検出できた。これらは最もよく残っているもので長さ 0.7 m を測り、先端を尖らせた杭のほか柄などの転用材や自然木が使用されていた。横木は上流側にあたる東端のものが最も長く、長さ 1.9 m、直径 8 cm を測る。これは先端部が Y 字形に分かれる自然木であり、端部に切断痕が残る。堰内部に積まれていたと思われる小枝はほとんど流出しており、僅かに 8 本残るだけであるが、これらは長さ 50 cm、直径 2～3 cm 程度の枝材である。この斜め杭の内部の埋土は 3 号河道の堆積物とみられる灰褐色粗粒砂～シルトの互層であった。

また、斜め杭や枝材の下からは堰状遺構構築時に埋められたとみられる 3 個体の庄内甕が原位置を保って出土した。これらは水流により 1/3 の部分が欠損しているが、口縁部の残るものは上向きに埋められており、水を祭る祭祀に使用された可能性が高い。その他、横木や斜め杭に接して土器片が出土しており、堰状遺構使用時に引っかかって堆積したものと思われる。

この遺構は水流を塞ぐ形に組まれた構造からみて、3 号河道を塞ぎ止めて水位を上げる施設であったと見て間違いないが、その用途となると不明といわざるを得ない。この手の遺構で真っ先に思い出されるものは井堰であるが、3 号河道から分流する送水路が確認されていないことと、堰の底から溝の上面までの比高差が 1.4 m もあり、その高さ近くまで水位を上げるにはこの部材や構造では弱すぎることから、井堰とするにはなお問題がある。そのため、この遺構の位置付けについては周辺部の調査を待ちたい。

(5) 出土遺物

今回の調査では河道を中心にコンテナに 20 箱分の遺物が出土した。しかし、緊急を要する震災関連の発掘調査という調査の性格上、十分に遺物整理を行い得る時間とることができなかった。そのため、3 号河道の遺物を中心に主要な遺物のみ図化し、「当初整理分」として報告を行っていきたい (第 150～153 図、図版 103～114)。なお、「追加実測分」の作業と観察文執筆報告は、芦屋市の整理担当者 (森岡秀人係長) に委ねた。(P192～202)

A. 土器—当初整理分

1 号河道からは須恵器や土師器、土錐が出土した。これらには図化できなかったものの短い受部をもつ 6 世

堰状遺構 C 0 グリッドの 3 号河道西端で検出された遺構である。堰状遺構は南北方向に長軸をとり、3 号河道に直交して流れをさへぎるような形で構築されていた。水流によって北半部が破壊されており、検出長 2.83 m を測るが、現状から見て、本来は 4.2 m 程度の長さがあったものとみられる。西半分が調査区外にのびており、上部も水流で壊されているため、当初の規模や姿は明らかではないが、現状で約 1 m、高さ 0.55 m を測る。基本構造は横木で根本を押さえた斜め杭を合掌形に組み、その中に小枝などを積んで流れを塞ぎ止める機能・構造となってい

紀後半の須恵器杯身や高台をもつ奈良時代の杯がみられた。また、土鍾は須恵質のもので、卵形の体部の長軸方向の側面にヒモをかける1条の溝をもつ有溝土鍾であった。

2号河道からは、甕1のほか摩耗した破片の土器が少量出土した。これらは3号河道の土器の二次堆積とみられる。

1は口径16.6cmを測る甕である。短く開く口縁の端部に面をもち、刻み目が施されている。器面調整は口縁および体部外面にタタキメを消す縦方向のハケを用い、内面に横方向の粗いハケがみられる。色調は灰白色を呈する。庄内期前半に属する。

3号河道からは袋内第Ⅴ様式末～庄内期の土器が遺物コンテナ10箱分出土した。これらは調査区の西端の堰状遺構に伴うものと堰状遺構に直接関係しない土器に分けることができた。堰状遺構に伴う土器については、遺構構築に伴って埋められた一群と堰状遺構が機能していた期間に斜め杭や横木に引っかかった一群、遺構検出時に取り上げたため、前者のどちらに属するか判断のつかない一群に分けることができた。

堰状遺構構築の際に埋められた一群には、斜め杭や横木の下からほぼ完全な形で出土した甕36・37、器台61と破片となって横木の下から出土した二重口縁甕9・10や甕28がある。

9・10は二重口縁甕である。9は上縁部が強く外反する無文の口縁部をもち、口径20.6cmを測る。胎土に少量のクサリ礫を含み、淡赤灰色を呈することから、近隣よりの搬入品とみられる。10は上縁部側面に御指波状文で加飾する甕で、口径18.2cmを測る。9・10はともに庄内期後半に属する。

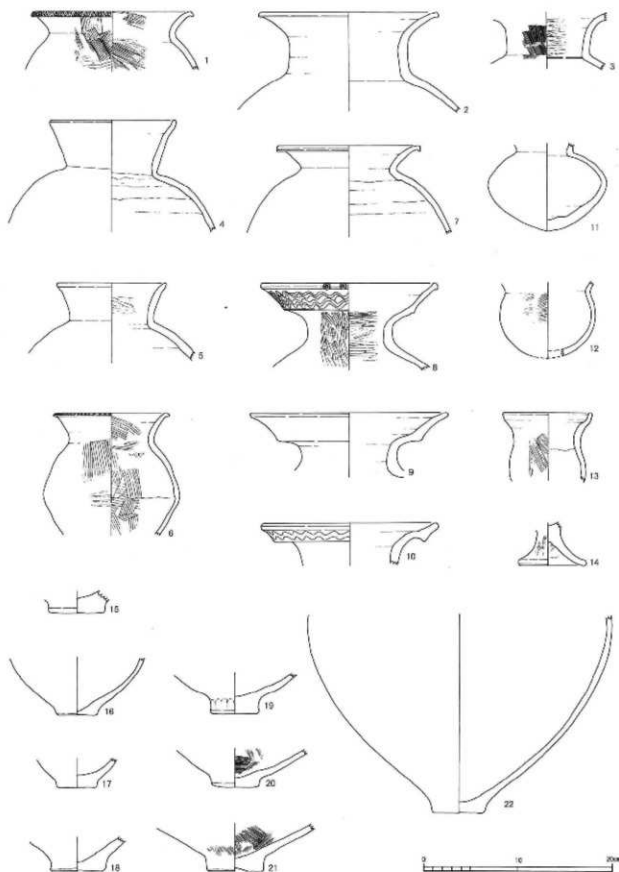
28は「く」の字状口縁をもち、体部外面に太いタタキメがみられる甕である。口径14.7cmを測る。36・37は口縁部を欠損したもう1個体の甕とともに斜め杭や横木の下に並べて埋められていた庄内甕である。これらは内面にヘラケズリ、外面に細かいハケが施された薄い器壁をもつ球形の体部を特徴とする布留系甕である。36の口縁は少し内湾ぎみに短く開き、端部に揃い上げぎみの強いヨコナデが施されている。端部の内傾する外端面には条線がみられる。体部外面の器面調整は肩部が横方向のハケ、腹部以下に縦方向のハケが施されている。体部内面は頸部直下に指頭圧痕が残り、頸部より少し下がった位置から横方向の強いヘラケズリがみられる。体部は最大腹径が中ほどよりやや高い位置にある卵球形を呈し、最大腹径20.2cmを測る。口径15.4cm、器高20.2cmを測る。庄内期終末段階に属する播磨・摂津系の庄内甕である。37は直線的に短く開く口縁をもち、ヨコナデにより揃い上げられた端部が面をなす。器面調整は外面に縦方向の細かいハケがみられ、口縁部から肩部の内面に横方向のハケが用いられる。口径15.5cm、器高20.3cmを測る。最大腹径20.3cmを測り、体部中程にもつ。布留0式期に属するものであろう。

61は鼓筒形を呈し、脚柱部を棒状のもので貫通させた小型器台である。脚部には四方に透かし孔が外側から開けられており、脚端部は内面に肥大する。口縁端部は外傾する面をなし、2条の擬凹線が巡る。口径9.7cm、器高8.2cm、脚径10.6cmを測る。色調は灰白色を呈する。口縁と脚柱部が完形である。

堰状遺構に引っ掛かった状態で出土した土器には広口壺6、細頸壺11、甕27・38、鉢48が挙げられる。

6は下半が強く張った体部から口縁部が外反する広口壺である。口縁端部は外傾するにふさわしい面をもち、ヘラ状工具による刻み目が施される。体部外面の器面調整はタタキの後、上半に縦方向のハケ、下半にナデが施され、タタキメを消している。内面の器面調整は粘土細の接合痕をハケで消している。外面に煤が付着しており、甕に転用されたとみられる。口径11.5cm、最大腹径14.4cmを測る。

11は強く肩の張った扁平な体部をもつ細頸壺である。底部は尖底である。体部の器面調整はナデであり、底部にヘラケズリがみられる。口縁部を欠損するが、付近から出土した口縁部片から、細頸壺とみられる。肩部に黒斑



第150图 出土遗物实测图(1) 1/4

を有する。灰白色を呈する在地産の土器である。庄内期後半に属する。体部のみ完形であり、最大口径 12.6 cm を測る。口頸部は外反傾向をみせながら伸びるであろう。

27 は「く」の字状口縁をもつ甕である。丸みを帯びた体部は 2 分割で成形されており、口縁部は叩き出し手法で作られている。口縁端部には内面をもち、縦凹線が巡る。器面調整は外面に右上がりのタタキメ、内面にヘラケズリののち板ナデが施されている。体部外面は火を受けて表面が剥離しており、煤が付着する。口径 13.9 cm、最大口径 15.4 cm を測る。庄内期前半に属する。38 は外面にタタキメ、内面にハケがみられる甕の底部である。底面に輪台の痕跡が残る。

48 は口縁部を短く外反する小型の鉢である。体部の器面調整は内面・外面とも縦方向のヘラミガキである。口縁端部を欠損するもの、および口径 17.5 cm、器高 7.6 cm 前後のものであったとみられる。

直口壺 5、壺 12・21、甕 23・29・35・43・45・46、鉢 18・51、高杯 59・60 は塚状遺構の検出時に出土した土器である。

5 はわずかに外反しながら直線的にのびる口縁をもつ直口壺である。口縁端部は狭み上げぎみにヨコナデされており、外傾する面をもつ。器面調整は外面に縦方向のヘラミガキ、口縁部内面に横方向のヘラミガキ、体部内面に強いナデが認められる。口径 11.4 cm を測る。庄内期前半に属する。12 は頸部があまりくびれない球形に近い体部をもつ小型甕である。体部外面に細かいタタキメがみられ、下半に黒斑がある。21 は突出した平底をもつ甕の底部である。器面調整はハケを用い、底面に木の葉痕が残る。

23・29 は「く」の字状口縁をもち、体部外面にタタキメがみられる甕である。23 は口径 11.7 cm を測る小型の甕である。29 は石粒が多く、クサリ礫を含む胎土をもつことから、北抵地域からの搬入品とみられる。口縁部は叩き出し手法で作られている。

35 は薄い器壁をもち、体部外面に細かいハケ調整がみられる甕である。口縁部は体部から鋭角に開いて直線的にのび、端部はヨコナデにより狭み上げられている。器面調整は口縁部内面に横方向の細かいハケ、体部内面に板状工具で横方向の軽いケズリが認められる。口径 15.8 cm を測る。灰白色を呈する在地の土器である。庄内期後半に属する。

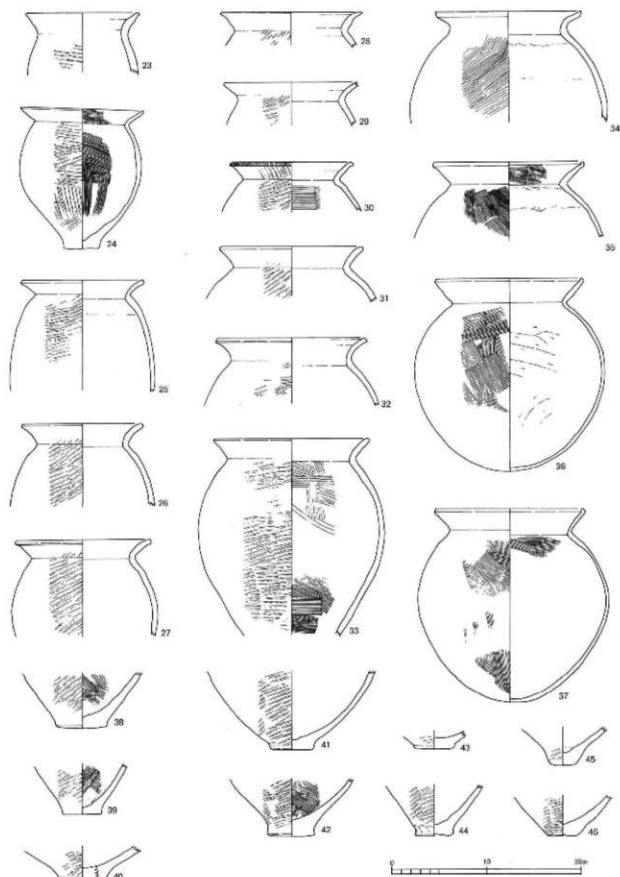
43・45・46 は体部外面にタタキメが残る底部である。43 は内面に煤が付着しており、底部に木の葉痕が残る。45 は底部側面まで叩き込まれており、小さい尖りぎみの平底をもつ。鉢の底部であろう。46 は細かいタタキ目をもつ叩き板により底部側面まで叩き込まれており、小さい平底となっている。

51 は底部から直線的に開く直口鉢である。器面調整は体部外面にタタキメを消しきれていないナデ、内面に板ナデ、口縁部にヨコナデが施されている。器壁が薄く、灰白色を呈する。口径 15.5 cm、器高 7.9 cm を測る。18 は内湾する鉢の底部である。ローリングを受けており、外面は不明であるが、内面にヘラ状工具による押圧がみられる。

59・60 は高杯の脚部である。59 は脚柱上部が中実であり、緩やかに開く脚柱部から脚部が屈曲して開く。60 は円柱状の中実の脚柱部からなだらかに脚部が開き、脚部で横をもち、さらに外反する二重口縁をひっくり返したような形態の脚部をもつ。透かし孔は脚部部に 2 個ずつ 1 対に開けられている。器面調整は脚部外面に縦方向のヘラミガキ、内面にナデが施されている。脚径 14.2 cm を測る。

3 号河道から出土した塚状遺構に伴わない土器には広口壺や直口壺、二重口縁壺、受口状口縁壺、甕、鉢、高杯がある。

2・3・7 は広口壺である。2・3 は短く上方へのびる頸部から口縁が強く屈曲して開く器形をもつ。2 は



第151図 出土遺物実測図(2) 1/4

口縁端部に握口縁が巡る面をもつ。口縁部の1/3程度の破片であり、口径18.7 cm程度とみられる。灰白色を呈する。庄内期前半に属する。3は2と同様に口縁端部に面をもつとみられる広口壺の頸部である。頸部外面に縦方向のハケがみられ、内面に横方向のヘラミガキが施されている。7は頸部が短かく、口縁部が鋭角に外反して開く。口縁端部に面をもち、ハケ状工具による条線が巡る。器面調整は体部外面に縦方向の密なヘラミガキ、体部内面に粘土紐の接合痕を消すハケが施されている。体部と頸部の接合部内面には内傾接合痕が残る。灰白色を呈し、体部外面には黒斑が残る。口径14.9 cmを測る。第V式後半—3段階に属する。

4は細粒の角閃石を多く含む河内産の直口壺である。球形に近い体部から口縁部が直線的に外上方へのび、端部付近で短く内弯する器形をもつ。器面調整は口縁部外面・体部外面にハケを消すナデ、体部内面にナデが施されている。体部内面には粘土紐の接合痕が明確に残る。口径13.1 cmを測る。庄内期前半に属する。

8は加飾された二重口縁壺である。口縁部の上縁に3条の縄なみ波状文を2段に巡らせ、面をもつ端部に2個1組の竹管円形浮文が貼り付けられている。口縁部の器面調整は外面の上縁に条線が残る強いヨコナデ、下縁に縦方向のヘラミガキ、内面に端部ヨコナデののち横方向のヘラミガキが施されている。体部の器面調整は外面に縦方向のヘラミガキ、内面にナデののち頸部付近のみ口縁部より細く粗い横方向のヘラミガキがみられる。口縁部は完形であり、口径18.1 cmを測る。灰白色を呈する在地の土器であり、庄内期前半に属する。

13は受口状口縁をもつ小型の壺である。張りの少ない体部から頸部でわずかにくびれたのち、口縁が緩やかに外反して、端部で上方へ屈曲する。器面調整は口縁にヨコナデ、体部外面にハケののちナデ、体部内面にナデが施されている。土器はひずんでおり、おおむね口径9 cm、最大腹径8 cmを測る。灰白色を生ずる在地の胎土を使用して、丹波・丹後系の影響を受けた在地の土器であろう。

14・15・17・19・20・22は壺の底部である。14は脚のつく底部である。脚付鉢になるかもしれない。外面に縦方向のヘラミガキが残る。脚径7.2 cmを測る。15は長石、石英の粗粒を多く含む胎土をもつ厚みのある底部片である。底面に黒斑がみられる。弥生時代前期の壺の破片であろう。17・19・20・22は突出気味の平底をもつ。19は淡赤褐色を呈し、長石粒を多く含む胎土をもつ周辺地域からの輸入品である。22は最大腹径32.4 cmを測る大型の壺である。体部外面に黒斑がみられ、内面にナデ調整が施されている。灰白色を呈する。

24～26・30～34は「く」の字状口縁をもち、体部外面に右上がりのタタキメがみられる壺である。24は口径13.8 cm、器高14.8 cmを測る小型の壺である。口縁部は頸部からシャープに屈曲して直線的に開き、端部に面をもつ。張りの強い体部は2段の分割成形で作られており、最大腹径12.9 cmを上半にもつ。口縁部内面と体部内面にハケ調整がみられる。25～26・30～33は中型の壺である。25は張りの弱い体部をもち、口径12.6 cm、最大腹径15.4 cmを測る。体部内面の器面調整は上半に横方向の弱いヘラケズリ、下半に縦方向のヘラケズリがみられる。26は張りの強い体部から口縁が外反してのび、脚部を丸く収める。頸部内面はシャープな角をもつ。体部内面には丁寧な板ナデが施されている。外面には全面に煤が付着する。口径12.2 cmを測る。30は口縁が鋭く直線的に開き、面をもつ端部に叩き板によって施されたと思われる刻み目がみられる。口縁部外面にも縦方向のタタキメが残る。体部内面には横方向の粗いハケが施されている。灰白色を呈する在地の土器である。口径12.6 cmを測る。庄内期前半に属する。31は口縁部を叩き出し手法で作られており、端部に面をもたない。口径14.9 cmを測る。32は緩やかに外反する口縁をもつ。口縁端部は三方から強くヨコナデされ、面をもつ。体部の器面調整は内面にナデ、外面に細いタタキメを消すナデが施されている。色調は灰白色を呈する。口径15.5 cmを測る。庄内期前半に属する。33は体部中程や上に最大腹径をもち、口縁が鋭く外反する。口縁端部は丸く収まり、面をもたない。体部は2段の分割成形で作られており、体部中程で外面のタタキメの傾斜角度が変わる。内面の器面調整は上部に

粗いハケ、中程に指ナデ、底部近くに横方向のハケが施されている。口径 16 cm、最大腹径 19.6 cm を測り、器高が 25 cm 前後になるとみられる。庄内期前半に属する。34 は強く張った体部から頸部が短く立ち上がり、大きく開く口縁部に至る器形をもつ。口縁端部には強いヨコナデにより外傾する面をもち、外上方へ積み上げられている。器面調整は口縁部に横方向のナデ、体部外面に細いタタキ、体部内面にナデが施されている。体部内面上端に粘土紐の接合痕が明確に残り、その上下で器面調整が異なる。灰白色を呈する。口径 15.4 cm、最大腹径 21 cm を測る。庄内期後半に属する。

39～42・44 は体部外面にタタキが施された底部である。39・42 は内面にクモの巣状のハケ調整がみられる。40 は底面付近までタタキがみられる。41 は大きく張った体部をもち、分割成形が行われている。底部に木の炭痕を残す。

47・49・55・56 は板形の体部から口縁が短く外反する鉢である。47 は口径 13.7 cm を測る小型の鉢である。口縁がわずかに内湾ぎみに開く。49 は口径 21.6 cm、最大腹径 20.5 cm を測る中型の鉢である。口縁部は直線的にのび上がる体部から強く屈曲して短く外方へのびる。器面調整は体部内面・外面にハケが施されている。55・56 は「く」の字状の口縁をもち、口縁端部に腹凹線が巡る大型の鉢である。器面調整は口縁部にヨコナデ、体部外面に板ナデ、体部内面に横方向のヘラミガキが施されている。ともに庄内期前半に属する。55 は器面の剥脱が激しい破片であり、口径約 27.8 cm を測る。庄内期前半に属する。56 は体部に黒斑がみられる破片であり、口径 31 cm、腹径 28.5 cm を測る。庄内期後半に属する。

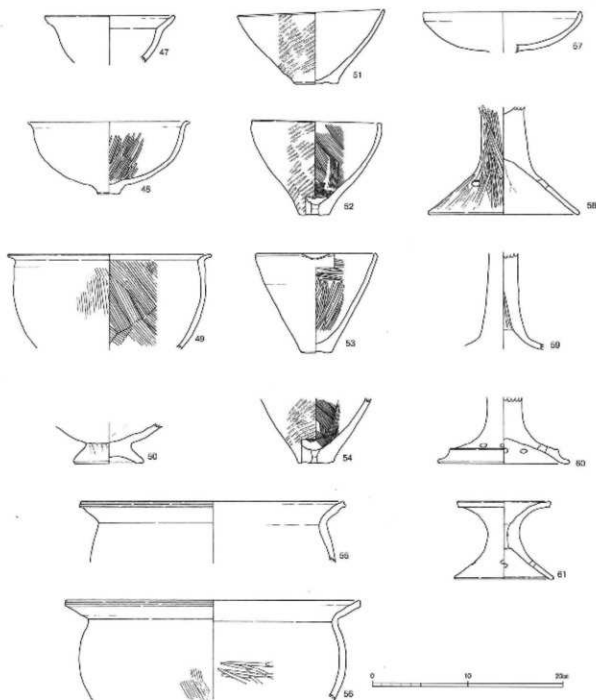
52・53 は直口鉢である。52 は口径 13.6 cm、器高 10 cm を測る。器面調整は口縁端部に雑なヨコナデ、体部外面に細いタタキを消すナデ、体部内面にハケが施されている。口縁部は僅かに内湾しており、端部は面をもたない。底部は焼成前に穿孔されている。53 は細長い片口鉢である。器面調整は口縁端部にヨコナデ、体部外面にナデ、体部内面には口縁付近に横方向のヘラミガキ、その下に縦方向のヘラミガキが施されている。口径 13.7 cm、器高 10.5 cm を測る。色調は淡赤灰色を呈する。

16・50・54 は鉢の底部である。50 は底部に短い脚をもつ。54 は 52 と同様に体部外面に細いタタキを消すナデ、体部内面にハケが施されており、底部に穿孔されている。

57 は碗型の杯部をもつ高杯である。杯部に円盤充填の痕跡が残る。杯部内面にヘラミガキが施されている。茶灰色を呈し、粒子の細かい胎土をもつ。口径 16.7 cm を測る。58 は中実で門柱状の頸部から脚が直線的に開く高杯の脚部である。外面に縦方向のヘラミガキが施されている。脚径 16.3 cm を測る。

4 号河道からは畿内第 V 様式後半の土器が出土した。これらの土器は河道に廃棄されたものが堆積したとみられる。そのなかで完全な形で出土した甕 66 と 67 は流路中央にあった切株付近で検出されており、その周辺で祭祀などに使用された可能性も考えられる。

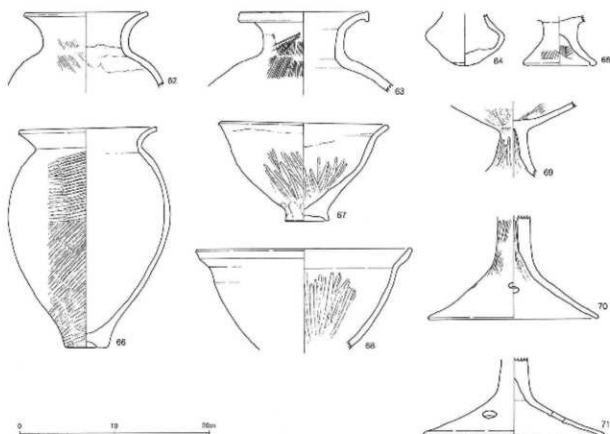
62・63 は広口壺である。62 は大きく外反する口縁をもつ。体部から口縁外面にかけて縦方向のハケが施され、口縁のみヨコナデでハケをナデ消している。口縁部内面は板目の残るナデ調整である。体部内面はナデが施されているが粘土紐の接合痕が残る。口縁端部を一部欠損するが、頸部は完存しており、口径 12.6 cm を測る。灰白色を呈する。63 はわずかに開く短い頸部から大きく外反する口縁部をもつ。口縁端部は三方からの強いヨコナデが施され、条線をもつ面をなし、端部内面に浅い凹面をもつ。頸部外面はハケ調整のあと、横方向の条線を残すナデが施されている。頸部外面には斜め上方を向く矢印のようなヘラ記号が記されている。体部外面には縦方向のヘラミガキがみられる。頸部内面には横方向のヘラミガキが密に施されており、体部内面には指頭圧痕が残る。口縁部は完形であり、口径 13.4 cm を測る。第 V 様式後半 1 段階である。



第152図 出土遺物実測図(3) 1/4

64 は算盤玉形の体部をもつ小型の壺である。底部は丸みを帯びた尖底である。体部は完形であり、腹径 5.4 cm を測る。底部は厚い。

65 は鉢の脚部片である。脚部外面には縦方向のハケがみられ、内面にはハケによるクモの巣状調整痕がみられる。脚部は折り返しただけの粗雑な調整がなされている。脚部は完形であり、径 8.8 cm を測る。褐色を呈する在地の土器である。



遺物出土遺情

河運2 1

河運3 3, 4, 6, 9, 10, 11, 13, 16, 17, 22, 23, 24, 25, 27, 28, 30, 33, 36, 37, 38, 40, 43, 45, 46, 47, 48, 49, 55, 56, 59,

61, 66

河運3様式通称 5, 12, 21, 29, 35, 51, 60

河運3(前半分) 2, 7, 8, 14, 15, 18, 19, 20, 26, 31, 32, 34, 39, 41, 42, 44, 50, 52, 53, 54, 57, 58

河運4 62, 68, 69, 71

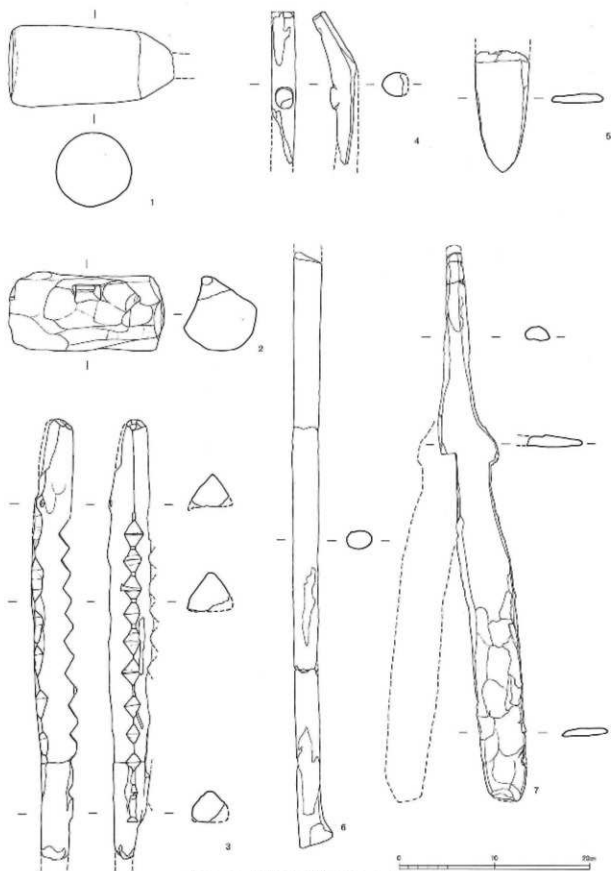
河運4(後半分) 63, 64, 65, 67, 70

第 153 図 出土遺物実測図 (4) 1 / 4

66 は体部外面に右上がりのタタキメをもつ中型の甕である。体部は2分割で成形されており、最大腹径が体部上位にくる。底部は輪台技法で作られており、中央が凹んでいる。口径 14.2 cm、器高 23.1 cm、最大腹径 16.9 cmを測る甕形品である。

67・68 は胴部の張りが少ない椀形の体部と外反する口縁をもつ鉢である。67 は体部に2条の粘土紐を貼り付けて緩く外反する難な口縁を作っており、端部に面をもつ。体部の内面・外面には放射状のヘラミガキが施されている。底部は端部を強く掘み出されて中央が凹む。ほぼ完形品であり、口径 17.5 cm、器高 10.5 cmを測る。第V様式後半-2〜3段階である。68 は有段の口縁をもつ鉢である。体部には黒斑がみられ、内面に縦方向のヘラミガキ、外面に不整のヘラミガキが施されている。破片であり、口径 22.6 cmを測る。V様式後半-2段階である。

69 は高杯の杯部から脚柱部の破片である。杯部内外面と脚柱部外面に縦方向のヘラミガキが施され、脚柱部内面に絞り目が残る。灰白色を呈する。70・71 は円柱状の脚柱部から脚部が直線的に開く器形をもつ。外面には縦方向のヘラミガキがみられる。70 は脚の四方向に円形の透かし孔をもつ。破片であり、脚径 17.7 cmを測る。第V様式後半-2〜3段階に属する。71 は脚の三方向に大きめの円形透かし孔をもつ。脚柱部上半が中実である。脚



第154圖 出土遺物実測圖 (5) 1 / 4

径は19.2 cmを測る。

中世の水田に伴う遺物は、土師器・瓦器・青磁・白磁の細片が出土した。いずれも細片であるため図化できなかったが、蓮弁文をもつ龍泉窯系の青磁碗や同安窯系の青磁皿、口禿の白磁碗なども含まれていた。また、水田に伴う3号溝からは土師器皿73が出土した。73は口径15.6 cm、器高3.1 cmを測る中皿である。器面調整は口縁部にヨコナデ、体部内面にナデ、体部外面に指頭瓦痕を滑すナデが施されている。

B. 木器

木製品は、その大半が3号河道から出土した。これらは鎌や横鋤、木鐮などの農具のほか、木皿や箱、杭などがみられる。これらは自然木とともに河道を流されてきたものや塚状遺構に転用されていたものである（第154・155図、図版115）。

1は柄を欠損するものの、太く短い敲打部をもつ横槌である。敲打部の直径8.6 cm、残存長17.4 cmを測る。渡辺分類のDタイプ〔渡辺1985〕である。3号河道より出土した。

2は輪切りにした芯持ち材の側面中央に芯から外して紐通し孔を穿った木鐮である。紐通し孔の周辺がノミを使って平らに削られており、紐通し孔は長方形を呈する。渡辺分類のIYb型〔渡辺1981〕に属する。長さ16.1 cm、直径8.1 cmを測る。紐通し孔は2.6 cm、幅1.5 cmを測る。3号河道中央から出土した。

3は断面三角形の角材の角の三方に刻み目をもつ不明木製品である。刻み目は二方が深くV字状を呈し、他の一方は浅く幅広い刻み目となっている。刻み目は浅い刻みをもつ角に6ヶ所、深い刻みの角に11ヶ所認められる。浅い刻み目側には刻み目の端に直径3 cmの円孔があり、紐などを通したものとみられる。下端部を欠損しており、残存長45.9 cm、幅4.6 cmを測る。用途としては編み台の目盛り板や呪術に使用した「ササラ」などが考えられる。3号河道中央の南岸付近から出土した。

4は鍔反柄の破片である。弯曲した材の外寄部の一端を平坦に削り着装面としており、背面に円形の縄かけが作り出されている。柄の直径2.5 cmを測る。3号河道より出土。

5・7は鎌身である。5は幅5.3 cmを測る刃部の破片である。7は長さ57.5 cmを測るナスビ形の曲柄又鎌である。笠の下のかげれから外弯しながら幅を増し、刃部の途中で屈曲して刃縁に至る曲柄又鎌DⅢ式に属する。刃部の半分を欠損している。刃部幅は5 cmを測る。3号河道より出土。

6は残存長62 cm、直径2.7 cmを測る柄である。先端に持手がつく。3号河道の塚状遺構に転用されていた。

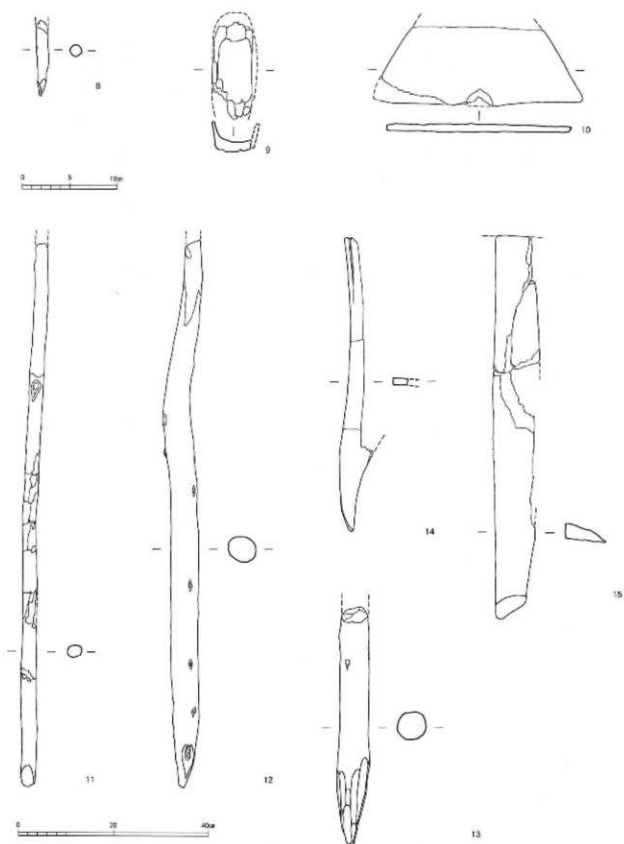
8は直径1.2 cmを測る枝材の下端を削り尖らせた木製品である。残存長7.8 cmを測る。3号河道より出土。

9は楕円形の皿である。内面にノミ痕が残る、外面の一部が焦げて欠損している。残存長10 cm、幅4 cm、高さ3.1 cmを測る。3号河道より出土。

10は上半を欠損するが、台形を呈する板材である。裏面にノミ痕が残る。裏面の端に側面へ抜ける紐通し穴がみられ、四方転びの箱の側板と考えられる。幅19.3 cm、厚さ0.8 cmを測る。

11～13は杭である。11は直径3.5 cm、残存長113 cmの棒の先端を一方から斜めに削り落として杭先としたものである。12・13は丸太材の先端を多方向から削り杭先としたもので、12は直径5.7 cm、残存長114.3 cm、13は直径5.9 cm、残存長49.2 cmを測る。11～13はいずれも3号河道から流された状態で検出された。

14・15は板材である。14はカーブを描く塗り込みがみられる。残存長61 cm、厚さ1.8 cmを測る。15は残存長88 cmを測る板材である。用途は不明。



第 155 図 出土遺物実測図 (6) 1 / 4・1 / 8

C. 土器—追加整理実測分

大量に出土した土器類は、弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の時期のものが主体であるが、これらについては、森岡秀人・木南アツチが担当して追加整理の作業を加え、極力図化に努めた。以下、遺構ごとに遺物内容を記載する。

1号河道 72は、凹基無茎式のサマカイト製打製石甕である。剥離面の色調は黒灰色を帯びており、おそらく二上山産の原材を用いたものと思われる。阿波線および基部は鋸歯状に調整剥離を加えており、断面型は菱形を呈する。残存長2.5cm、基部幅1.8cmを測る。73・74については、(5)出土遺物のA.土器、1号河道の項において既にふれているので、ここでは割愛する。

2号河道(東半分) 11点の資料を測図したので、補足する。75は、小型の甕か鉢である。口径13cmを測り、口縁部はヨコナデにより外反させ、端部はやや丸く仕上げられる。体部外面に施されるタタキは、上位を右上がりに下位を左上がりに叩き込んでいる。内面には斜め方向調整の線条痕が認められる。76～85は、底部を一括した。77・78は壺、76・79～82は甕、器壁の薄い83と底部中央が穿孔される84・85は鉢とみられる。有孔鉢2点を除いて、その他の底部は直径2.6cmから5cmに収まる小さな平底を呈するものが多く、中央にやや凹みをみる上げ底状のものも含まれる。79には製作手法を示す葉脈痕が認められる。器壁は内面にナデ・ハケメ、外面にナデ・細かいタタキを施す。いずれも在地産と思われる淡黄灰色・淡橙灰色系の色調を呈しており、庄内式併行期の範疇に収まるものであろう。

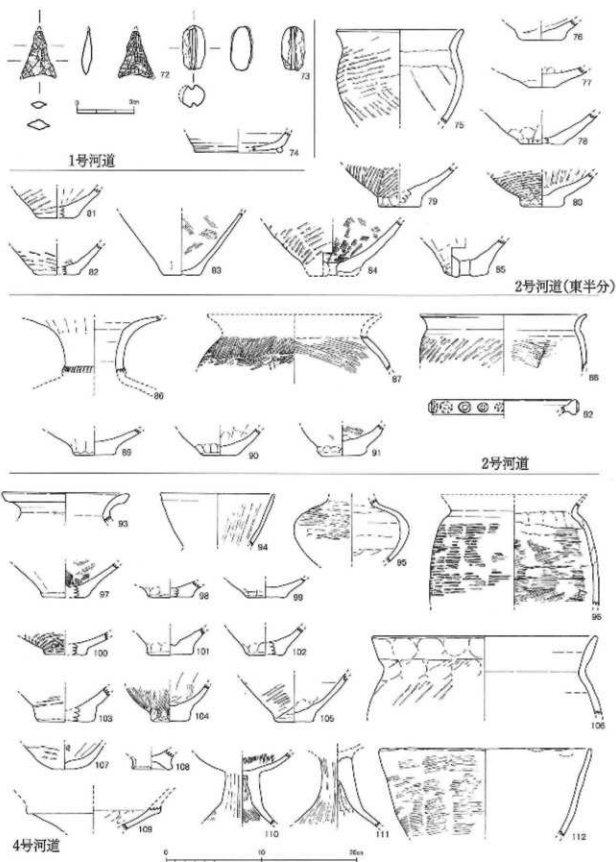
2号河道 7点の資料を追加した。86は、甕である。二重口縁甕あるいは単純口縁の広口甕の口頸部と思われる。胴部との境、頸部の最下端に貼付突帯を巡らせ、突帯上に櫛先列点文を配する。87・88は、甕である。87は外面の一次調整が細かなタテハケであり、のち叩いて最終仕上げをする。頸部付近での復元径は15cmを測る。88は、外面に右上がりのタタキを施す。弱い外反口縁を有し、端部は丸くおさめる。復元径17.2cmを測る。89～91は、壺・鉢類の底部であり、いずれも平底をもつ。92は、器台口縁部の残欠片である。端部を上下に拡張し、端面に竹管文を伴った円形浮文を貼り巡らせている。灰褐色を呈し、赤色酸化粒が散見され、かなり軟質な胎土は、在地のものとは明らかに異なるもので、北摂地域周辺からの瀬入品と推定される。

4号河道 遺物量の最も多い3号河道は後述することとし、次に4号河道出土遺物について、記述する。20点の資料を補い得た。

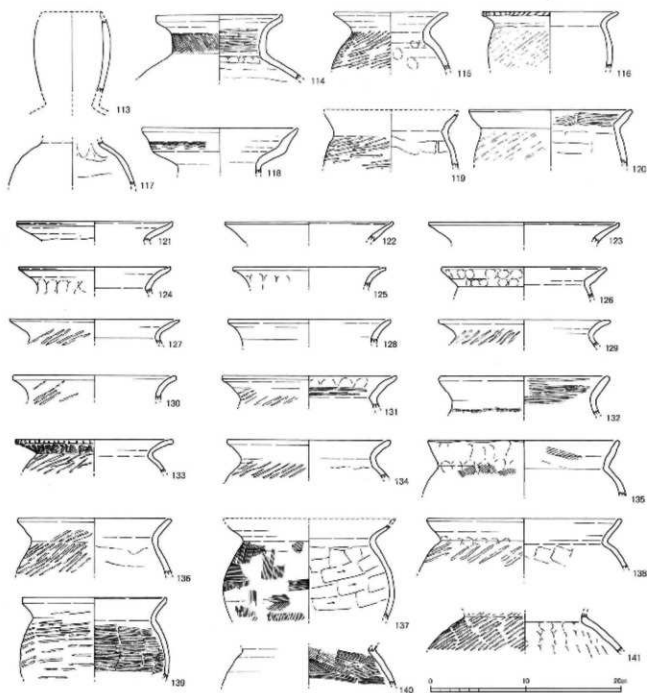
93～95は、甕である。93は広口甕で、頸部で短く屈曲し、口縁部は外反する。端部は肥厚し、強いヨコナデによって広い面を成す。復元口径13cmを測る。94は布置式に連なる要素をもつ直口の甕で、頸部からやや内弯ぎみに上方にのびる口縁部を有する。頸部付近で心も屈曲し、口径は12cmを測る。外面はナデ調整、内面は放射状にヘラミガキし、調整する。胎土中には金雲母が散見される。庄内式併行期の新相に器種としての定着がみられる。95は径4.6cmの細い頸部をもち、練甕になる可能性が高い。胴部は肩平で、底も丸底化の兆しをもつものと思われる。外面上部をていねいにヘラミガキし、下部はヘラケズリする。

96・106は、甕である。96は外面をほぼ水平方向に細かいタタキで成形し、内面は横もしくは斜め方向にハケ調整を加える。106は指頭による粘土帯の積み上げを行ったのち、タタキを施して成形し、かなり粗雑な仕上げとなる。口縁部にはぶく「く」の字に曲がるもので、上部3分の2は肥厚ぎみに終わる。復元口径23.2cmを測る。

97～108は、壺・甕・鉢などの底部である。97～99は甕、100・103・105は甕、他は鉢になる可能性が高い。112は、直口の大型鉢である。復元口径22.2cmを計測する。底部は不明であるが、小さな平底ないしはボール状の丸底になるものと想像される。外面には細かいタタキがほぼ水平方向に密に施される。109～111は、高杯である。109

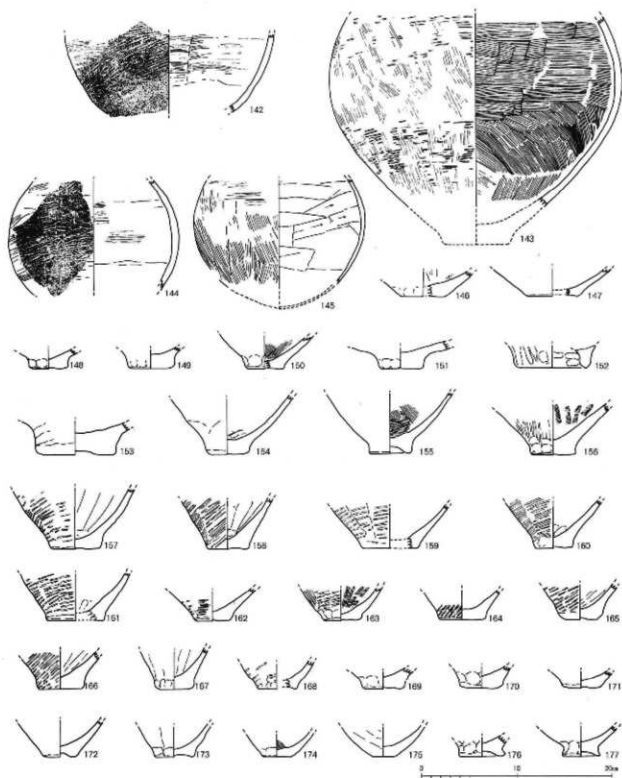


第 156 図 出土遺物実測図 (7) 1 / 4・1 / 2 1・2・4・号河道



第 157 図 出土遺物実測図 (8) 1 / 4 3 号河道①

は杯部の残欠で、稜を形成して外反する有稜高杯とみられる。口縁部は強く外側に外反しながら開くものと思われ、第Ⅴ様式の開き方とは異なる。縁から脚柱基部までの比高がさほど縮まっていないことから、庄内式併行期の中でも古相に比定してよいであろう。110 は桃形の杯部を有するもので、脚柱部は中空、裾部へは弱い屈折点をもって移行する。111 は上部が中実ぎみとなる脚柱部で、裾部へはなだらかに移る。2 点ともに外面をヘラミガキ、内面には絞りが認められる。4 号河道の補足遺物については、目立って胎土・色調の異なるものは認められず、概ね在地産とみられよう。



第158図 出土遺物実測図(9) 1/4 3号河道②

3号河道 81点の資料を補っている。器種として甕・甕・鉢・高杯・器台などがあるが、甕が最も多く、他の器種は少ない。

113は、紅頸甕の頸部である。細い頸部から上方へ幾分内弯ぎみにのびて口縁部に至るのである。全体にナ

デ調整が施され、淡灰黄色を呈する。庄内式併行期段階に特有の器形を示す細頸壺とみられる。114は広口壺。直立する短い頸部に外反する口縁部が付く。口縁端部は立ち上がりをもみせ、端部は丸くおさめる。復元口径は13.4 cm、頸部での径は10 cmぐらいになる。器面調整は、頸部外面が斜め方向、内面は横方向のヘラミガキでていねいに施されている。117は細頸壺の肩部であろう。113に比べやや灰色が強く、やや薄作りである。118は、複合口縁壺の口縁部である。口縁部直下の加飾は著しくなく、起伏の弱い波状文が数条施されているのみである。色調は黄白色を呈し、胎土は緻密である。113と同時期のものと考えてよい。

115・116・119～145は、壺の口縁部および体部を一括している。115は、なだらかに変化する頸部から外上方へと伸びる口縁部を有する。器体外面には右上がりの平行タタキが施されているが、器壁は厚ぼったい。116は、口縁端部に刻み目状のタタキを有する。口縁部は磨滅により調整が不明瞭である。口縁部の技法は、紀伊・淡路方面に類例をみる。また、在地産の胎土に比べ橙色が強く、白色粗砂粒が目立っている。121～123・126については、口縁端部に指頭によるつまみあげがなされ、縦凹線が巡る。いわゆる「庄内壺」の口縁作出テクニックの模倣品ないし影響品で、121・122は口径16 cm、123は20 cm、126は17 cmを測る。124・125・127～132・134については外反する口縁部、丸い口縁端部、タタキ・ハケ・ナデ等の調整が施され、頸部のゆるい「く」の字口縁の作風から、庄内式併行期のものとみてよい。133は116と同様、口縁端部の最終調整にタタキを伴っているが、タタキ成形したのち、口縁部外面に簾状に展開するハケメを伴う点が異なる。135は106と類似した指頭圧調整を口縁部に伴い、立ち上がりや作りもやや異質である。137は、内湾ぎみの口縁部をもち、肩部の張りが顕著に認められる壺である。外面には縦方向の細いハケ調整、内面には右上がりのヘラケズリが施され、薄く仕上げる努力が認められるも、器厚は5 mm以上ある。布留式期直前のものとみてよいが、布留式期(最古相)の口縁形態を獲得している。140は肩部のみの破片。92の胎土と近似し、樹入品の可能性がある。外面の調整は磨滅により不明。141は球形に近い体部の壺で、外面はタタキ、内面には数段の指頭圧を伴う。

142～145は、壺体部の比較的大きな破片を一括した。調整は外面に縦タタキだけのもの(142・144)とハケ調整を加えるもの(143・145)とに分かれ、内面はヘラケズリによって器壁を薄く仕上げるもの(145)以外は、横方向のハケ調整などが用いられる。142・144・145については卵球形、ないし球形を呈し、いわゆる庄内形特有の器形を保持する。143については、体部下方への湾曲が著しくないことから、平底をもつものとみられる。

146～177は、壺・甕・鉢の底部を一括した。176・177の高台状の上げ底をもつ鉢については、周縁に顕著な指頭圧痕をとどめる。146・147・151～153は壺とみられ、157～166・168は甕であろう。その他は、鉢でない一部署の底が含まれよう。

178・179は、鉢の口縁部とみている。178は外上方へ伸びる直口タイプのもので、口縁端部外面に強いヨコナデが加えられる。復元口径18 cmを測り、淡灰茶色を呈する。179は、内湾する体部から、弱い「く」の字状に屈曲し、口縁端部は丸くおさめられている。口径19.2 cmを測る。外面の縦方向のナデが顕著で、他はヨコナデによる調整である。庄内式期のものとみられる。

180～184は、外反する口縁をもつ有稜高杯の杯部である。180・181の口縁端部は、強いナデによって平面を成している。181の杯部は口縁の外反度も少なく、杯底部が深く、畿内第Ⅴ様式段階に属するものである。180は復元口径16.6 cm、181は同口径17 cmを測り、淡灰黄色を呈する。調整はヨコナデ。182は杯底部が平たくなったもので、183では稜よりも上位で、杯部の高さのほとんどを占め、扁平な杯底部は庄内式併行期の中でも新相になって型式化する。それぞれ淡灰茶・淡灰橙色を呈し、復元口径は18.4 cm・21.0 cmを測る。ヨコナデを主たる調整とし、若干指頭圧痕も看取される。184は、高杯とみた。杯底部境の稜から口縁端部までは短く、内面にはヘラミガ

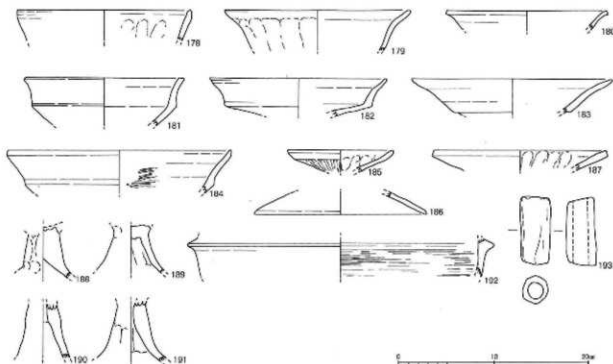
キが施されている。復元口径 23.3 cm を測り、淡灰褐色を呈する。口縁端の立ち上がりの特徴から、庄内式併行期の中で考えておきたい。

185・187 は、器台と思われる。185 は小型器台で、浅く扁平な受部は少し内弯きみで、口縁端部を僅かに立ち上げらせる。外面の下の方にていねいなヘラミガキを施す。復元口径 11 cm。187 は口縁部が直線的に開くが、体部は直立するものとみられる。復元口径は 18 cm を測る。庄内式段階にみられる器形である。186 は、復元底径 18 cm を測る脚座部である。

188～191 は、高杯の脚柱部である。いずれも裾部を欠くが、柱部が短くなる点で共通する。188 は中実に近い、屈曲きみの変化点を下部にもつ。189 は中空で、杯部はなだらかに広がる形態と考える。190・191 は杯底部が抜けている。

192 は、器種不明の大型品である。断面三角形の突帯を貼り巡らせ、外面はナデ、内面はヨコハケによって調整される。混入品の可能性も考えられるが、相伴したものととして掲載した。器種としては大型の鉢が考えられる。193 は、管状土罐である。長さ 6.1 cm・胴径 3.3 cm を測り、孔径も 1.6 cm と大きい。一般的に弥生時代の後期に入ると瀬戸内海の沿岸では、定置（地曳）網の大型化に伴い、孔径 1.6 cm よりも大きい管状土罐が多く使用されるようである。193 もそれにみれず、伴出土器と矛盾しない時期のものともみて誤りなからう。

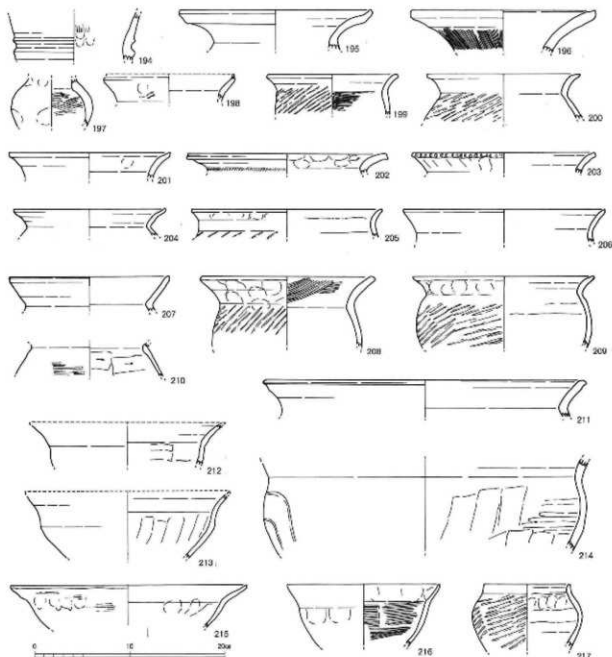
3号河道（東半部） 194 は、弥生土器大口壺もしくは直口壺の頸部である。頸部下端で径 12 cm を測り、外面には断面三角形の貼付突帯が2条巡る。突帯の調整にはヨコナデを施しているようである。内面は縦方向のユビナデのち、上方へ向かうハケメが僅かに認められる。外上方へと直にのびる口頸部をもつ場合は、直口壺になるものと思われ、畿内第Ⅲ様式に比定できる。淡黄灰色を呈し、胎土中には石英・長石などが若干含まれる。195・196 は、広口壺の口縁部である。195 は口縁端部を屈曲させ上方へ立ち上げさせたものでやや受け口状に作出する。復元口径 20 cm を測る。196 は口頸部に縦方向のハケ調整を施したもので、口径 19.1 cm を測る。口縁端部は



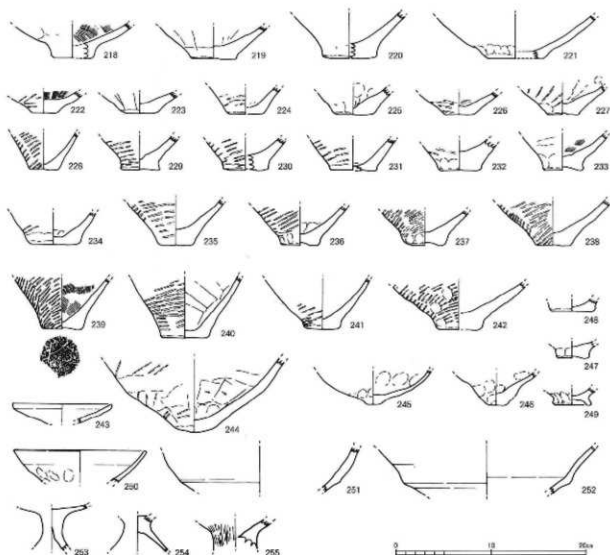
第 159 図 出土遺物実測図 (10) 1 / 4 3号河道③

外面にヨコナデを加えるが、内面側にも狭い幅で周縁にナデ痕が巡る。198は重が毫か判らない。口縁端部にシャープな立ち上がりをもせるもので、端部を指先でつまみあげながらヨコナデを加えたもの。

199～211は甕の口縁部および頸体部である。外反するナデあるいは指頭圧によって仕上げられる口縁をもち、端部の丸いもの(199～201・205・209)が多く、口径は16～20 cmにおさまる。外面を右上がりの平行タタキが施され、内面にヨコハケを伴うものもみられる。いずれの胎土・色調も在地のもので、庄内式併行期に比定し得よう。202は端部に細い擬凹線が巡る。203は、前述の133と同様の手法と思われる。磨滅により糜状のハケメは不明瞭で、ハケ調整の始点のみ確認された。復元口径19 cmを測る。207の口縁部は内湾しており、布留式期の態様を具する。復元口径17 cmを測る。210は肩部の破片である。棚壁はケズリにより薄く仕上がっており、内面は横方向



第160図 出土遺物実測図(11) 1/4 3号河道④(東半分)



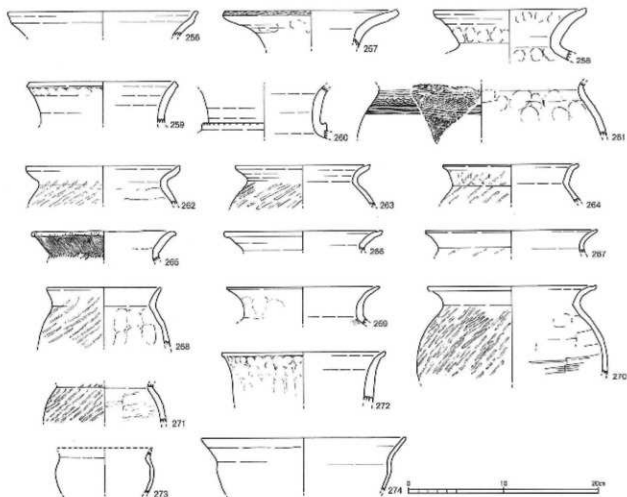
第 161 図 出土遺物実測図・拓影 (12) 1 / 4 3 号河道⑤ (東半分)

の痕跡がみられる。外面の横方向のハケメは布留式最古相によくみられる技法であり、207 の存在などから、この段階の土器も伴う可能性がある。211 は口径 33.4 cm の大型品である。頸部で屈曲したのち、外反する口縁部はナデ調整により調整される。大型鉢の可能性も高い。214 も大型鉢とみられ、頸部部分の径 33.8 cm を測る。頸部のすばまりが弱く、口縁は外反する。肩部に「U」の字形の把手が付されていたようで、その剥離した痕跡だけが残る。内面は横方向のヘラミガキと縦方向の板ナデが併用される。

212・213・215・216 は、215 を除き、半球形の体部から頸部で屈曲し、内弯しながら開く口縁部をもつ鉢である。庄内式併行期に多くみられるもので、215 は器高が低く、扁平であることから他より新くなる可能性がある。217 は短頸の小型鉢と思われる。復元口径 9.2 cm を測り、外面には細かい平行タタキを有する。類品の少ないかなり特殊な器形である。

218～242・244～249 は、壺・甕・鉢の底部を一括掲載した。218～221 は壺とみてよい。244～246 は尖底化している。243 は、小型器台である。185 と同じタイプに属し、復元口径は 10.4 cm。端面には強いヨコナデを伴う。立ち上がりはほとんどない。

250～255 は、高杯である。250 は、口径 14 cm を測る椀形高杯で、淡黄灰色を呈するものの、石粒が見られず、精緻



第162図 出土遺物実測図・拓影(13) 1/4 3号河道⑥(埴状遺構)

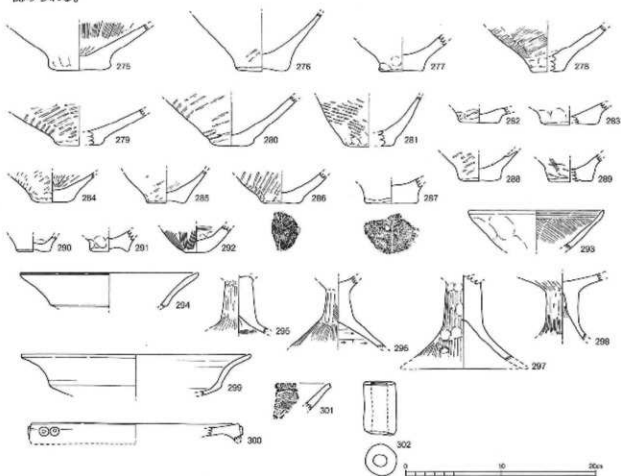
な胎土を示す。251・252は有稜高杯である。251は稜の直上が内湾しているため、口縁部に至るまでに段をもつ有段高杯とも考えられる。252は稜からゆるやかに大きく開く口縁部を有するもので、庄内式併行期の中でも古い位置を占める。253は、高杯の脚柱部である。椀形の杯部をもつものと思われる。庄内式併行期のものではあろう。254は、低脚の脚柱部である。やや中実ぐみで庄内式併行期に多くみられるものである。器台の可能性もある。255は頸部径4.8 cmを測り、おそらく中実をなすものと思われる。外面にははいねいなヘラミガキが施される。大きな杯部を有するものと想像される。

3号河道(埴状遺構) 埴状遺構周辺で出土した土器を一括した。256～260は、壺である。256は、外反する口縁部からさらに屈曲をみ、上方へと立ち上がる広口壺。復元口径20 cmを測り、淡灰黄色を呈する。257は、口縁端部が角頭を成し、櫛描きの波状文が施される。復元口径18 cmを測る。258も在地産の広口壺である。259は、短頸壺である。わずかに外反しながら外上方へのび、口縁部端面は強いヨコナデが施され、明瞭な端面を形成する。260は、壺の頸部である。口縁部は二重口縁になる可能性も高い。頸部下端に突帯を貼り付け、その上角をヘラにより刻んでいる。頸部の径は13 cm前後を測る。261は大型の壺の断片である。推定径21.4 cmを測る太い頸部直下に櫛描きによる直線文・波状文を交互に加飾し、調整はナデ・指頭圧を行う。畿内第Ⅲ様式に属するもので、壺72などと時期的関連がある。262～271は、壺の口縁部や胴部の破片である。3号河道やその東半部と同様、庄内式併行期

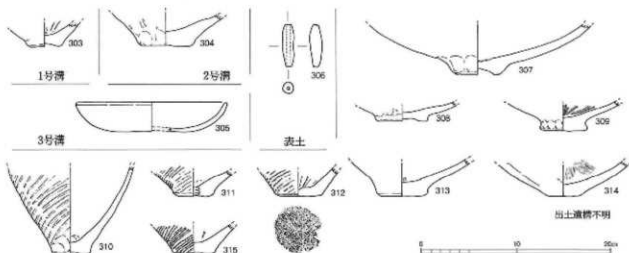
のものを中心に、淡路産の掘入品も認められる(265)。272～274は、鉢である。272は直線的な器壁をもち、外反する口縁部は先端が細くなる。復元口径17cmを測る。273は、やや内弯ぎみの短い口縁を有する小型鉢である。胴部外面はナデによって丸く仕上げられる。274は半球形の体部と外上方へ直線的にのびる口縁を有するタイプの鉢で、口径21.4cm、淡黄灰色を呈する。

275～292は底部をまとめて掲載した。275や277は産になるだろう。その他は甕や鉢とみられ、外面はナデ調整を行っているものの他に、右上がりの平行タタキが施されるものも多い。中には煤化により不鮮明ではあるが稠密に叩き込まれるもの(278)や、左上がりのもの(281)、縦方向のハケ調整を伴うもの(282)などがみられる。

293～299は、高杯である。293は、桃形高杯。外面はナデののち指頭圧痕が認められる。口径14.1cmを測る。器壁は直線的で口縁部内面には横方向のヘラミガキが巡る。おそらく庄内式併行期のものと思われる。294は、杯部の外反度がかなり弱まり、直線化の兆しをみせる。復元口径18.8cmを測る。92・140と同じく胎土は淡赤褐色を呈し、赤色酸化粒が目立つ。北摂地域からの掘入品とみてよいだろう。299は、杯部の外反度が著しいV様式系の杯部をもつもので、内外面はヨコナデ調整される。295～298は脚裾部である。296は外面をハケ調整とヘラミガキを併用するが、その他はヘラミガキのみを用いる。とくに298に至っては、かなり密に施されているようである。裾部内面は295が絞り目及びハケメ、296が横方向にヘラケズリ、297は絞り目のみ、298はナデ調整及び絞り目が認められる。



第163図 出土遺物実測図・拓影(14) 1/4 3号河道⑦(雁状遺構)



第164図 出土遺物実測図・拓影(15) 1/4 その他の遺構

300は、器台である。受部上面はナデによって平坦に仕上げられる。口縁周縁は垂下し、貼り付けの円形浮文を2個1対にして配する。301は、口縁部に波状文をもつ。302は、管状土罐である。長さ5.6cm、胴径3.2cm、孔径1.4cmを測る。既述の土錐193と法量の面で大差ない資料である。時期的にもおそらく同じ頃のものであろう。

1号溝 鉢の底部である。底径3.6cmを測り、上げ底状である。内面底部にはへらによる圧痕が数本認められる。淡灰黄色を呈する(303)。

2号溝 壺の底部である。底径5cm程の平底をなす(304)。

3号溝 口径15cmを測る土師皿である。淡黄褐色を呈し、ナデ調整により成形される。12世紀前半のものとと思われる(305)。

表土 管状土罐である。淡橙茶色を呈し、長さ4.5cm、胴径1.1cm、孔径0.35cmを測る。時期的には中世以降に下る可能性もある(306)。

出土遺構不明 307～315は、壺・甕・鉢の底部と考えられる。底部の形態は上げ底状のもの(307・308・310・311・315)と、平底のもの(309・312～315)とに分けられる。307は大型品になるものと推される。

以上、概観してきた遺物の隔年の年代的な位置づけや地域性に関する考証は、第8章においてあらためて取り上げる。

(矢口・北原・森岡)

第4節 まとめと今後の課題

(1) 打出岸造り遺跡とその周辺地域からみた扇状地の環境変化

芦屋市街地の北部を構成する芦屋川や宮川によって形成された台地上は、遺跡の分布が密であり、芦屋廃寺・月若・寺田・栗平遺跡などに代表される複合遺跡群が立地している。打出岸造り遺跡は栗平遺跡、大原遺跡とともに扇状地の末端部に位置し、遺跡を構成する堆積層は洪水堆積物を主とする扇状地堆積物である。

阪神・淡路大震災の復興事業に伴う発掘調査において、筆者は芦屋市内の各地の発掘調査に従事する機会があった。扇状地の扇端部に当たる栗平遺跡は、縄文時代前期の地表面が洪水堆積物に覆われ、その上位には弥生～古墳時代にかけて断続的に堆積した洪水堆積物が分布している。扇状地の東南部に位置する打出小樋遺跡で

は、今回の震災復興の調査で縄文時代、縄文時代晩期～古墳時代初頭にかけて堆積した洪水堆積物と幅数mに及ぶ埋積谷が検出されている。

打出岸造り遺跡（第9地点や第1地点など）では、後述する大溝の可能性のある河道が検出され、弥生時代～古墳時代初頭にかけて断続的に堆積した洪水堆積物と埋積谷の形成が認められた。

芦屋川と宮川より形成された扇状地面に広がる遺跡群に分布する堆積物を概観すると、弥生～古墳時代に埋積谷の形成、洪水堆積物の形成といった要因で扇状地が拡大するステージが認められる。また古墳～平安時代にやや安定化した土壌化面（黒色土の形成）の形成期が一部に認められ、中世前半には土石流堆積物や洪水堆積物が各地でみられたことから、扇状地のさらなる拡大期は平安時代以降であることがわかる。

一般に山麓の扇状地形成は、小氷期などの気候の変動要素による植生変化・岩屑生産期、地震などによる斜面災害の多発期、人為的開発行為による森林破壊を原因とする斜面災害の多発期などに密接に関わる可能性が高いが、今回の事例は時代ごとの堆積物の供給源に関する資料が乏しく、現時点での主因の特定は困難である。

しかし、打出岸造り遺跡や豪平遺跡、打出小竈遺跡などで検出された埋積谷は、概ね弥生時代後期には埋積を終了した谷から成り、その形成期は縄文時代に遡る可能性が高い。このような埋積谷の例は愛知県の瓜郷遺跡ではじめて注目され〔井関 1963〕東海地方をはじめとする日本列島の沿岸各地で一般的に認められ、「埋積浅谷」〔井関 1983〕と呼ばれている。今回、芦屋でみられた埋積谷も、縄文後期から弥生時代の低海面期に形成された谷が、その後の海面上昇に伴って急速に埋積されたため形成されたものと考えられる。当遺跡で検出された4～2号河道は、河道外に流出した洪水堆積物を伴っており、小規模な自然堤防を形成しながら谷の埋積と氾濫原の形成を繰り返したことが読みとれる。今後類型を増やすことにより、六甲山麓の扇状地の形成史を解明する資料になるものと思われる。

このような沿岸域の扇状地の形成過程や埋積谷の変遷は、六甲山麓の自然史（海面変動・気候変動）と人類史（土地開発）が相互に関連しながら成り立っていると考えられ、大変興味深い。今後、遺跡での災害考古学的な観点での地質断面の検討や、花粉・植物珪酸体分析による植生史の解明を進め、山麓扇状地の総合的な歴史解明を遺跡を素材にして進める必要があるように思われる。

（2）大溝としての河川跡

今回初めて、当遺跡から弥生時代末～古墳時代初頭にかけて埋積した河川跡が発見され、たくさんの遺物が出土した。河川跡は偶然発見されたわけではなく、上面の試掘溝によってその存在が予想され、横幅数m余りの規模から考えて、深さが1mを超える大きさになる可能性が十分あり得ることを予想した。この遺溝は、検出時の当初から、自然の河川流路もしくは人為的な流路（いわゆる大溝）のいずれかであることを特定することを調査目標の一項目に加え、発掘を進めた。

前者の自然河川の場合、現在の芦屋川や宮川の流量規模の河川が考えられ、宮川の旧流路が想定された。また、後者の場合は、自然河川が何らかの人為的地形改変行為を伴っていることが予想されるため、担当者らは慎重を期しながら調査を進めることを話し合った。

河川跡が人工流路である場合、流路が通常の溝などでみられる地形改変の形状を観察できることや杭や矢板、井堰、階段などの流路管理施設が確認できること。また、河川堆積物の堆積環境から人為的な作用、例えばせき止め作用による堆積層などが認められるなどの諸条件のいくつかが発掘時に認識できるであろう。このような問題提起を前提にしながら、調査を進めることができた。

調査の結果、河川の側壁は比較的に急な斜面で構成され、杭や矢板などの施設はみられないものの、直線形状

を示す側壁の造りが多く感じられた。また通常この規模の自然河川に比べ、4～2号河道の堆積物の埋積速度が比較的速いのではないかといった見方もあげられた。少なくとも3号河道内に堰状遺構が確認されたことから、河道のある時点で人為的な行為が河川内で行われたことは確実と考えられる。

こうして得られた観察結果を総合すると、河川跡は人為的な地形改変により形成された流路であると直接認定は出来ないものの、宮川の扇状地内流路にしては規模や堆積速度の点で自然流路と呼ぶには不可解な点が多いと思われる。現時点では、この遺構が人工流路である可能性も否定し得ないと判断している。

調査担当者は、この河川跡を“大溝の可能性のある河川跡”と呼ぶことにし、今後の当遺跡の発掘調査において、上・下流の延長部がこのような観点で発掘調査されることを提案し、今後の調査に期待するものとした。

(矢口・北原)

第7章 久保遺跡（第15地点）の発掘調査

第1節 調査に至る経過

芦屋市親王塚町65番地に所在する当該地（敷地面積759.6㎡）は、平成7年1月17日未明に発生した阪神・淡路大震災により家屋が倒壊し、住宅の再建が急がれた。計画建物は鉄筋コンクリート造4階建て集合住宅で、既存建物と規模・構造を異にする建築物のため、遺構や遺物包含層に影響が出ることが予測された。当該地点は中世の水田造成面の検出や前後する時期の遺物が出土した第1次地点〔芦屋市教委1987〕に近接していることから、それらの遺構が連続することが予測された。文化財保護法第57条の2第1項に関する届出は、地権者・細谷太一氏より平成7年10月13日付（芦教社文第341号）で本市教育委員会に提出されている（図版116上）。

本市教育委員会は平成7年12月4・5日に土層の堆積状況・遺物包含層の有無などの基礎資料を得るため、確認調査を実施した〔森岡・木南1995a〕。その結果、遺構面および遺物包含層が確認されたため、建築部分約400㎡を対象とした発掘調査を実施するに至った。調査は芦屋市教育委員会が主体となって和田秀寿（芦屋市文化振興財団）・竹村忠洋（文化財課臨時の任用職員・関西大学大学院生）が担当し、森岡秀人（芦屋市教育委員会文化財課係長）の指導・助言を受けつつ行った。作業は平成8年3月11日に開始し、3月29日すべての作業を終了した（第165図、図版116中・下）。（和田秀寿・竹村忠洋）

第2節 調査地の位置と周辺環境

本遺跡は、JR芦屋駅の東方約350mの住宅地に所在する。地形的には、宮川の左岸、翠ヶ丘台地西縁に立地する。翠ヶ丘台地は、旧宮川の堆積物によって形成された六甲山南麓部から派生し南北に舌状にのびる低位の段丘である。遺跡周辺の標高は約16mを測り、宮川に向かって西に傾斜する地形をみせる。本遺跡の確認は昭和62年に遡り、市内初の中世水田遺構が検出され、14世紀の遺物が数多く伴出した（第187図）。（竹村）



第165図 調査地近景

第3節 発掘調査の概要

（1）調査の方法と経過

発掘調査は、敷地内で残土処理を行う計画であったために、調査区を2分割して反転掘削の方法をとった。調査区はL字形を呈し、東西約37m、南北約10mを測る。調査区を3つに分割し（第169図）、1回目に第1・2区を調査し（約220㎡）、2回目に第3区を調査した（約60㎡）。



第166図 作業風景（1）

確認調査の成果に基づき、近・現代水田床土（第4層、現地表下約60～70cm）まで機械掘削し、その後、地山まで人力によって分層発掘を行った。また、遺構を検出した場合、土層観察用畦を設定し、写真・図面で記録した。

発掘調査は、平成8年3月11日～3月29日まで実施した。その間の実働は13日である。3月8日、発掘調査区を事前に設定し、3月11日から重機・機材搬入後、第1層から第4層（近・現代水田耕土）まで機械掘削を行った。掘削は、第1試掘トレンチの土層断面の様相を確認しながら東側から開始した。残土が場内処理のため、2回に分けての調査方法をとった。

遺物包含層は稀薄で、近代水田の開発に伴って削平を受けている箇所が第1区に認められた。この第1区では不定形土坑群と溝を確認し、精査、遺構検出を順次行った（図版118）。

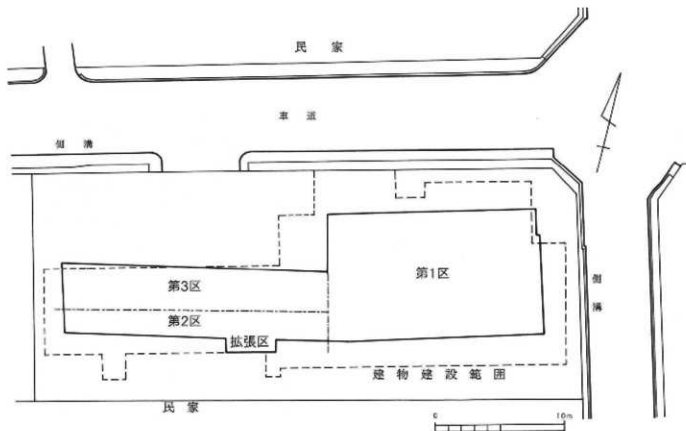
第2区では近代水田が段差を有して第1区より下位に形成されていたために、近世～近代の土地開発を一部免れ、中世の水田耕作に伴う草跡・牛の足跡や流路、奈良時代まで遡ると考えられる土坑などを確認した。



第167図 作業風景（2）



第168図 作業風景（3）



第169図 発掘調査区配置図 1 / 300

第3区(第2回目反転部分)では、第2区の北側への延長部分として遺構の連続を確認した。最後に図面の追記、全景撮影、機材の撤収を行い、調査を終了した(第165～168図、図版116中・下)。

(2) 基本層位

基本層位は、確認調査の結果および本調査での土層断面観察を総合して、調査区でみられたすべての層位を表記した。層位の具体的構成は現表土、現代盛土層、近・現代水田耕土・床土、遺物包含層、地山である。各層位の所見は次のとおりである(第170・171図、図版117)。

第1層…暗茶色砂質土層。現表土。

第2層…茶黄色砂質土層。現代盛土層。調査区西半では、第3層に起源するブロックや地山起源の黄色粘性砂質土ブロックを含む。一方、調査区東半では、直径5cm以下の花崗岩の角礫を含む黄茶色粘性砂質土で構成されている。

第2a層…灰青色粘性砂質土層。鉄斑がみられる。炭化物を若干含む。

第2b層…明黄灰色粘性砂質土層。

第2c層…淡灰紫色粘性砂質土層。しまり非常に良い。直径5mmの鉄斑が多くみられる。

第2d層…淡青灰色粘性砂質土層。しまり悪い。直径1cmの鉄ウカン(植物の根のまわりに付着?)が多くみられる。

第2e層…茶黄色砂質土層。第3層起源土。直径5cmのブロックを斑状に含む。鉄分が層状にみられる。しまり良い。地山起源黄色粘性砂質土ブロック(直径2cm)を多く含む。

第3層…灰色粘性砂質土層。近・現代畑耕土。畝の横断面が観察できる。

第3a層…淡灰色砂質土層。近・現代水田耕土。

第4層…淡黄灰色粘質土層。近・現代水田床土。地山起源暗黄灰色粘土ブロックを含む。

第5層…淡灰茶色細砂質土層。SD1の埋土。直径10cmの黒灰色粘土ブロックを多く含む。鉄分やマンガンを多く含む。

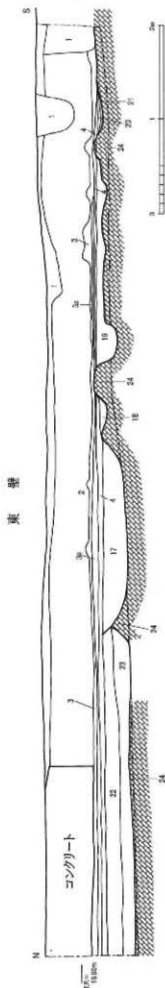
第6層…淡灰黄色細砂質土層。SD1の埋土。鉄分やマンガンを含む。

第7層…淡黄灰色砂質土層。SD3の埋土。直径2cm以下の地山起源黄色粘土ブロックを多く含む。炭化物を含む。

第8層…淡茶灰色砂質土層。SD3の埋土。鉄とマンガンを含む。

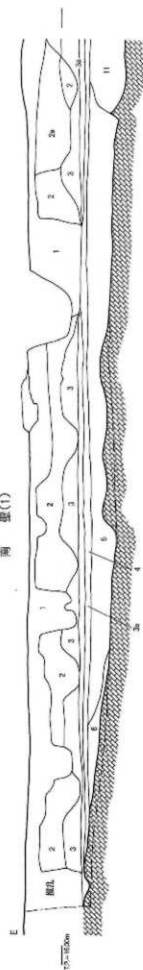
第9層…淡灰黄色粘性砂質土層。SD2の埋土。直径1cmの地山起源黄色粘砂土が若干みられる。しまり悪い。

第10層…淡灰黄色粗砂質土層。直径5cm以下の鉄斑がみられる。犁痕、牛の足跡の埋土。

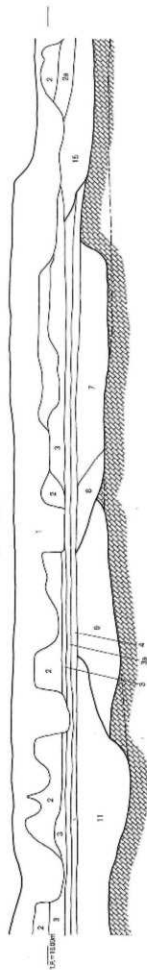


第170図 東郷土層断面図 1/40

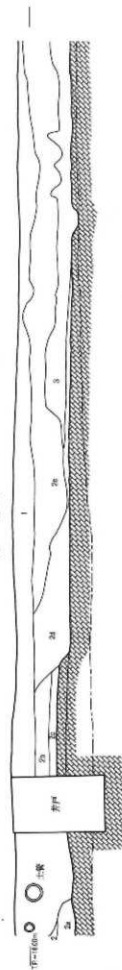
南壁(1)



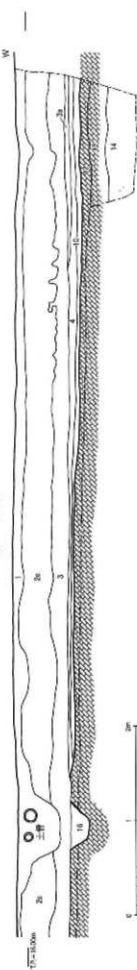
南壁(2)



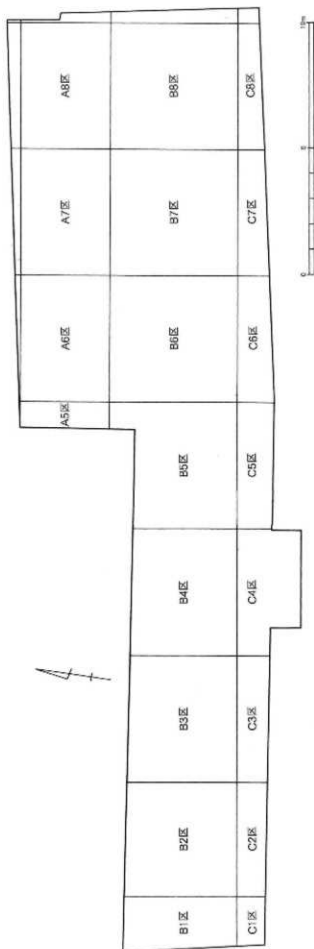
南壁(3)



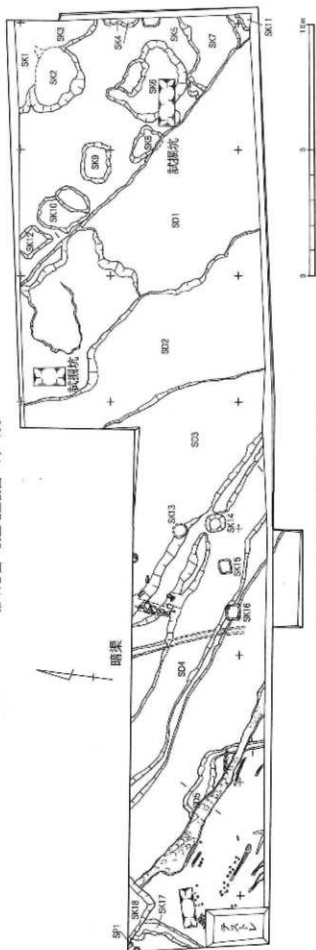
南壁(4)



第171圖 南壁土層剖面圖 1/40

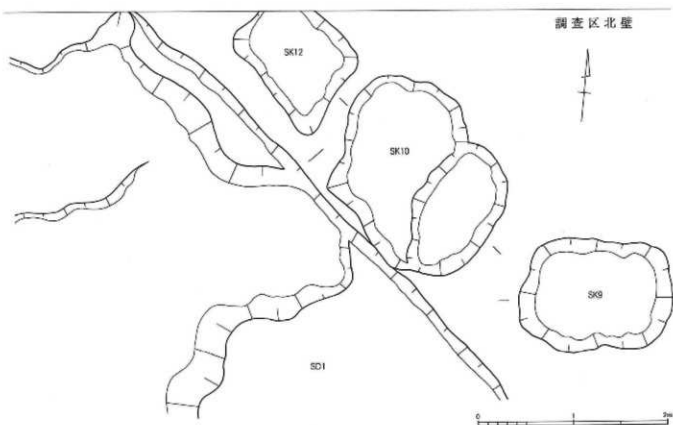


第 172 図 調査地区概図 1 / 150

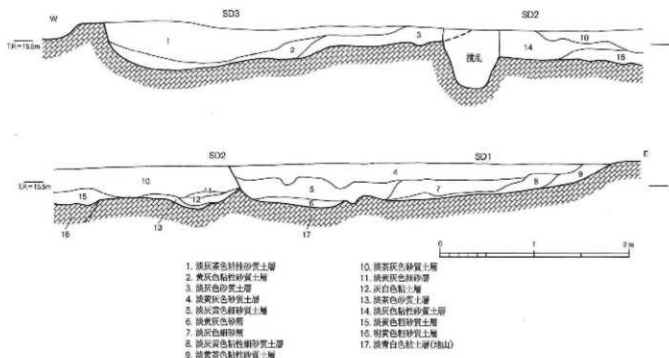


第 173 図 調査地区連絡全体図 1 / 150

- 第 11 層…淡茶灰色粘性粗砂質土層。SD2 の埋土。直径 1～5 cm の鉄銹が多くみられる。直径 2 cm の円礫を若干含む。直径 2 cm の地山起源黄灰色粘土を若干含む。
- 第 12 層…明黄灰色粘土層。地山。水田床土も兼ねる。上面境界面に犁痕がみられる（埋土は第 10 層）。
- 第 13 層…明黄灰色粘質土。地山。粘り強い。
- 第 14 層…淡黄灰色粘性砂質土層。地山。
- 第 15 層…淡灰青色砂質土層。SD4 の埋土。鉄分を含む。炭化物を含む。
- 第 16 層…白灰色粗砂層。SD5 の埋土。
- 第 17 層…淡灰茶色砂質土層。SK4 の埋土。
- 第 18 層…淡茶色砂質土層。SK5 の埋土。
- 第 19 層…淡灰茶色砂質土層。SK7 の埋土。
- 第 20 層…淡灰黄色砂質土層。SK11 の埋土。
- 第 21 層…淡灰色細砂層。SK11 の埋土。
- 第 22 層…淡灰茶色砂質土層。SK3 の埋土。
- 第 23 層…淡灰茶色粘性砂質土層。SK3 の埋土。鉄・マンガンを含む。直径 2 cm の地山起源黄灰色粘土ブロックを若干含む。
- 第 24 層…淡灰紫色粘土層。地山。斑状に暗赤色部分が多くみられる。



第 174 図 SD1・SK9・10・12 平面実測図 1 / 40



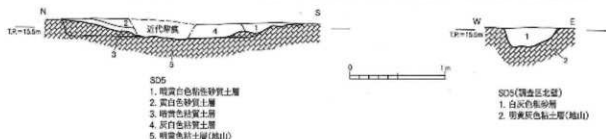
第 175 図 SD1～3 断面実測図 1 / 40

(3) 検出遺構

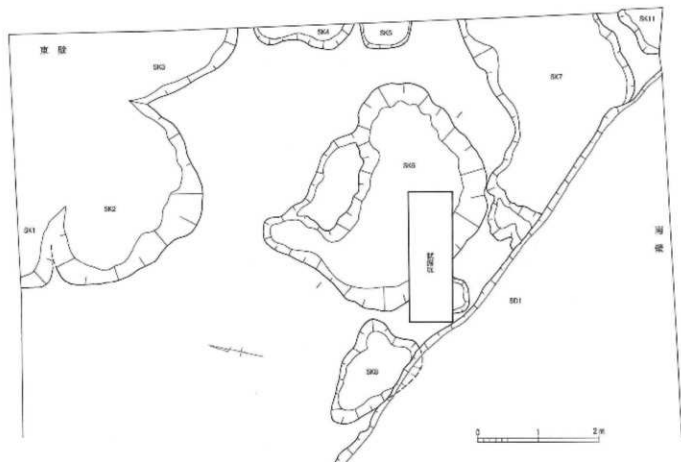
遺構面は地山上面に当たる 1 面のみで、当面において古代から近代までの遺構を検出した。遺構の記載に当たっては、溝を S D、土坑を S K、ピットを S P と記号化し、番号は検出順に付与している (第 173 図)。

暗渠 ほぼ南北方向に流れ、SD4 につながる。北側は SD1 の最終改修時に破壊されてしまっている。幅約 30 cm、深さ約 20 cm を測り、底石、側石、蓋石から成る石組構造である。底石に伴う石材には近代の矢穴 (矢穴 C タイプ) [藤川 1979] が確認された (第 173 図、図版 117 下)。

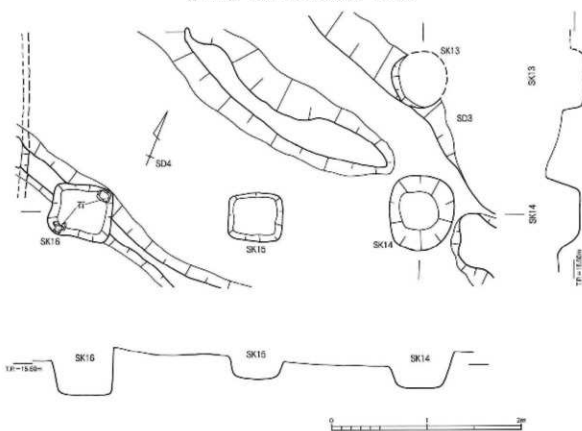
SD1～3 これらは、第 1 区の西半と第 2・3 区の東端を北西から南東方向に流れる流路であり、相互に重複関係にある。走向軸は N60° W である。SD1 は幅約 4 m であり、深さは検出面より約 50 cm、SD3 は幅約 3.7 m、深さ約 50 cm、SD2 は両肩を SD1・3 によって削られているため幅は不明であり、深さは約 50 cm である。重複関係から SD2 が最も古いことが明確であるが、SD1 と SD3 の時間的前後関係は遺構の重複関係からは判明しなかった。各流路内の埋土が数層に分層でき、それらの境界面のいくつかに滞水を示す粘土層が認められることから、数回の改修行為があったことが推測できる。それとは逆に、砂質土ブロックを多く含む層の存



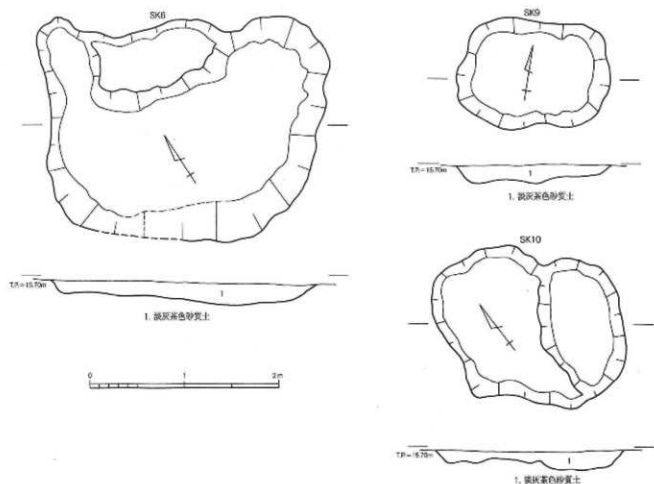
第 176 図 SD5 断面実測図 1 / 40



第 177 図 SK1 ~ 8 平面実測図 1 / 60



第 178 図 SD4・SK13 ~ 16 平面・断面実測図 1 / 40



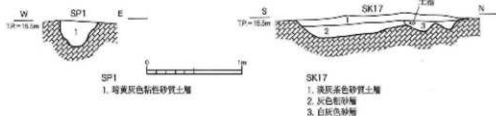
第 179 図 SK6・9・10 平面・断面実測図 1 / 40

在から、人為的に埋められた時期もあるようである。SD1 は後述する不定形土坑群のうちの SK7・8 を破壊していることから、これらの流路は土坑群より新しいことがわかる（第 173・175 図、図版 119 上・120）。

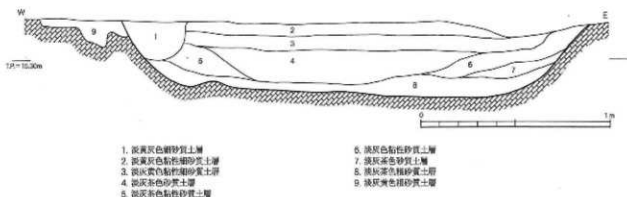
SD4 第 2・3 区中央部を北西から南東方向に流れる流路で、暗渠と連接する。走向は N 60° W である。埋土は淡灰青色細砂質土層と淡黄色粗砂質土層であった。後者から多量の染付磁器、瓦の破片等が出土し、中には板硝子片もみられた。機能時期は近世（18 世紀後半頃）～近代（19 世紀後半頃）と考えられる。2 区では、水口状に当流路と SD3 が連結しており、近代の一時期にこれら 2 つの流路が同時に並存していたと推測する（第 173 図、図版 120）。

SD5 第 2・3 区を L 字状に流れる。幅約 30 cm、深さは検出面より約 10 cm を測る。出土遺物は須恵器・土師器を含むが、小片のため明確な時期は不明である。ただし、中世の時期幅で収まる遺構と考えている（第 173・176 図、図版 120・121 上）。

SK1～12 1 区東半部で検出した不定形土坑群である。規模は 1～3 m 程度で、深さは検出面より約 5～30 cm である。埋土は灰茶色（SK1）、淡灰茶色（SK2・3・4・6・7・8）、淡灰黄色（SK9・10・11）の 3 つの色調の異なる砂質土で構成されている。土坑の重複関係がみられることから（SK1 と SK2 と SK3、SK10 など）、これらは数時期に分けることが可能である。遺構埋土からは、染付碗を確認していることから近世



第 180 図 SP1・SK17 断面実測図 1 / 40



第 181 図 SK18 断面実測図 1 / 20

以降に比定できる。また、SK7・8がSD1に切られていることから、土坑群が流路より古いことは確実である。これらの土坑の機能は不明であるが、土坑肩部が成形されていないことから土坑自体を使用したのではなく、粘土採掘坑のような土採取の痕跡ではないだろうか。採取した土の用途については、周辺の粘土はあまり良質ではなく、どちらかといえば壁土などの利用が想定できよう（第173・177・179図、図版118・119）。

SK13～16 第2・3区東半で検出された土坑群である。各土坑の配列は「L」字状になる。堀土は各土坑によって異なるが、それぞれ地山起源の粘土ブロックを多く含む点では共通する。柱痕はみられなかった。SK15・16は一辺約60cmの方角を呈し、深さはそれぞれ検出面から約25cm・50cmである。これらの配置からは、上部構造に据立柱建物を復元することは困難であり、それがどのような上部施設をもち得たかは不明である。いずれの遺構からも遺物は出土しておらず、遺構の時期については不明である（第178図、図版121）。

SK17 第3区西端で検出されたもので、土坑というよりは浅い溝状を呈する。出土遺物は須恵器・土師器であり、中村治福年のIV型式に比定できる。若干の瓦器が含まれるが、上層からの混入遺物と考える（第173・180図、図版121）。

SK18 第3区西端で検出され、大半は調査区外へ広がる。検出された部分は、四角形の一角をおもわせる形状であり、長さは約2mを計測し、深さは検出面より約40cmを測る。遺物は全く出土していないが、第5層を破壊していることから、8世紀以降に焼属させることができる（第173・181図、図版121）。

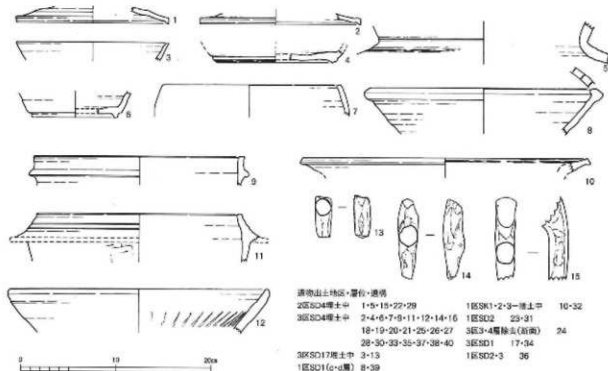
水田経営に伴う遺構 犁跡・牛の足跡などで、第2・3区西半で順着にみられ、北西から南東にかけて走行する（N66°W）。埋土は第10層である。中世～近世のものと考えられる。場所によっては埋土が異なり、同一方向に走行する近代の犁跡・牛の足跡も重複して確認されている（第173図、図版121下）。（竹村）

(4) 出土遺物

当地点の発掘調査で検出をみた遺物は、コンテナ約3箱分程度である。遺物の主体は、江戸時代後期から近代にかけての生活雑器類で、中世・古代の遺物が若干含まれる。主として、水田造営に伴う遺構（溝状遺構等）からの出土が目立ち、完形品はなく、細片となったものが多い。とくに土師質土器は、器面や破断面が全体的に摩滅している。以下、図化したもののうち40点を掲載し、若干の説明を加える（第182・183図、図版122）。

A. 須恵器

1・2は、杯蓋片である。2点ともに器高の低い扁平な天井部からなだらかに裾を広げ、僅かに屈曲して口縁部は垂直に折れて立ち上がる。口縁の外端面には浅い擬凹線状の凹みを有する。天井部は回転ヘラ削り、口縁部にかけてはヨコナデにより調整される。1は復元口径16.0 cmを測り、聚宝珠様のつまみが付されるもので、中村福年Ⅳ-3・4段陸、平城Ⅱ前後に比定されよう。胎土精良で、内外面ともに暗灰色を呈するが、断面は暗灰紫色に発色している。2は1より口径が大きく、17 cm前後の復元値を測り、器高も低く扁平となる。つまみもさらに扁平化したものであろう。口縁部外端面はやはり浅い凹みをもつ。時期は1とさほど変わらない。3・4・6は、杯身である。3は外傾して立ち上がる薄い仕上げの口縁部を僅かに外反させる。内外面をヨコナデ調整する。淡灰色を呈し、復元口径16.0 cmを測る。8世紀に入るものであろう。4は「ハ」の字形の低い高台の内側を接地面とする杯身で高台部分の径は13.1 cmを測る。器形の小さい6は高台の底全体を接地させるもので、高台径9.0 cmを測る。4の高台は製作時に歪みを生じている。4・6ともに8世紀でも後半期に下るものである。5は甕の頸部付近の破片である。体部から大きく屈曲し、外上方に直線的にのびる口頸部を有する。頸部はしまり、復元値22.0 cmを得る。外面は口頸部をヨコナデし、肩部は叩き成形の後、横方向の微細なカキ目が施され、内面はヨコナデによる調整である。古墳時代後期のものであろう。7は鉄鉢形須恵器である。芦屋川右岸地域の遺跡に類例がみられる。丸底で半球体のプロポーションで、内面側に僅かに突出する口縁端部は若干内傾して平滑に仕上



第182図 出土遺物実測図(1) 1/4

げられる。内外面共にていねいなヨコナデによる調整が施され、内面には顕著な指紋条線と起伏が残る。口径は18.5 cm前後に復元できるが、不確か。13世紀初頭のものと思われる(第182図、図版122上)。

B. 須恵質土器

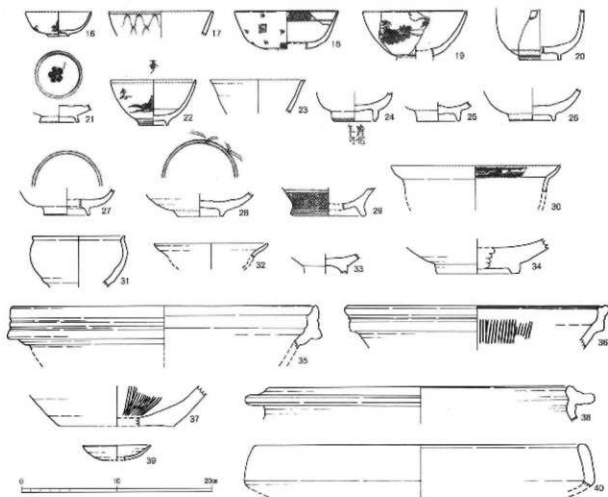
埴鉢8は片口部が残っていないものの片口鉢とみられる。上下に肥厚拡張した口縁端部を内面に折れ込むように成形し、玉縁状とする。幅7~8 mmの平滑な上端面に1.2 cm~1.3 cm間隔の細線風の刻みを記号風に施す。口径の復元値は22.8 cmを得る。12世紀末前後のものであろう(第182図、図版122上)。

C. 土師質土器

9は、羽釜である。直立する体部に、短い袴部をもち、口頸部も直立する。端部は断面方形を呈し、器面はヨコナデによる調整で、口頸の外面部は、起伏を伴うヨコナデが加わる。口径21.0 cmを測り、淡褐色を呈する。胎土中には、細砂を含む。12~13世紀代に比定されるものであろう(第182図、図版122上)。

D. 瓦質土器

口縁部の残欠10は、おそらく土鍋の破片であろう。外側方にのびる口縁部は、周縁に向かってやや薄くなり、端部において上下に僅かに肥厚し、方形の断面を有して、端面を平滑な仕上げとする。流れによる厚減が著しい土器で、器表は黒色を呈するが、器壁芯部は淡い灰色である。口径は30 cmでやや大振りに復元されるものであり、



第183図 出土遺物実測図(2) 1/4

15～16世紀代に属するものと思われる。羽釜11は、内傾する口縁部を有段状に成形し、段部に浅い沈線を加える。柄はやや下向きに付けられたものであろう。体部には、横方向～やや右上がりのヘラ削りが施される。外面黒色、内面黒灰色を呈し、口径21.5cmの復元値を得る。15世紀代に比定できよう。13～15は、三足釜の脚部である。13・14は、断面不整な円形を呈し、直径はそれぞれ1.8cm・2.2cmを測る。摩滅が著しく、調整は不明。器表は黄灰色・淡灰白色を呈する。15は、やや隅丸方形の断面形を呈し、直径2.3cmを測る。灰白色を呈し、調整はローリングにより不明（第182図、図版122上）。

E. 中世陶器

12は、丹波焼榎鉢である。体部は外上方に直線的にのび、口縁端部は丸く収められる。内面は口端から5mm程度の所が浅く凹む。1本筋による摺目は分割単位をもたずに、放射状に施される。口径27.0cmを測り、赤味を帯びた淡茶褐色を呈する。16世紀初頭～安土桃山期のものと思われる（第182図、図版122上）。

F. 近世磁器

16～20・22・24は、肥前磁器染付碗である。16は薄手の小杯で、小さな高台が付く。外面にはコンニャク印判によるコバルトブルーの模文が施される。口径7.0cm、高台径2.0cm、器高2.6cmを測る。17は一直綱目文が呉須によって描かれる。呉須の発色は不良で、暗みを帯びた淡青紺色を発する。復元口径10cm以上を測る。18は外面に吉祥文字である方形枠なしの角形の「福」字と「卍」を文様化したものを千鳥にあしらひ、内面口縁直下には四方棒が巡る。復元最大径11.0cmを測るが、薄手なつくりである。19は、外面に蔓草文が呉須によって施される。器表には縦方向の貫入がみられ、土色が入る。口径11.0cmを測る。いわゆる「くらわんか手」と呼ばれるものである。丸腰の碗20は、呉須の発色は良好であるが、釉薬飛びにより白磁部分はムラが目立つ。高台推定径4.4cm、残存器高5.2cmを測る。22は、小広東碗である。高台は退化してかなり低くなっているものの、形状はそれに類するものである。見込みには吉祥文字の「寿」字を、外面には、雲文と鶴文を交互に配す。磁胎がガラス質で、瀬戸系磁器とも考えられる。口径9.0cm・高台径3.0cm・器高4.9cmを測る。24は、外面に呉須が、内面および高台には白磁が施される。高台は外面側に段を有し、高めに成形される。高台内には「成化年制」が款銘をされる。高台径4.4cmを測る。21は、肥前磁器青磁染付碗である。筒型の形態のもので、見込みには、コンニャク印判による五弁花が施される。高台径4.2cmを測る。23・25・26は肥前磁器白磁碗である。端反りの碗23は口径10.0cmを測る。25・26の碗は淡い緑白色を発している。25の内面には鉄分粒が散見される。26の見込みは蛇の目釉刺しが施される。25・26の高台径はそれぞれ、4.2cm・5.0cmを測る。27・28は、肥前磁器染付皿である。2点とも見込みに重圓線を施し、28には重圓線により格子文が施される。シャープな27の高台径は5.0cm、28は4.8cmを測る。肥前磁器染付鉢29は、「ハ」の字状に内傾する高い高台の復元径8.0cmを測り、屈曲部に菊文を連続して配している。時期は不明。30は、肥前磁器青磁染付鉢である。口縁部には波状文が施される。口縁端部には、施釉前に欠け損じをつくり、輪花口縁風の仕上がりを用意したものと思われる。復元口径は、18.0cmを測る。各々の年代については、消費地における出土例を参考に、17・20が17世紀末～18世紀初頭頃、22・23は18世紀末～19世紀前半頃、その他は18世紀代、とくに後半を中心とした時期に収まるものとみて大過ない（第183図、図版122中・下）。

G. 近世陶器

31は、瀬戸・美濃焼鉄釉天目茶碗である。口縁直下のくびれは著しく、やや丸みを帯びた体部を有し、器面の稜線は少ない。器形は口径よりも体部中央付近やや上方が張り出るもので、器径10.4cmを測る。17世紀末頃のものと思われる。32は、産地不明の施釉陶器皿である。体部中央で段をもつように屈曲し、更に口縁端部に向かって外上方に直線的にのびるタイプのものである。緑灰白釉が施される。33は献上唐津焼碗の底部である。細かな

貫入が顕著にみられる淡黄褐色を発する釉が内面・外面の他、高台内にまで施される。高台径4.6cmを測る。17世紀末～18世紀初頭のものと思われる。34は、唐津焼大鉢の底部である。断面・外面は淡黄褐色を呈し、内面には白色の泥装が施される。高台復元径8.6cmを測る。17世紀代に比定し得よう。35は、備前焼大鉢である。備前特有の暗赤紫色を呈する口縁部片で、拡張の著しい口縁部外面は自然釉が付着する。また、2条の凹線が巡る。上方に拡張された口縁部の端部は内傾面を有し、浅く凹む。口縁端部は丸く仕上げられる。復元口径32.0cmを測る。安土桃山時代～江戸時代前期のものと思われる。36・37は、堺・明石焼系の播鉢である。36は口縁部内面に線を有するもので、口縁部外面下部の拡張の著しくないタイプである。口縁部外面には、近接して凹線2条を施す。また、口端にも段を利用した1条の沈線様の凹線が施される。淡赤味を帯びた暗褐色を呈し、描目は9本で1単位をなす。復元口径は27.6cmを測る。白神編年Ⅰ型式に属し〔白神1998〕、18世紀中頃に比定し得よう。37は、底部である。おそらく見込み全体に、放射線状描目を有するものと思われる。暗赤紫色を呈し、復元底径12cmを測る。白神編年Ⅰ型式のものと思われる〔白神1998〕。38は、丹波焼である。頸付き口縁部の上面には、2条の太く浅い凹線を有する。暗褐色を呈し、焼き締めに近い状態である。復元最小口径31.8cmを測る。横崎編年江戸Ⅰ期(1615～1623年)に比定されよう(第183図、図版122下)(横崎1977)。

H. 近世土師質土器

39は、土師質土器皿である。口縁部に一部油煤が付着し、灯明皿と思われる。布釉が施されていたとみられるが、一切飛んでいる。下地に調整痕が明確に残り、ロクロ成形により薄くつくられる。色調は淡褐色を呈し、砂粒含まず、胎土は精良である。口径6.8cm、器高1.6cmを測る。遡っても18世紀末頃のものであろう。40は、土師質土器、焙烙である。底部への移行は不明であるが、平たく内湾する底底部から屈曲し、内傾して立ち上がる口縁部を有するものであろう。口縁端部は丸く仕上げられ、器面は回転ナデにより丁寧に調整される。口径34.4cmを測り、難波洋三氏による分類D類(難波1992)に属するものであろう(第183図、図版122下)。(森岡・木南)

第4節 まとめ

今回の調査では、当地域の土地利用の変遷が明らかとなった。近世・近代の流路の方向は自然地形に則した当時の地割を示すものと考えられ、当然、犁跡もそれらと同じ方向に走る。これらは、翠ヶ丘台地西縁の等高線に沿うかたちで、自然地形を最大限有効に活用した結果にほかならない。当地域を耕作地として利用し始めたのは、本地点や第1地点の調査成果から中世とみるのが妥当であろう。当地点では、現行の土地割が設定される近代まで、中世の地割が踏襲されていたことが分かる。また、奈良時代の遺構の検出は、今後、久保遺跡の存続時期・性格、翠ヶ丘台地上での古代集落の様相を知る上で重要である。本市域には、東に賀美郷、西に葦屋郷の配置をとる古代郷里制が展開したと想定され、前者と関わる奈良時代の集落遺跡が今後、この台地上でみつかるともあろう。

久保遺跡の立地する翠ヶ丘台地の基盤層は大阪層群であり、その上昇に伴う低位段丘化が今日みられる高燥な土地を用意した。この台地は古墳時代前・中・後期と連続し続く墓域であり、阿保親王塚古墳をはじめ、金津山古墳・打出小槌古墳が築造され、さらに四ツ塚や打出駒塚に代表される後期の古墳も営まれた。この点、市域においては農耕地としての開発が遅れたであろうが、少なくとも南端部では平安時代から土地開発が進んでおり、当地点の調査結果は、古代を上限とする人間活動の一端が知られた点に意義があろう。(森岡・竹村)

第8章 総括—平成7年度の震災復興調査の成果と課題—

第1節 はじめに

阪神・淡路大震災の発生により、市内の建築物の65%が全半壊の憂き目に会った。一部損壊を含めると、まさに96%の建物が被害を受けたことになる。その復旧・復興はたちどころに行われ始め、平成7年度において着工をみた建築物の事業地面積は、実に395,209㎡に達した。その用途別では、居住専用が最も高率で87%、公務文教用7%、居住産業併用3%、公益事業用1%、サービス業用1%と続く。これを構造別にみると、木造36%、鉄骨31%、鉄筋コンクリート27%、鉄骨鉄筋コンクリート6%の占有率を示す。瓦屋根の木造建築は急激に減少し、俗に言うプレハブ住宅が地震に強い建物として著しく増えている。高層の建物から市内の四至を望見すると、黒屋根のお屋敷街が随所にみられた芦屋の街並のイメージは薄れ、プレハブ住宅がひしめき、マンションが唐突に林立する光景へと激しく変化をみせている。大災害は街並を大きく変えたのである。

一方、平成7年度における公営住宅供給の現況は、総戸数3,258件を数え、その内訳は住宅公団29%、県供給公社23%、県営21%、市営20%、改良住宅7%の割合である。被災地にとって、公営住宅の確保は、緊急課題である。仮設住宅住まいを余儀なくされている方もまだ多い。復旧・復興は緒についたばかりといった感がないではない。これから芦屋市がどうこれらを取り切っていくかを考える時、正直言って絶望感に苛まれる。

震災復興調査元年となった平成7年度の本市の埋蔵文化財発掘調査は、文化財保護法第98条の2第1項による調査通知件数75件を数え、その内訳は確認調査60件、本格調査15件である。いずれも芦屋市教育委員会が調査主体となったものであるが、直接市教育委員会文化財課が担当した確認調査の結果と個人住宅建築を契機とする小規模な本調査9件の成果内容は、既に市文化財調査報告第27集にその主要な部分を報告・記載した〔森岡・木南編1996〕。本書第2部第2～7章では、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興調査班に支援職員の派遣を求めて実施した復興調査5件と市教育委員会が芦屋市文化振興財団にも協力を要請して直接実施した復興調査1件について、その概要を報告している。

報告を行った遺跡・調査地点は、芦屋廃寺遺跡関連2件(W地点・第29地点)、月若遺跡関連2件(第20地点・第28地点)、打出岸遺跡関連1件(第9地点)、久保遺跡関連1件(第15地点)であり、前5件に関しては、先に調査年報の形態を採って兵庫県から簡報が寄されている〔長屋・岡本1996b、長屋・佐藤1996b、矢口・北原1996b、森・岡本1996c・96d〕。また、兵庫県の埋蔵文化財情報誌である「ひょうごの遺跡」などでも紹介された遺跡がある〔兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所1995・1996〕。

以下、第2～7章の報告を受け、その諸成果を集約しつつ、既往調査や周辺遺跡との関係を踏まえ、その蓄積の上に立って遺跡ごとに若干の考察と将来に向けての調査課題を示しておきたい。

(森岡)

第2節 芦屋廃寺遺跡の東限部確認

本遺跡は、芦屋市の市街地西部、芦屋川右岸の扇状地上、傾斜変換部の標高28～34m付近に立地する複合遺跡で、縄文時代後期から江戸時代後期までの遺物の出土をみる。その広がりは阪急電鉄神戸線の北側、同電鉄芦屋川駅から西力200mあたりを東端として東西350m、南北250mにおよび、推定面積31,000㎡を測る。遺跡の南端は、後

述する月若遺跡と境を接し、また、寺田遺跡とも範囲を接している。西方には三条九ノ坪遺跡、北西方には冠遺跡があって、市内でも遺構・遺物が最も濃密に分布する地区に所在している〔森岡編1993〕。

既往の調査と今年度の調査 遺跡発見の端緒は、明治年間、寺院関連の礎石や瓦片が多量出土したことによるが、本格的な発掘調査は、昭和42年10月に至って初めて実施され、43年8月まで数回にわたって行われた発掘成果が「芦屋庵寺址」として公にされている〔村川1970〕。また、〔武藤・村川1971〕や〔村川1976〕にも、その成果の一端が要約・概説されている。

以後、本遺跡の調査はしばらくなかったが、昭和60年4～5月に実施されたA地点の事前調査を皮切りに〔森岡1985a・1986a・1988a〕、現在51次の次数を重ねる確認調査や発掘調査が行われている。なお、調査地点名については、昭和42～43年の発掘調査が第1～3次、以後アルファベットによる呼称が与えられてきたが、Z地点以降、改めて算用数字に置き換えられたため(29地点～)、多少次数に混乱をきたしている。

今年度の調査および工事立会は、合計14地点で実施されている(W～Z・27～29・31～36・38地点)〔第184図〕。その内訳は確認調査を実施したもの10件、工事立会4件である。確認調査を行ったもののうち、W地点と第29地点の2地点が本調査並びに追加調査(第2次確認調査)の対象となった。

さて、今回その概要を報告したW地点並びに第29地点は、弥生時代から江戸時代までの遺構が複合する本遺跡の中心遺構である芦屋庵寺跡の中枢部と想定される第1～3次調査地〔村川1970〕の東方隣接地であり、寺院関連遺構の検出が当初より予想される所であった。報告文に則し、同地点で確認された主要な遺構を時代別にまとめると次のようになる。

W地点検出の遺構 古墳時代に属するものとして、SK1(長方形堅穴遺構、6世紀後半)・SK2・SK3・SK4・SK5・SK6(以上、不定形土坑)・SD1(6世紀後半)・須恵器集中部(落ち込み、6世紀後半)・竈1・竈2がある。およそ6世紀後半を中心とする遺構群であるが、検出場所はC3・C4・D4区に収まる限定的なものであり、削平を免れた遺構のみが局部的に見いだされたものと思われる。竈1・2の存在や矩形プランのSK1の存在は、方形・長方形プランの古墳時代堅穴住居群の存在を示唆しており、芦屋庵寺下層遺構の広がりが見える。また、弥生時代終末期の包含層が調査区南部を中心に認められる。

飛鳥・奈良・平安時代に属する歴史時代の遺構は、B4区付近で検出されたSB1(掘立柱建物、平安時代)1棟のみであった。桁行4間×梁間3間(6.1m×4.2m、面積25.62㎡)の平面規模を有するもので、東西棟である(第47図、図版5・6)。土坑SK7が西側至近地に付随する(第39図)。

なお、該期の土器類は、後述する中世のSD2・3中に相当量混在しており(第70～74図)、大幅な古代包含層の削平・移動があったことが想定できる。芦屋庵寺周辺建物群の一つの画割を示すものであろう。

鎌倉・南北朝・室町時代に属する歴史時代の遺構は、A4・B4区など調査区北端で検出されたSB2(掘立柱建物)・SB3(掘立柱建物、1間×1間)・D5付近の池状遺構1・SX1(集石)・SX2(集石)、調査



第184図 芦屋庵寺遺跡調査地点分布図 1 / 5000

区西部に展開する小土坑群、3列を南北方向に縦走するSD2・SD3、巨石集塊部(径6m)、その他SD4などがみられる。遺構の時期差からみた変遷は、池1→SK1・2、SD2・3→礫集積が確認できたが、SB2とSB3は南北に併存する公算も高からう(第40図)。

江戸時代に属する遺構は、北西部の水田整地跡と東部のSK9～13(土坑群)がある。また、時期不明の遺構として、SK14・SK15・SD5・SD6・SD8・SX7などが報告されている。その他、A2・B2・C2区付近に機能や性格不詳の土坑が偏在している。遺物総量は27㍑コンテナにして58箱を数え、予想以上に多かった。調査した面積は678㎡を測る。

以上、W地点検出の遺構は繰り返し行われた後世の地形改変により、時期ごとの偏りが著しく、生活面の削平などが原因で、多くの遺構が消失しているものと思われる(第37図～第42図)。

29 地点検出の遺構 調査面積(58.8㎡、幅2.4m×長さ24.5m)において(第81図)、2面の遺構面が検出され、上層で溝1条、土坑3基、下層で小ピット群が認められた(第83図・図版34～37)。さらに調査区西部の下層には、自然旧河道が存在する。帰属時期は不明であるが、V層中には14～15世紀の遺物が含まれており、中世を前後するものであろう(第83～86図)。遺物量は27㍑コンテナ1箱と少ない(第87図、図版38)。

両地点の周辺地点との関わりと検出遺構の性格 両地点を関連づける遺構は、面の対応を含め乏しい状況にあるが、両地点の東方には小堀折谷(旧地形)の一部と推定される急激な段差があるものと思われる。安定した整地面をもつ遺構ベースはこれをほぼ東限としており、付近一帯では既に遺構の密度も稀薄なものとなっており、芦屋廃寺跡関連の瓦片の散布量や包含量も極端に減少する。瓦の組成も多くが平瓦片・丸瓦片であって、軒瓦では、軒丸瓦が1点、軒平瓦が1点確認されたにすぎない(第64図・73・74)。

しかしながら、唯一柱通りが判然と確認されたW地点の掘立柱建物SB1(4間×3間)は、出土土器の最下限が平安時代前期頃に比定されるもので、その時期から直接、当寺院跡に関連する建物と考えられる。掘形は一边50～70cmを測り、方形を呈し、柱底も認められた。その性格については、不明な点が多いが、寺域から大きくはずれるものではなく、雑合的な周辺施設の一部と考えておきたい(第37・47図、図版6上)。

芦屋廃寺の中心伽藍は今もって詳らかではないが、第1～3次調査地点のC・D地区では大量の瓦片が見いだされており、石棺出土の伝聞地であるC地区では、近世段階の礎石建物がみつまっている。礎石は8個あり、明治初年まで存在した薬師堂跡と推定されるもので、東西18.5m、南北15.5mの範囲に広がる。最南縁のD地区では、石垣列・近世用水路跡・礎石採取痕・人工的盛土面・瓦片散布面などが検出されているが、最も古くにさかのぼる石垣でも上限は鎌倉時代頃と推定されている。水路については、芦屋村と三条村を直結していた幹線用水路(東川用水路)と推測されている。D地区は上田三平氏が東塔址を想定した地域であるが、明確な基壇や柱穴は確認されていない。道路脇には、この発掘を記念した石碑が残っている(村川1970、武藤・村川1971)。

また、B地点では整理箱250箱にのぼる多量の瓦片とともに、100点を超す軒丸瓦・軒平瓦の出土をみ、明らかに伽藍中核域を発掘している手ごたえがあった[芦屋廃寺跡発掘調査団・芦屋市教育委員会1987]。このB地点では7小期にわたる遺構変遷が認められ、特に13世紀後半頃の大型自然石を使用した礎石建物(SB1)の存在が目ざれる。11世紀以前の小礎石を用いたSB2も東西方向に礎石列をなし、SB1とともに東西棟になる可能性が高い。前者は鎌倉時代における芦屋廃寺再建期の中心建物跡とみられ、昭和42～43年調査のD地区で確認されている礎石掘え付け痕とも絡まる公算が高い。芦屋廃寺遺跡において、B地点は中心的位置を占め、遺物量は単位面積あたりで最も高く、重要な部分と考えられる。

B地点と阪急電鉄をはさんで南に隣接するA地点では、軒丸瓦の頻度は低くなるものの、瓦片の散布域がおよ

んでおり、南限部分をある程度、推測することが可能である〔森岡 1985a〕。西限については、寺域に非常に近い第46地点で、遺構・遺物ともに極滅し、これより以西にはまずもって奈良時代以降の遺構群は広がらないものと思われる。やや高台の名残を残す第43・47地点では瓦片が盛土内にも多量含まれており、第43地点では聖武朝難波宮の例に酷似する重扉文軒平瓦の瓦当1点が確認されているが、該期の遺構は検出されなかった。

下層遺構と古墳時代以前の包含層の広がり 下層の包含層の時期の第一ピークが第V様式後半～庄内式期にあることは、第1～3次調査地C地区の表土下1.7mの散布層で既に確認されていたが〔村川 1970〕、包含層は南接するD地区におよび、B地点に継続し、阪急電鉄神戸線を越えてA地点全域ではかなり浅い位置に溝・土坑・柱穴などの遺構が顕著に見いだされた〔森岡 1985a〕。同様の包含層はB地点に連続し〔森岡 1986b〕、復興調査ではZ地点や40地点など南へ大きく拡大し〔森岡・木南編 1996、岡本・大道 1996、山田・弘田 1996〕、寺田遺跡の同時期の包含層とも連続する可能性が強まった。東方W地点の南側では41地点で該期の包含層を確認しており〔森岡・木南 1995c〕、F・S地点に至って純層の確認がおよんでいない〔森岡 1986b〕。したがって、この時期、南の寺田遺跡とは連接する公算が高く、東の月若遺跡とは分離の余地がある。

西方では、1988年に実施されたJ地点で検出された南北方向の流路から山陰系・中部瀬戸内系の古式土師器を含む多量の該期の資料が出土しており〔森岡・白谷・西原・土井 1988〕、ほぼ西限を画するようである。阪急電鉄神戸線以南では、第44地点で古墳時代前期以前の遺構・包含層の存在が予測されており〔辻林・渡部 1997a〕、南西部への広がりが寺田遺跡との関連でとらえられる可能性を示している。北西部の状況は不分明な点が多いが、遺構・包含層の確認されている月若遺跡第38地点の周辺では、該期の集落が広がっている可能性も強く、周辺地点での精査が今後とも必要である。特に復興調査が実施された第48地点では、当該期の集落の存在をうかがわせる4～6世紀代の遺構・遺物も見いだされており〔今村・町田 1997〕、北限を考える際、留意すべきであろう。

縄文土器片の初出 第76図396は、登地層出土の縄文土器口縁部片である。芦屋斎寺遺跡において、過去縄文土器の確認例は、晩期前半の浅鉢片もどきの1点があるが〔森岡・和田 1986〕、確例ではなく、確かな資料としては当資料が初めてである。時期は縄文時代後期中頃、型式は北白川上層3式に比定し得るもので、遊離資料ではあるものの、芦屋川右岸扇状地上の近在の地に縄文集落の存在をうかがわせる。

縄文後期の土器を出土した遺跡並びに地点名を列挙すると、山芦屋遺跡（S1・N1・S2・S4・S8地点）、月若遺跡（第18・19地点）、寺田遺跡（第95地点）と当該期の計9地点をあげることができる。中津式や福田KⅡ式段階の資料が目立っているが、縁帯文段階の土器も散見される。遺跡本体がみつからない山芦屋遺跡以外は、土器片の確認数も少ないが、月若遺跡から芦屋庵寺遺跡にかけての芦屋川扇状地上には、今後有力な縄文後期遺跡が面的に発見される気配も感じられる。W地点で得られた縄文後期に関する微証はそれを幾分か補強するものであろう。（森岡）

第3節 月若遺跡の様相と環濠をめぐって

本遺跡は、昭和60年、芦屋庵寺遺跡の東方範囲確認のため、実施されたD地点の試掘調査でその存在が確認され、遺物相の中心が隣接する芦屋庵寺とは大きく異にすることから、新たな遺跡の認識に至ったものである〔森岡 1985d〕。遺跡はこの地点（その後、第1地点と改称）を中心に拡大の傾向をみせ始め、現在、確認調査を終えた地点は48地点を数える。第10地点以降、古墳時代を中心とする集落の具体相が明瞭しつつある。

遺跡は、芦屋川の右岸扇状地上にあり、緩傾斜する標高22～27mの所に立地している〔森岡編 1993〕。その範

図は、東西350m、南北300mにわたり、北縁部は阪急電鉄神戸線を越えて北に広がり、芦屋廃寺遺跡の下層遺構（弥生・古墳時代）は、本遺跡の連続部分と推定される〔森岡 1988a〕。遺跡面積は目下、45,000 m²を測り、芦屋川右岸遺跡群の中では、寺田遺跡に次いで広い面積を占めている〔森岡編 1993、森岡・木南編 1996〕。

本年度における調査の進展 本年度は、本遺跡の範囲内において、確認調査17件（第20・25・28・30・33地点など）と本調査4件（第20・25・28・33地点）が行われ、その他4件の工事立会がある（第27・29・31・32地点）。うち今回報告を終えた2件（第20・28地点）が県復興調査班による震災関連調査であった（第185図）。まず、この2地点の調査結果を簡潔にまとめると、次のようになる。

第20地点検出の遺構 上層と下層の2面が精査されており、上層のものとして竈1基（近代）・土坑・ピットなどがある。下層ではSD01（溝）・SK02・SK04・SK05などの土坑と柱穴らしきピットが多数ある。下層の遺構群は古墳時代後期頃の推定がなされている。後述する第28地点に比べ、遺構の確認面数や検出数は格段に少ない（第93・94図、図版40・41）。

月若遺跡で多出する竈遺構 第20地点の上層遺構として確認された近代の竈は、従来から本遺跡で検出例を増やしつづける近世以降の竈遺構の系譜をひくものである（第95図、図版40下）。その端緒は第8地点で3基が発掘されており、SX-1・2・3と呼称されている。いずれも半地下式の竈で、SX-2の竈床には平石を「コ」の字状に配置した上石敷を行い、前庭部を作業室として暗褐色粘土と石塊により構築している。SX-3も類似する構造をとり、主軸も東西方向で同一であった。焚口部は立柱石2個によりしつらえ、法量並びに用石はSX-2よりも大きく、残存長2.8m、竈体径1.3mを計測する。

第13地点では、全長2.55m、竈体径0.96mの竈1基が調査されており、検出面下55cmに粘土貼床の火床をしつらえ、焚口部にはレンガ9個と石材6個を「コ」の字状に組んで通気用の幅25cmの溝を付設している。前庭部は長さ1m、幅0.75mで、壁面は素掘りである〔浅岡・古川・姫路 1993〕。第18地点では、調査区の南端でレンガ造りの竈1基が発掘されている〔森岡編 1994〕。さらに第25地点B地区においても竈1基が確認されている〔森岡・木南 1995c、森岡・木南編 1996〕。

今回実施した第20地点の調査で把握し得た竈は、竈体室すべてをレンガ造りにするものである。これらの竈遺構については、大坂城、伊丹御町をはじめ、近年各地で検出されつづき、酒造関連のものについては、具体的構造と変遷が明らかにされ始めている。市内のこの種遺構はすべて単独出土であり、用途については不分明な点が多いが、自然石・割石・瓦・煉瓦と用材にはバリエーションがみられ、時期を追っての変化をたどることができる。構造型式の編年も可能であろう。

第28地点検出の遺構 遺構の確認された調査面は6面である。第1遺構面には、新作物（中



第185図 月若遺跡調査地点分布図 1/5000

世)・SK 01がある。第2遺構面には、SA 01(櫛列、柱と杭、中世段階)・SD 01・SD 02・SK 09があり、SA 01とSD 01とは走向を同じくする。第3遺構面には、SK 03・SK 06(土坑墓?)・SK 07・SK 10(井戸?)・SK 11・SD 05・SD 06・ピット群が認められた。第4遺構面には、SK 04(掘立柱建物柱穴?)・SK 05・SK 08・ピット群がある。第5遺構面には、西区でSX 01(落ち込み、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭)、東区でSD 07(大溝、弥生時代後期末～古墳時代後期)が検出されている。また、土坑・ピット群が存在する。第6遺構面からはSD 03(南北方向、弥生時代)と土坑・ピット・土器溜り(弥生時代後期末頃)が当地点最初期のものとして見いだされている(第104～109図、図版48～70)。

以上の遺構は、重複度も密集度もきわめて高く、月若遺跡の中心部の様相を呈しており、各ステージの推移から集落構造や性格の変遷を考える上に重要である。

庄内式併行段階の一括資料の検討 平成7年度から始まった震災復興調査では、ほぼ3世紀前半の実年代[森岡1984・85b]が付与できるようになった庄内式期の土器の出土が急増しており、各地点で一括資料も増えつつある。本書で報告を終えたものについてみれば、芦屋庵寺遺跡(W地点)SD 2下部・SD 8、月若遺跡(第28地点)SX 01・SD 07、打出岸遺跡(第9地点)河道2・3・4などで、それぞれ良好な資料が提供されており、庄内式併行のどの段階を占める土器群なのか、編年上問題となつてこよう。

しかし、摂津地域は、豊中市庄内遺跡という名祖遺跡をもちながら、純然たる庄内式土器群をほとんどみぬ地域であつて、たび重なる発掘調査を経つても、該期における有効な土器編年は未だ確立されていない。近時、そうした状況下、基礎資料の集成と中河内編年[米田1981・85・89]との対比が試みられたが[森岡・中井・濱野1996]、いまだ多くの課題を残している。ここでは、非常に大雑把なものとならざるを得ないが、各一括資料の編年的位置[米田1989]について、粗削りな見通しを述べておきたい。

市内初見の異形式製塩土器について 月若遺跡(第28地点)SD 07出土土器群の整理中、きわめて特徴的な土器片の存在が目とまった。薄く細片とした土器片であつたが、ピンク色に赤変する部分が認められ、一見して製塩土器と認識し得た。復元を進めると、口径12.0cm、器高30.8cmの大製品となり、口縁部は直口釜みで、体部は右すり引き成形の痕跡をとどめると、底部は尖りぎみの丸底になることが判明した。最大腹径は18.1cmを計測する(第122図98、図版74-98)。第122図に掲げた庄内式～布留式初段階併行土器主体の一群と合併した資料であるため、3世紀前半～後半を前後する時期のものとみられるが、市内ではこれまでに1点の製塩土器も確認されておらず、初出の資料が脚台式の類ではなく、異様な形態を示すものであることが分かった。しかし、二次焼成を受けた器表の変色状態から判断すれば、煎茶に用いられたとみても大過ない。

類似品について、探索を深めると、この種の異形式製塩土器について、集成と考察が既になされていることを知った[山内1994]。この山内論文では、これまでにあまり認識されていないこの種異系統の製塩土器の類品を主として奈良県天理市布留遺跡や大阪府船橋遺跡の資料により提示し(布留遺跡[里中]地区流路最下層、柚之内[北池]地区整穴住居跡、堂垣内地区、船橋遺跡昭和35年採集資料)、類似する要素・属性を分析して、「いずれも体部がやや細長く口縁部は通常の甕に比べ長く、直立気味でやや内弯するのが特徴」「口縁部には粘土紐の痕跡が明瞭で粗雑な感じとなる。」と述べている。また、時期については、布留式(古)段階から(中)段階への変化の中でとらえており、一部初期須恵器出現段階に比定している。そして、左下がりの粗いタタキメを遺す点に留意し、「タタキメを遺す段階の方が古く、次第にタタキメが消えてゆき、底部は丸底に近づいていくのかもしれない。口径は大きいものから次第に小型化していき、脚台式のものと同様に容量が減少する」と、現有資料

から型式変化や内容積変質の見通しを記述している。

さらに同氏は、類例を調べて、大阪府八尾市萱振遺跡 S E 03 [布留式期 (古) 段階、脚台皿式製塩土器共存]、奈良県橿原市跡辻地区土坑 4 [甕 F、庄内式期 (新) 段階]、同県平城宮第 2 次内裏下層溝 S D 6030 II 層 [甕 E]、同県佐紀池下層溝 S D 8520 [甕 X] など 4 点の土器をその候補として紹介しているが、そのすべてを製塩土器と断定していないものの、「それぞれ通常の甕・甗の系統から外れる土器であり特別な用途があった」とする。加えて後出する型式のものとの比較もされ、大阪府小島東遺跡例 [丸底 I 式製塩土器共存、5 世紀後半]、和歌山県田辺市古目良遺跡 S A 区第 1 層例 [小型甕ないし甕形、目良式 A 類、5 世紀後半～6 世紀]、同県南部町大目津泊遺跡 [甕形、目良式 A 類、5 世紀後半～6 世紀]、奈良県布留遺跡布留 (西小路) 地区土坑例 [5 世紀後半]、同布留 (ハイアガリ) 地区大溝例 [5 世紀後半] などの存在から、次第に小型化した 5 世紀後半頃には球形の壺形に変化すること、その系譜の生産地は、「大阪湾岸南部から和歌山県北部地域」と考察されている [山内 1994]。

この先行論文により、従来の製塩土器 (脚台式系列) の中では主流をなさないタイプ的大型製塩土器の存在を知り、共通する特徴や大まかな形式内での変遷を知り得たが、当資料についてみれば、共存資料の検討から、明らかに庄内式期に遡るものであり、他の日常土器同様尖底化の兆しを明瞭にみせる形態と技法を採っている。先の諸例と比べてみると、底部形態は、布留遺跡袖之内 (北池) 堅穴住居出土例、平城宮第 2 次内裏下層溝 S D 6030 II 層出土例 (甕 E) と酷似するが、前者は既に底部下半に丸味を有し、布留式期 (中) 段階まで下る。また、口縁形態は外反度が全くなく、他に同様な資料はみられないが、尖りぎみに終わる口縁端部近くで内弯する傾向は、布留遺跡 (堂垣内) 地区出土例や佐紀池下層溝 S D 8520 出土例などと類似している。ただし、直口部に入ってからの高さが短い点や、他の資料に比し全体に体部が細長くなる点など違和感も多く、この点が庄内式期にまで上る要素、形制傾向と言えるかもしれない。

いづれにせよ、山内紀嗣氏が注目したこの種製塩土器については、各遺跡で多量に出土した例がなく、多くは 1～2 点の範囲にとどまる。とても、それぞれの地において、煎熬段階の土器製塩があったとするには資料不足であり、内陸部を中心とした遺跡例の多くが輸入品と推定されているように、本例もあるいは和泉地方あたりから運び込まれた土器とみておく方が無難と思われる。そのあたりについては、土器の胎土分析を経た後、新たに検討を加えるべき課題である。また、在地資料の意識的な類品探索、再検証も必要であろう。

所属時期に関して言えば、本例によって、少なくとも摂津地方では布留式期に下がらぬ段階に成立した別系統の製塩土器の存在を明らかにすることができた。庄内式併行期のどの段階から出現しているのか、あるいは畿内第 V 様式後半段階まで遡り得る可能性があるのか、目下は不分明な点が多いが、最近報告書が編集されつつある大阪府堺市下田遺跡では当該期の類品が存在するといひ [〔財〕大阪府埋蔵文化財調査研究センターの西村歩氏教示]、出現期の様相が和泉地方で判明し始めている現状を付記しておきたいと思う。

月若遺跡の展開図期 50 次に近い本遺跡の事前調査により、集落としていくつかの発展時期の存在することが明らかにされつつある。市内平野部の遺跡としては、業平遺跡 (第 31 地点・前期初頭 [吉田・金森 1997a・b]、打出小池遺跡 (第 23 地点・晩期前半、第 24 地点・晩期後半) [佐藤・小淵 1997、森岡・木南 1997b] と並んで珍しく縄文時代の遺物が確認されており、これまでに早期末から前期初頭の土器 (第 13 地点) [浅岡・古川・姫路 1993]、中期末の土器 (第 2 地点) [森岡 1986b]、前期～後期の土器 (第 18・19 地点) [森岡・木南 1995、森岡・木南 1996] など、併せると、100 点を超す縄文土器片が検出されている。13 地点と 18・19 地点は、阪急電鉄の南側で南北に隣接しており、本遺跡の弥生時代以前の基盤層直上ないしは基盤層中に包蔵していたことで共通する。第 13 地点における黄色シルト質土上面での確認例は数 10 点を数える土器片が有機的

にまとまったものであり、遺構の存在も予測されるが、全体としてはプライマリーな状態を保つ出土状態とは言えず、いままお縄文集落の存在は不詳である。近在の地からの流動的要素をもつものと考えられる。

環濠集落の可能性の強まった月若遺跡第1・13・20・28・30の各地点では、それぞれ大溝が検出されており、既に集落の周囲をとり囲む環濠ではないかとの見解が出されている〔森岡・木南編 1996〕。これについては、南方へ流下する流路の存在から反論的な意見もあり〔浅岡・古川・姫路 1993〕、今後論議を呼ぶものと思われるが、第20・28地点では、環濠の変曲部も見いだされ、両地点とも北へ屈折する状況がうかがわれるようになった。仮にこの変曲点を拠所に東西の推定規模を勘案すると、60～70 mを測ることになる。近畿地方における環濠集落の盛期は弥生時代中期後半にあり、中期末～後期初頭には埋没して廃棄される例が多いだけに、遅くとも庄内式期前半段階に環濠を掘開かせる本遺跡例はやや特異な存在となる。環濠最上層には須恵器を混じえ、6世紀前半段階には完全に埋没するが、5世紀頃にはおよそ埋まっていた状況がみとれる(第131図)。(森岡)

第4節 打出岸造り遺跡の実態について

本遺跡は、市域東部を流下する宮川の右岸、扇状地扇端付近の低地に立地するもので、その確認は意外に早く、戦前、摂津地域周辺の遺跡実査を熱心に果した地元研究者の紅野芳雄氏が1936年頃には既に兆候をつかんでいた〔紅野 1940、村川・森岡 1976〕。当時の記録(前掲『考古小録』昭和9年3月14日の記事ほか19回の踏査記録)によれば、弥生時代の遺跡として認識されているが、包含層は65 cmに達する地点もあり、有望な遺跡であることが予測されていた。遺物の採集地点は、宮川に架かる戸月橋を70 m程西に入った所であり、高さ2 m近い台地の東端を切り下げて道路を開設した際、濃密な包含層が確認されたようである。これを第1地点と呼んでおり、平成7年度に再調査がかかる機会があった〔森岡・木南編 1996〕。

本遺跡が中・近世に下っても重要な遺跡と分かったのは、第4地点の調査からで〔和田 1991〕、中世の水田跡や近世の石組暗渠が出土した。市内の他の遺跡に比べ、調査次数はまだ少ないが、今回実施された第9地点(調査面積1,250 m²)における発掘成果は予想を超えて、目を見張るものがある(第186図)。

第9地点における調査成果 第1調査面で検出された遺構は、1号溝・2号溝・暗渠で、近世末～近代の時期に属する。開削年代を限定的に考えると、1号溝(近代)、2号溝(近世末)、暗渠(割石・瓦質土管利用、近世末)となり、遺構の重複関係から、2号溝→1号溝の変遷が知られる。第2調査面で検出された遺構は、3号溝・4号溝・畦状遺構・耕作痕跡で、中世段階のものである。所属時期は、3号溝(鎌倉～室町時代)、4号溝(室町時代以前)、畦状遺構(鎌倉～室町時代)、耕作痕Aタイプ(近世)、耕作痕Bタイプ(鎌倉～室町時代)。



第186図 打出岸造り遺跡調査地点分布図 1/5000

第3調査面で検出された遺構は、確認調査で全く予測されなかったものであり、中世以前と判断される河川跡・塚状遺構などがみられる。河川跡は、1号河道(D・E層堆積流路、古墳～奈良時代)・2号河道(C層堆積流路、弥生時代末～古墳時代初頭)・3号河道(B層堆積流路、弥生時代末～古墳時代初頭)・4号河道(A層堆積流路、弥生時代末～古墳時代初頭)の各期に形成をみた流路の集約である。COグリッド3号河道西端で検出された塚状遺構は、検出長2.83m(復元長4.2m前後)を測り合学構造を採る。ただし、部材全体が原位置を保っているとは言い難く、「井堰」と呼ぶには、問題ありとされる。遺物は土器類が20箱程度であるが、木製品が変則縦長コンテナ4箱と通常箱数箱程度存在する(第140～149図)。

市内初見例となった種々の木製品類 第9地点3号河道を中心に出土した木製遺物は、地域の既往調査ではこれまで乏しかったものであり、横槌・木鍾(ツチノコ)・編台日盛板(コモゲタ)・鉄柄・鉄身・ナス形又鉄・皿・箱(四方転び)・杭材・板材などの製品がみられ、貴重な資料を提供している(第154・155図)。

これらの木製品は自然木を含め、大半が3号河道に伴うものであり、塚状遺構の転用材も存在している(柄6)。したがって、埴輪時期も庄内式最新段階併行期を下限とする一括性があり、少なくとも布留1式後半段階以降以降に下降することはないであろう。その点では、兵庫県下において姫路市長越遺跡などに概ね併行する木製品資料といえ、西摂津地域においてその内容が新たに加わったと言える。とくに紡織具関係の資料としては、横槌・木鍾・編台日盛板などがセット関係をみせ、当該期の実態を知ることができる。

河川跡の性格 発掘区中央付近で検出された確認長17.1mの河川跡は北東から南西方向に走行するもので、幅8m、深さ2mを計測する。開削時期については不詳であるが、出土土器から主たる機能がいわゆる庄内式併行期にあったことは間違いないであろう。調査区西端部で検出された塚状遺構は同期の所産と推定されるもので、長さ3m弱、幅1.5mを測り、流水方向と直交する。断面形態や遺構内埋土からみて、単なる自然河川でないことは明白であるが、100%人工的な流路とするには難点もあって、報告者も留保していることを付記しておく。

当該河川遺構はほぼ同じ頃、個人住宅建築に伴い確認調査が実施された第1地点(大原町82番地)の発掘区で確認された流路状遺構〔森岡・木南編1996〕と規模・形状や埋積土が類似している。直線距離にして約250m離れているため、確たることは言えないが、まず同一河川の上流延長部ととらえて大過ないであろう。そのように考えると、宮川の本流と関係をもつとみるのが自然と思われる。当河川への分水点については不明確であるが、地図と地勢の現地観察から推して、第1地点東側の道路に一部その形跡をとどめている可能性が強い。曲がりくねった地割さからった小径痕が宮川へと接近していく。したがって、より上流部で宮川の本川から取水していることが推測でき、私は人工的な農業灌漑水路とみなしている。

井堰状遺構の検出 河川跡の調査区西端近くでみつかった木組は、崩壊が著しいが井堰の一部とみてよい構造をもっており、市内初例の施設とみられる。伴出した土器から想定される時期は、庄内式期の最新段階を下限とするものであり、布留式期には下らぬものとみられる。この時期、近畿中央部では、水田稲作適地の拡充に伴い、灌漑システムの発達と刷新がみられるが、本例もその所産と考えたい(第147～149図)。

第1地点における河川状遺構 本遺跡の発見地ともいえる第1地点については、既に詳報があるため〔森岡・木南編1996〕、ここではごく簡単にふれるにとどめたい。

調査方法としては、住宅建築の基礎工事がほぼ終わっていたため、その部分は未調査とし、駐車場の予定された深掘部分をトレンチ状に改変して、土層断面と遺物包含層の実情を確認調査し(第1調査区)、掘削残土の盛られた盛土部分が前庭になる予定であったため、そこに新たに試掘坑を設定した(第2調査区)。第1調査区は東西8.3m、南北2.0m、第2調査区は東西5m、南北3mの大きさである。検討した土

層断面は、現地表面が標高 17.5m の高さにあり、確認深度は 15.4m の高さまでである。平面的な調査におよばなかったため、遺構の確認は土層断面によったが、自然流路 1 条と人工的な流路 1 条が検出された他、セクションに土坑やピットなどの遺構が視認された。流路については、NR-1・2 と呼称し、土坑・ピットは SK・SP を遺構番号に付す。

NR-1 調査区 1 (東西調査坑) の北壁東半で検出された流路断面で、走向は一応南北方向とみられる。水田耕土・床土以下第 1～15 層すべてを破って西層法面が形成されており、比較的新しい流路と思われる。東側については工事により切断され、またさらに下部へと堆積が続くため、幅や深さは未詳であるが、幅が広く、断面「V」字形を呈するか、もしくは、東に向けての地形的段差の低所部分に厚く洪水的堆積がみられた状況である。当河川の本来の肩は、標高 16.9m の位置にあり、検出最低深度は 15.45m を計測する。

NR-2 は、NR-1 とはかなり異なった様相をみせる。流路はまず新たに試掘を行ったところで平面的に検出され、その内部を一部ではあるものの、層位的に調査できた。また、本流路については、その中心部を発掘したようで、レンズ状堆積土の北側立ち上がりの部分が既に確認されており、およそその幅について見通しを得ることができた。

流路を平面的に検出したのは、標高 16.43m の位置で、発掘を開始した盛土の上面高は 17.85m 付近である。調査結果から判断すれば、NR-2 が第 9 地点で発掘された河道とその方向や規模からみて、同一のものと判断することも可能であろう。

芦屋の考古学史において、本地点においては世に名高い「打出岸遺跡」の再検証という特筆すべき調査成果がもたらされた。既に住宅の建設工事に入っている状況下、確認調査を進めたため、調査方法には多くの制約があったが、僅かな発掘面積にもかかわらず、自然流路 1 条の横断面を偶発的にも検出し得、出土土器からその割削時期を 3 世紀前半に特定することができた。この流路については現行道路の走向などにも痕跡をとどめるものようであり、いまだ上流部で官川から分岐した可能性が高い。

紅野氏採集遺物の再検討 紅野芳雄氏が昭和 9 年に 6 回、昭和 10 年に 9 回の記述を残した本遺跡発見当初の記録〔紅野 1940〕から、採集遺物の内容を整理したことがある〔村川・森岡 1976, p184 表 35〕、それを今改めて吟味すると、興味深い事実に逢着する。①土器採集地点は道路北側の崖面が圧倒的に多いこと。②赤褐色土器が多く、須恵器は 1 点しか認められないこと。③石器は凹基無茎式 1 点のみで、サメカイト剥片が 1 片すら見いだされなかったことが強調されていること。④櫛状波状文をもつ壺形土器口縁部片が存在すること。の 4 点である。

①は、第 1 地点の再調査でも追認できたことであり〔森岡・木南編 1996〕、②③は本遺跡の中心時期の上・下限を考えるのに徴証を示す。すなわち、須恵器を伴出しないことと石器の消滅期を示唆することは、第 1・9 調査地点の河川状遺構出土土器が区内式併行期のものであることと全く矛盾せず、発見当初からその様相をうかがわせていたことが改めて指摘できる。④は〔村川・森岡 1976〕の p185 図 84 に拓影を提出した土器片であるが、当該資料の波状文を詳細に検討すると、同心半円弧状のコンパス風展開と波長を示しており、弥生土器とみるより区内期の壺の断片とみる方が正確を射ていよう。と同時に、④は②③のことと整合する点も見逃せない。

以上のように、紅野氏採集資料の内容も平成 7 年度に調査した第 1・9 地点の調査結果と深く絡むものであることが了解されよう (第 186 図)。

振津産区内式甕か、播磨産区内式甕か 打出岸遺跡(第 9 地点)で検出をみた第 151 図 36・37 の球形体部の壺形土器は、芦屋市内で完形に復された最初の区内式甕として貴重な存在である。図化したとおり、典型的な末期区内式甕を採る薄手の甕であるが、胎土からみて中河内生駒西麓産の土器ではない。河内産区内式甕の振津

地域における確證例は東摂地区18遺跡、阪神地区8遺跡、三田地区1遺跡と数少ない上、搬入率の高い遺跡も安満・東奈良・徳橋・垂水南・崇徳寺・森の宮など東摂に属する数遺跡に限られる〔森岡・中井・濱野1996〕。阪神・三田地区では1遺跡1～2点から数点どまりで、壺全体に占める割合も1%に満たないものである。また、併行期の摂津の壺の庄内式志向度・模倣度も猪名川を境に東側の地域に強く、東奈良遺跡では積極的に在地化した庄内模倣壺を製作している。両地域の動態は明らかに地域差が認められる。〔森岡1985c〕。

今回注目されている2点の完好な薄づくりの壺は、いわゆる模倣品ではなく、型式学的にみてティピカルな庄内式系譜の薄壺で、非河内産である点が最も問題となる。一括資料群中の他の壺全体を見渡す限り、庄内式の組成を強く志向するものは少なく、その点でもこれら2点の存在が唐突なわけである。また、2点の壺の置かれた型式学的位置は、米田編年〔米田1989〕の庄内式期Vに下るものとみられ、近畿中央部（とくに中河内地域）では、庄内様式の土器の残存が認められる布留式期Iに併行するもののようである。ただし、今回報告されている河道の一括資料は、布留式段階への模式的転換がかなり不十分で、それ自体が西摂という地域性を当該期において表しているかもしれない。したがって、これらの資料が型式的把握がなされる点で下限となる。

最近、非河内産の庄内式壺で大きな問題になっていることは、播磨産庄内壺の存在と提唱である。俗に淡紋岩質砂礫構成の播磨の胎土を有する庄内式壺のことであり、龍野市尾崎遺跡16一溝などの出土例を標式とする。姫路以西播磨川流域までの地域の播磨タイプの胎土を示す庄内壺を詳細に検討した岸本道昭氏は、河内型庄内壺と比較して異質点として、「口縁部のつまみ上げられた外面がやや内傾すること、口頸部直下外面のナデがないこと、底部の尖り方があいこと」をあげ、逆に河内型との接近を示す特徴として、体部内面のヘラケズリの範囲や外面のタタキ目の叩き上げの方向を指摘している〔岸本1995a・b〕。

こうした特徴を示す播磨産の庄内壺〔米田1992〕は、大阪府茨木市東奈良遺跡に2点確認でき、他に奈良県桜井市磯向遺跡、大阪府八尾市中田遺跡・東弓削遺跡、堺市下田遺跡、京都府鴨田遺跡などで類品は増加しつつある〔米田1997〕。芦屋を含む西摂地域では、目下のところ未確認であるが、本例の胎土を検鏡観察された奥田尚氏によれば、やはり播磨産の疑いが強いとされる。米田敏幸氏もまた、播磨の庄内壺の技術的特徴を借えたものと考えている。

筆者は、肉眼観察による共伴土器との胎土の比較から、打出岸造り遺跡自体で製作された地場の土器とみており、中河内地域の人々の移動を伴った中河内技術伝統によって作られた「摂津産の庄内式壺」と考えている〔森岡1996b〕。その歴史的背景は、土器の相互交流といった次元のものではあり得ず、ごく少数の製作者の移住を前提としたものであり、在来の集団にとっては、技術の伝達があったにせよ、布留式の開花・普及前後にあることを思えば、時既に遅しの感がするのである。

なお、あえて付言するなら、この壺庄内様式の変形土器が播磨産になるにせよ、摂津産になるにせよ、少なくとも庄内式の古相段階には認められない事実であり、渡辺昇氏は「河内等の影響を受けて播磨型が完成した」と述べている〔渡辺1996〕。筆者の考えもほぼ同様であり〔森岡1996b〕、実見した播磨地域における庄内壺に播磨産と断言し得る資料が認められる事実は容認しているが、量的には少量の存在形態といえ、分布地域も狭く限られる上に、庄内式期の新しい型式に位置する現状にあっては、初期庄内壺の播磨発祥説提唱〔米田1992・1997〕については大いに疑義があるのではないだろうか。

胎土からみる庄内式併行土器群の2類型 かつて、弥生土器の焼き上がりの様相差をとらえて「山の土器」（褐色系土器群）と「里の土器」（灰白色系土器群）とを弁別し、前者は段丘崖麓頭粘土など一次粘土を素地土として用い、後者は川べり、沼沢地ほか活発な沖積作用により生成をみた二次粘土を素材として使ったものとの想

定を仮説的に提示した〔森岡 1980b〕。その差は、焼成の度合や埋没環境に基因するといった批判論議があるにせよ、この考えは 17 年を経た今日に至っても全く変わっていないが、市内の庄内式併行土器群の観察と分析から、ますますその二大別を意識あるものと理解している。ここでは、これをⅠ類・Ⅱ類と仮称する。

今回、報告された打出岸遺跡（第 9 地点）の庄内期の土器は、明らかにⅡ類に属するもので、灰色・灰白色・灰黄色・灰褐色・黄灰色・黄白色・暗灰色などの色調を基調とする焼き上がりを示し、遺跡固有の土器の顔つきをもっている。混和物も全体として少なく、微砂・細砂の基質を備え、明らかに芦屋川右岸地域の諸遺跡の庄内期の土器とは視認による識別が可能である。出土土器全体を見渡して感性的な比率を検討すると、同じⅡ類に入る該期の資料は、打出小松遺跡（第 22 地点）、若宮遺跡（第 1 地点）や小松原遺跡（第 1 地点）の同期の資料で確認されており、専ら市域東部の翠ヶ丘丘陵周辺の遺跡に顕著であって、いわゆる宮川水系の遺跡圏として理解することも可能である。

一方、芦屋川右岸の扇状地に立地する月若・寺田・芦屋庵寺・三条九ノ坪・冠・三条岡山の諸遺跡は、褐色・赤褐色・黄褐色・黄赤色・黄褐色などトーンの低い暗いイメージをもつⅡ類の土器群とは大きく異なっており、明い赤・茶系統の発色を示す土器をもつことで共通している（Ⅰ類）。混在させると、互いに他遺跡の土器を抽出できぬ程よく似た色調・胎土の土器であり、全体として砂粒・石粒の混和度Ⅱ類とはかなり様相を異にし、岩片や鉱物粒子の粗いものがより多く含まれている。Ⅰ類の土器も畿内第Ⅴ様式の後半段階から庄内式期にかけてのものであり、Ⅱ類としたものと概ね同時期であることから、個々の遺跡の立地差、古環境差が大きく土器の胎土を左右することが知られよう。

弥生中・後期の土器をもって設定し得た「山の土器」「里の土器」の概念的様相差〔森岡 1980b〕は、高地性集落の資料を全く含まない庄内式期前後の段階でも適用し得ることが判明したが、今後、他地域の資料とも厳密に比較検討を行うべきであろう。また、土器の生産地分析や狭域内での移動論の有効な視点と考える。

打出岸遺跡の範囲と大原遺跡との関連性 打出岸遺跡の広がりについては、第 1 地点で原点が再認識されるとともに、第 9 地点の成果により大幅に修正し直す必要が高まった。今回の調査地では、惜しむらく居住域を確認するには至らなかったが、出土土器の様相からみて、近傍の地に集落があったことは間違いなく、とりわけ人工的な流路が検出されたことにより、東西、特に西方への広がりが確実視されるようになった。東側については、第 1 地点との間に有機的な関係もみられ、周知範囲の確かさが裏づけられたものといえよう。

西方への広がりについては、70～80 m の至近場所に大原遺跡（中世・近世・近代）が存在しており〔浅岡・姫路・古川 1992〕、その密接な関係は避けて通れそうにない。

従来、芦屋川～宮川間 J 東海道線以北の沖積地一帯は、昭和 13 年の阪神大水害時の被害記録をみて明らかとなり、生産基盤である耕地に影響をおよぼす洪水に幾度となく見舞われている地域である。したがって、室町時代以降の遺構はみられるものの、南北朝時代以前の遺構の確認は少なく、栗平遺跡の第 35・37 地点などでそれ以前の遺物が散見されるのみで〔水口 1997a・b〕、全面調査を実施した栗平遺跡第 41 地点でも明確な遺構は少なかった。

（森岡）

第 5 節 久保遺跡の範囲と性格について

本遺跡は数少ない宮川左岸側の遺跡で、六甲山地南麓部に派生する翠ヶ丘台地上に立地している。遺跡名には、旧打出村の小学名を採っている〔森岡編 1993、森岡・木南編 1996〕。1987 年、共同住宅の建設に伴う試掘

調査によって中世遺物の包含が初めて確認され〔森岡・河野1987〕、その後実施された本調査では、市域初出の水田跡を検出するところとなった。鎌倉時代～室町時代を中心とする時期のもので、宮川氾濫による洪水層によって水田面は覆われていた。これを第1地点と称している〔芦屋市教委1987〕(第187図)。

今回震災復興調査の行われた第15地点は、既往調査の東端に位置し、以下に概括できる諸遺構が見いだされた。

第15地点検出の遺構 古代から近代に至る遺構が地表面1面で一括検出され、石組暗渠(近代)・SD1・SD2・SD3・SD4・SK1～12(近世～近代)・SD5(中世)・SK17(奈良時代)・SK18(中世以降)・水田開墾遺構・葦溝・足跡(近代)・SK13～16(不明)などがみられる。

これらのうち前後関係の判明したものについて記すと、暗渠→SD1最終改修、SK7・8→SD1、SD3→SD1・2、SD5→SK18となり、遺構の変遷過程をある程度うかがうことができる。



第187図 久保遺跡調査地点分布図 1/5000

翠ヶ丘台地の地質構造と久保遺跡の遺構ベース 第15地点ははじめ久保遺跡の発掘最終面のベースは、黄褐色粘土や黄色砂層・砂礫層の共在面である。更新統期以降の古い地層と考えられる。

新生代第三紀鮮新世末期から第四紀更新世(洪積世)前半にかけて、六甲変動による古大坂湾沈降部に形成をみた大阪層群は、アズキ火山灰層を境として上部と下部とに分けられるが、芦屋・西宮市境の高塚山付近から北に下部が、南に上部が分布しており、翠ヶ丘町から親王塚町にまたがる低平な台地は後者によって構成される。俗に翠ヶ丘台地と称される山麓山手から派生する台地は、六甲山地南麓部にあっては最も南にまで発達しており、その成因は宮川が山麓に至って形成した古扇状地が間欠的な地盤の上昇により台地化が進んだものとされる。その垂直範囲は標高10～40m、阪神沿線から阪急沿線の広い範囲を占めている。翠ヶ丘台地は今から約2万年以降のビュルム氷期後半に生成をみた扇状地面で、いわゆる中段段丘であって、面傾斜も比較的緩やかで高度も低い。

(森岡)

第6節 まとめと課題

以上、震災復興調査初年度に当たる平成7年度の補助金調査の内容を閲覧、集約しつつ、成果の一端を概括した。成果は発掘件数や規模の上昇に則して勢い圧縮した形で噴出するものと思われるが、本年度はそのとっかかりを示したものであったと思う。

芦屋廃寺遺跡においては、遺跡範囲自体の確定が急がれていたが、こと奈良・平安時代の創建期に近い時代に限れば、東限付近の様相と1棟ながら建物跡が把握できた。特にW地点の発掘所見は、東接する月若遺跡との関係を当該期において証することになり、従来の遺跡分布地図における線引きの正しさを証明したものと見える。ただし、下層遺構ともいえる古墳時代後期の遺構群については、かつて掘立柱建物が見いだされているものの(B地点)、該期の遺構はむしろ月若遺跡の方が有力であり、庄内式期段階のものを含め、同遺跡の北限部として

とり込んで理解すべきであろう。

月若遺跡については、各時期の複合度において厚薄があることが追認され、関連地点を含み込んで推定すれば環境の存在が有力視できる成果を得た。今後は、阪急電鉄神戸線以北における存在形態を追求する必要がある。

昭和初年以來長い間、幻であった打出岸造り遺跡に関しては、ようやくその一部が姿を現した実感がある。古墳時代前期初頭段階の土器・木器は水路出土ではあるものの、層位的一括性に富み、良質な基本資料を提供している。今後は集落域の解明とともに、宮川水系における本遺跡の当該期の水利システムの把握が課題となろう。

また、久保遺跡については、近代以前の地割に関する微証を得た。

前代未聞の震災に伴う復興調査であるがゆえ、調査結果のとりまとめから、遺物整理、報告書の作成・刊行に至るまで、さまざまな困難がつきまとうことが当初より予想された。とりわけ出土品の洗浄・註記・復元・選別・実測・製図などの分類整理作業は拙速さが要求されても、一定の時間がかかるものであり、本書に収め得た遺物も一点一点がその困難を乗り越えて収載できたものである。とりわけ、平成7年度の報告遺跡は、復興関連の現地調査が下半期に偏在したため、年が明けて2月～3月の終盤時点でなお4遺跡が調査継続ないしは調査開始といったありさまであったから、遺物洗浄や註記作業を終えるのがやっとで、多くの遺跡の資料は実測や図面整理・製図などの諸作業が平成8年度にもち越された。しかし、担当者との連絡調整も支援期間ぎれでまもなく、新年度の復興調査が7年度の数倍に激増したため、整理作業は長期間、中断を余儀なくされた。加えて、文化財課執務室や資料収蔵場所の移転が二度三度と要請され、遺物を広げて分類整理を行う場所も現実には1年近くない状態が続いた。報告書を作るための環境も劣悪である。

したがって、本書に収めた出土資料の本格的整理作業は、平成9年1月末になって市内翠ヶ丘町に「埋蔵文化財調査・整理基地」が応急施設として設営されてから以降、急遽泊車がかかったものであり、本文原稿・押印・図版の作成作業も日々突貫工事を進め、どうにか収載可能に至ったものである。それを受けての各遺跡の歴史的な位置づけ、考証も不十分なものとならざるを得なかった。至る所で積み残しは多いが、それでも大震災の街で発掘調査が実現できたからこそその成果であったと思う。今後は、限られた支援体制をいかに維持していくか、長期的な出土品の整理体制をいかに整備していくか、また、報告書の刊行をどの程度消化していくかが、それぞれ大きな課題であろう。

(森岡)

引用・参考文献目録

- 浅岡俊夫・吉川久雄・郷路真保 1992年
浅岡俊夫・吉川久雄・郷路真保 1993年
芦屋市 1976年
芦屋市 1996年
芦屋市 1997年 a
芦屋市 1997年 b
芦屋市教育委員会 1980年
芦屋市教育委員会 1987年
芦屋市教育委員会 1993年
芦屋市教育委員会 1994年
芦屋市教育委員会 1996年 a
芦屋市教育委員会 1996年 b
芦屋市教育委員会 1997年 a
芦屋市教育委員会・金部山古墳調査会 1989年
芦屋市教育委員会・金部山古墳調査会 1987年
安達厚三・木下正史 1974年
淡神文化財協会 1993年 a
淡神文化財協会 1993年 b
池田 恒・吉川久雄 ほか 1983年
勇 正広・藤岡 弘 1976年
勇 正広・藤岡 弘・横爪康生 1971年
石野輝信・関川尚功 1976年
泉 拓良 1982年
泉 拓良 1985年
井関弘太郎 1963年
井関弘太郎 1983年
今村雄三・町田利幸 1997年
上坂幸徳・福島孝行・藤井 悠 1998年
植松裕治・小野在義和 1997年
大川勝宏・平澤時雄 1997年
大崎順彦 1983年
太田陽子 1996年
大橋章二 1988年
大橋章二 1994年
大橋章二・西田実子 監 1988年
大平 茂 1992年
岡崎正雄 1989年
岡田 啓 1980年
岡田 啓 1991年
岡本敏行・大庭和人 1996年
岡本敏行・大庭和人 1997年
岡野敏雄・奈木敦士 1989年
岡野敏雄・田中達夫・深井明比古・熊田正男 1982年
小野田義和・目次謙一 1997年
柏原正臣・河合 修 1997年 a
『芦屋市大原遺跡―第3地点―』 六甲山脈遺跡調査会
『芦屋市月若遺跡―第10地点・第13地点―』 六甲山脈遺跡調査会
『新修 芦屋市史』資料篇
『震災から復興へ―阪神・淡路大震災の記録』
『阪神・淡路大震災 芦屋市の記録95～96』
『平成8年版 芦屋市統計書』(芦屋市総務部総務課文書統計係)
『(現地説明会資料)城山古墳群発掘調査の成果』
『芦屋市久保遺跡現地説明会ノート』
『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図 利用の手引き』
『弥生遺跡第4地点現地説明会ノート』
『芦屋市芦屋庵寺遺跡W地点 地元説明会へようこそ』
『平成8年度 寺田遺跡(第40地点)発掘調査実報報告書』
『現地説明会資料 兼平遺跡第31地点』
『(現地説明会ノート)金部山古墳周縁の発掘調査―第2地点における前方部の存在確認調査』
『芦屋庵寺B地点遺跡発掘調査現地説明会ノート』
『飛鳥地域出土の古式土器』『考古学雑誌』第60巻 第2号 日本考古学会
『弥生遺跡の発掘調査(1)』『のじきく文化財だより』17
『弥生遺跡の発掘調査(2)』『のじきく文化財だより』18
『西宮神社境内地発掘調査報告書』西宮市教育委員会
『第1 部考古学 第3 章古墳時代』『新修芦屋市史』資料篇1 芦屋市役所
『尼崎市史ノ田遺跡』<尼崎市文化財調査報告書第6集> 尼崎市教育委員会
『編内』 桜井市教育委員会
『西日本史の編年上器再考―近畿地方縄文時代中遷後半中心に―』『考古学論叢小
林行雄博士古著記念論文集』 平凡社
『第1部考古学 第1章北白川遺跡町遺跡出土の縄文土器 1中瀬太縄文土器の分析』
『京都大学埋蔵文化財報告書―北白川遺跡町の縄文土器の調査―』 京都大学埋蔵
文化財研究センター
『伊勢湾北郡海岸地域の地形構造』『日本歴史』第22巻別巻1 岩波書店
『神饌平野』 東京大学出版会
『芦屋庵寺第48地点発掘調査実報報告書』 芦屋市教育委員会
『若古遺跡(第2地点)』『平成9年度 年報』 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事
務所
『寺田遺跡(第77次地点) 実報報告書』 芦屋市教育委員会
『打出小松遺跡(第22地点) 実報報告書』 芦屋市教育委員会
『地震と建築』『岩波新書(東版)240』岩波書店
『兵庫県南部地震(1995.1.17)で現れた野島地帯断層による地表変位と災害の根
拠』『地理学評論』
『肥前新報』 ニューサイエンス社
『古伊万里』『別冊太陽』 平凡社
『古伊万里の文様』 理工学社
『下相野原址―近世丹波焼の調査』『近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書』
兵庫県教育委員会
『丹波焼について』『中尾城跡―近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書X
1』兵庫県教育委員会
『尼崎市東園田遺跡(第1次・第2次調査報告書)』 尼崎市教育委員会
『尼崎市中ノ田遺跡Ⅲ』<尼崎市文化財調査報告書第22巻> 尼崎市教育委員会
『芦屋庵寺遺跡(Z地点)発掘調査実報報告書』 芦屋市教育委員会
『月若遺跡(第35地点・第37地点)発掘調査実報報告書』 芦屋市教育委員会
『川西市栄祝遺跡―第9次発掘調査報告書―』 川西市教育委員会
『栄祝遺跡』<兵庫県文化財調査報告書第14冊> 兵庫県教育委員会
『月若遺跡(第36次地点)発掘調査実報報告書』 芦屋市教育委員会
『久保遺跡(第28次地点)発掘調査実報報告書』 芦屋市教育委員会

柏原正民・河合 修 1997年 b
 柏原正民・日次謙一 1997年 a
 柏原正民・日次謙一 1997年 b
 鎌田 勉・藤井 聖 1997年
 神野 信・吉田東明 1997年
 川崎輝彦・野村亮太郎・大矢真也 1996年

関西大学考古学研究室 編 1983年

岸本道昭 1995年 a
 岸本道昭 1995年 b

公共事業に伴う埋蔵文化財取扱い実態調査に
 関する検討委員会 編 1997年
 紅野芳雄 1940年
 神戸市教育委員会 1996年
 古代の土器研究会 編 1992年
 古代の土器研究会 編 1993年
 古代の土器研究会 編 1994年
 古代の土器研究会 編 1996年
 古代の土器研究会 編 1994年

後藤壽幸 1988年

酒井龍一 1976年

佐藤公保・小関忠司 1997年
 白神典之 1990年
 白神典之 1992年
 白神典之 1998年

高野一嘉・平澤幹雄 1997年

高橋 学 1996年

竹村忠洋 1996年

竹村忠洋 1997年 a

竹村忠洋 1997年 b

竹村忠洋 1997年 c

田中眞吾 編著 1988年

田辺眞人・位原康夫・渡部永子・岩本昌三
 ・森岡秀人 1979年

中性土器研究会 編 1995年

辻林 浩・渡部 紀 1997年 a

辻林 浩・渡部 紀 1997年 b

都出比呂志 1974年

寺沢 寛 1986年

寺沢 寛・森岡秀人 編 1989年

寺沢 寛・森岡秀人 編 1990年

長崎産業試験場 編 1985年

中田 実・鈴木篤美 1997年

中村啓太郎・三輪晃三 1997年

中村 浩 1981年

中村 浩 1992年

長屋幸二・岡本典典 1996年 a

長屋幸二・岡本典典 1996年 b

『久保遺跡(第29次地点)発掘調査実報報告書』 芦屋市教育委員会
 『三条九ノ坪遺跡(第15次地点)発掘調査実報報告書』 芦屋市教育委員会
 『寺田遺跡(第81次地点)発掘調査実報報告書』 芦屋市教育委員会
 『堂ノ上遺跡(第1地点)発掘調査実報報告書』 芦屋市教育委員会
 『葉平遺跡(第27地点)発掘調査実報報告書』 芦屋市教育委員会
 『芦屋市・寺田遺跡(55地点)発掘調査実報報告書』 芦屋市教育委員会
 『墓石の転倒からみた兵庫県南部地震の被害分布とその地形環境』『地理学評論』Vol.69
 No.1 日本地理学会
 『兵庫県芦屋市山戸屋遺跡S4地点収引実資料』芦屋市教育委員会・関西大学山戸屋
 遺跡調査団
 『庄内遺跡発掘実証考』『庄内式土器研究』X 庄内式土器研究会
 『播磨の庄内式』『尾崎遺跡Ⅱ 市道北山長尾線新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調
 査報告書』<路野市文化財調査報告14> 路野市教育委員会
 『公共事業と埋蔵文化財—公共事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の手引—』ぎょうせい

『考古小録』 西宮史学会

『平成5年度 神戸市埋蔵文化財年報』

『古代の土器1 郡城の土器集成Ⅰ』

『古代の土器2 郡城の土器集成Ⅱ』

『古代の土器3 郡城の土器集成Ⅲ』

『古代の土器4 意次島(近畿編)』

『古代の土器研究—律令系土器様式の西東3—』『古代の土器研究会 第3回シン
 ポジウム』

『六平山の地質と岩石』『六平山の地層—その自然と暮らし—』神戸新聞出版セン
 ター

『和泉における「伝統的V様式」に関する覚書』『豊中・古池遺跡発掘調査実報』
 その目 豊中・古池遺跡調査会

『打出小橋遺跡(第23地点)発掘調査実報報告書』 芦屋市教育委員会

『堺堀井と明石指跡』『江戸の陶磁器』江戸遺跡研究会

『堺堀井考』『東洋陶磁』第19号 東洋陶磁学会

『第5章 堺堀井について』『堺堀井都市遺跡発掘調査報告書』堺市文化財調査報告
 第37集

『芦屋市所在被災マンション等再建事業に伴う三条九ノ坪遺跡発掘調査実報報告
 書』芦屋市教育委員会

『土地の歴史と阪神・淡路大震災』『地理学評論』69 No.A-7

『平成7年度久保遺跡(第15地点)発掘調査実報報告書』 芦屋市教育委員会

『平成8年度芦屋高寺遺跡(第49地点)発掘調査実報報告書』 芦屋市教育委員会

『平成8年度寺田遺跡(第89地点)発掘調査実報報告書』 芦屋市教育委員会

『平成8年度寺田遺跡(第90地点)発掘調査実報報告書』 芦屋市教育委員会

『六平山の地層—その自然と暮らし—』神戸新聞出版センター

『芦屋の生活文化史—民俗と史跡をたずねて—』 芦屋市教育委員会

『概説 中性の土器・陶磁器』 真融社

『芦屋高寺遺跡(第44地点)発掘調査実報報告書』 芦屋市教育委員会

『葉平遺跡(第25地点)発掘調査実報報告書』 芦屋市教育委員会

『古墳出現前後の集落関係』『考古学研究』20-4 考古学研究会

『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所

『弥生土器の様式と年代』近畿編Ⅰ 木耳社

『弥生土器の様式と年代』近畿編Ⅱ 木耳社

『弥生土器の年代と編年』近畿編Ⅲ 木耳社

『冠遺跡(第7地点)発掘調査実報報告書』 芦屋市教育委員会

『葉平遺跡(第29地点)発掘調査実報報告書』 芦屋市教育委員会

『和泉陶器窯の研究』柏書房株式会社

『須置器庫の分布と変遷』雄山閣出版

『芦屋高寺遺跡(第29次地点)発掘調査実報報告書』 芦屋市教育委員会

『芦屋高寺遺跡(第29次地点)』『平成7年度年報』兵庫県教育委員会・埋蔵文化財
 調査事務所

- 長屋幸二・佐藤京二 1996年a
 長屋幸二・佐藤京二 1996年b
 堀崎彰一 1977年
 難波邦三 1992年
 西川卓志・吉田茂伸 1990年
 堀宜田佳男・矢口裕之 1997年a
 堀宜田佳男・矢口裕之 1997年b
 堀宜田佳男・矢口裕之 1997年c
 堀宜田佳男・矢口裕之 1997年d
 堀宜田佳男・矢口裕之 1997年e
 磯爪康正・岡田 勇 1980年
 橋本久和 1992年
 野本 格・前田保夫 1989年
 加 美徳・河原雄大 1989年
 東 和幸・小松 謙 1997年
 兵庫県教育委員会 1996年
 兵庫県教育委員会・兵庫県文化財調査事務所 1995年
 兵庫県教育委員会・兵庫県文化財調査事務所 1996年
 兵庫県教育委員会・兵庫県文化財調査事務所 1997年a
 兵庫県教育委員会・兵庫県文化財調査事務所 1997年b
 広瀬和雄 1978年
 藤川祐作 1979年
 藤田和夫 1982年
 藤田和夫 1983年
 藤田和夫 1985年
 藤田和夫・佐野正人 1996年
 藤澤市治・金子直樹・新井美穂・平野純正
 ・相川理恵子・山口 寛・中沢健史 1996年
 古市益一 1992年
 前田 勇 1971年
 前田保夫 1979年
 前田保夫 1980年
 前田保夫 1989年
 前田保夫・久後利雄 1980年
 前田保夫・青木 格 1983年
 関根忠彦 1991年
 水口富夫 1997年a
 水口富夫 1997年b
 南 博史 1985年
 武蔵 誠・有坂隆道・末中哲夫・村川行弘 1971年
 武蔵 誠・有坂隆道・末中哲夫・ほか 1976年
 村川行弘 1959年
 村川行弘 1970年
 村川行弘 1976年
 村川行弘・石野博信 1964年
 『芦屋南寺遺跡(W地点)発掘調査実情報告』芦屋市教育委員会
 『芦屋南寺遺跡(W地点)』『平成7年度年報』兵庫県教育委員会・兵庫県文化財調査事務所
 『丹波』『日本陶磁全集11』中央公論社
 『龍川氏大坂城築城の経緯』『龍川氏の研究』第9号 大阪市文化財協会
 『越水山遺跡発掘調査報告書』西宮市教育委員会
 『芦屋南寺遺跡第43地点発掘調査実情報告』芦屋市教育委員会
 『芦屋南寺遺跡第45地点発掘調査実情報告』芦屋市教育委員会
 『芦屋南寺遺跡第47地点発掘調査実情報告』芦屋市教育委員会
 『平成8年度国庫補正事業 月若遺跡第44地点発掘調査実情報告書』芦屋市教育委員会
 『平成8年度国庫補正事業 寺田遺跡第96地点発掘調査実情報告書』芦屋市教育委員会
 『尼崎市東園田遺跡(第1次・第2次調査報告)』<尼崎市文化財調査報告第12集> 尼崎市教育委員会
 『中世土器研究序論』真陽社
 『神戸の地層を説く(2)―神戸200万の自然史―』『神戸の自然17』神戸市立教育研究所
 『三条九ノ坪遺跡第一次発掘調査報告』三条九ノ坪遺跡発掘調査団・芦屋市教育委員会
 『第26遺跡第26地点発掘調査実情報告』芦屋市教育委員会
 『平成7年度年報』兵庫県教育委員会・兵庫県文化財調査事務所
 『阪神・淡路大震災特集 復興と遺産文化財』『兵庫県遺産文化財情報ひょうごの遺産』第18号
 『兵庫県遺産文化財情報ひょうごの遺産』第23号
 『兵庫県遺産文化財情報ひょうごの遺産』第25号
 『特集平成9年度前半の復興調査』『兵庫県遺産文化財情報ひょうごの遺産』第27号
 『小島東遺跡』『町道調査報告書概要』大阪府教育委員会
 『探石場としての岩ヶ平』『兵庫県遺産文化財調査集報』第4集 兵庫県教育委員会
 『日本列島砂山論』小学館
 『日本の山地形成論―地質学と地形学の関』青柳南房
 『変動する日本列島』『岩波新書(青)306』岩波書店
 『阪神・淡路大震災と六甲変動』『震災の移』をもちいた建設大地理。『科学』Vol.66 岩波書店
 『阪神・淡路大震災後の西宮市の商業地区における店舗の営業再開状況―地蔵発生2ヵ月後までの調査報告―』『地理学評論』Vol.69 No.4-7
 『芦屋の自然1―市街地の自然―』『自然観察ガイドブック①』芦屋市立打出教育センター
 『芦屋の自然探検』『新修芦屋市史』本篇 芦屋市役所
 『六甲の断層をさぐる』『神戸の自然1』神戸市立教育研究所
 『龍文の海と森―元新宮前藩の自然史―』森樹書房
 『六甲山はどうしてできたか』『神戸の自然2』神戸市立教育研究所
 『六甲の森と大坂湾の誕生』『神戸の自然4』神戸市立教育研究所
 『神戸の地層を説く(1)―神戸市研究学園都市の自然史―』『神戸の自然12』神戸市立教育研究所
 『龍文の海と森』ニューサイエンス社
 『第26遺跡(第35次地点)第2次確認調査概要報告書』芦屋市教育委員会
 『第27遺跡(第37次地点)第2次確認調査概要報告書』芦屋市教育委員会
 『芦屋市寺田遺跡発掘調査報告書』財団法人古代学協会
 『新修芦屋市史』本篇 芦屋市役所
 『新修芦屋市史』資料編1 芦屋市役所
 『第2章 考古学からみた芦屋』『新修芦屋市史』本編 芦屋市役所
 『芦屋八十景調査実情』『芦屋山道調査実情』<芦屋市文化財調査報告第1集> 芦屋市教育委員会
 『芦屋南寺遺跡』<芦屋市文化財調査報告第7集> 芦屋市教育委員会
 『第1篇考古篇 第4章歴史時代』『新修芦屋市史』資料編1 芦屋市役所
 『金下山遺跡』『芦屋市文化財調査報告書 第3集』芦屋市教育委員会

村川行弘・石野博信・森岡秀人	1985年	『会下山遺跡 増補』 芦屋市教育委員会
村川行弘・藤岡 弘・佐々木幸雄	1967年	『芦屋市埋蔵文化財包蔵地台帳』 芦屋市文化財調査報告 5
村川行弘・森岡秀人	1976年	『第1篇考古篇 第2章弥生時代』『新修芦屋市史』資料篇 1 芦屋市役所
村川行弘・森岡秀人・村川義典	1985年	『三条岡山遺跡第5次発掘調査略報』 芦屋市教育委員会
森 正・岡本泰典	1996年 a	『月若遺跡(第20次地点)発掘調査実情報告書』 芦屋市教育委員会
森 正・岡本泰典	1996年 b	『月若遺跡第28次地点発掘調査実情報告書』 芦屋市教育委員会
森 正・岡本泰典	1996年 c	『月若遺跡(第20次地点)』『平成7年度年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
森 正・岡本泰典	1996年 d	『月若遺跡(第28次地点)』『平成7年度年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
森岡秀人	1974年	『花岡性土壌地帯に立地する六平山系高地性集落とその性格』『朝日ヶ丘縄文遺跡発掘調査・会下山弥生遺跡緊急調査』<芦屋市文化財調査報告 第8集> 芦屋市教育委員会
森岡秀人	1977年	『畿内第V様式の稲年組分と大師山遺跡出土土器の占める位置』『河内長野大御山』<関西大学文学部考古学研究第5号> 関西大学文学部
森岡秀人	1980年 a	『Aの芦屋岡寺(芦屋遺跡めぐり10)』『海技通信』345 高松大学校
森岡秀人	1980年 b	『土器からみた高地性集落会下山の生活様式』『藤井比佐介遺跡記念考古学論叢』刊行会
森岡秀人	1982年	『阪神地方その過渡時代-『西摂の縄文文化展』に寄せて-』『芦の芽』35
森岡秀人	1984年	『大阪湾沿岸の弥生土器の編年と年代』『高地性集落と倭国文化』雄山閣
森岡秀人	1985年 a	『芦屋岡寺 A 地点遺跡発掘調査の結果略報-昭和40年代芦屋岡寺調査地点南部隣接地複合遺跡の調査-』芦屋市埋蔵文化財調査報告60年度-1
森岡秀人	1985年 b	『弥生時代層年代論をめぐる近畿第V様式の時代観』『信濃』137-4 信濃史学会
森岡秀人	1985年 c	『土器の交流 西日本』『月刊考古学ジャーナル』252号 ニューサイエンス社
森岡秀人	1985年 d	『月若遺跡の発掘調査結果の概観』 芦屋市教育委員会
森岡秀人	1986年 a	『芦屋岡寺 B 地点遺跡発掘調査概要報告書-昭和60年5月23日、昭和61年6月27日実施のトレンチ3本の調査記録について-』芦屋市埋蔵文化財調査61年度概要-2
森岡秀人	1986年 b	『埋蔵文化財調査メモリアル80-85』<芦屋市文化財調査報告第14集> 芦屋市教育委員会
森岡秀人	1987年 a	『芦屋岡寺 B 地点遺跡試掘調査記録』昭和62年度埋蔵文化財調査概要 4 芦屋市教育委員会
森岡秀人	1987年 b	『芦屋岡寺 I 地点遺跡試掘調査概要報告書』昭和62年度埋蔵文化財調査概要 9 芦屋市教育委員会
森岡秀人	1987年 c	『冠遺跡試掘調査概要報告書』芦屋市埋蔵文化財調査62年度概要-3 芦屋市教育委員会
森岡秀人	1987年 d	『冠遺跡発掘調査の概要』芦屋市埋蔵文化財調査広報昭和62年度-1 芦屋市教育委員会
森岡秀人	1987年 e	『古墳時代の芦屋地方(上)-近年の遺跡調査をよりかえて-』『兵庫県史』23 兵庫県史編さん室
森岡秀人	1988年 a	『古墳時代の芦屋地方(下)-近年の遺跡調査をよりかえて-』『兵庫県史』24 兵庫県史編さん室
森岡秀人	1988年 b	『月若遺跡(第1地点)』『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』兵庫県教育委員会
森岡秀人	1989年	『芦屋市の埋蔵文化財展-新出土の遺物を中心として-因んで』『芦41』芦の芽グループ
森岡秀人	1990年	『前方後円墳からみた古墳時代の阪神地方』『考古学論叢』第3集 考古学を学ぶ会
森岡秀人	1991年	『土師器の移動I(西日本)』『古墳時代の研究』6 土師器と須恵器 雄山閣
森岡秀人	1995年	『海浜の古墳-摂津・金津山古墳と打出小橋古墳について-』『西谷真治先生古稀記念論文集』西谷真治先生の古稀をお祝する会
森岡秀人	1996年 a	『土師器の移動の続編』『収蔵』第4号
森岡秀人	1996年 b	『二、三の考察とこれからの研究課題-5. 根拠産庄内墓の存否について』『庄内式土器研究』X II 庄内式土器研究会
森岡秀人 編	1979年	『三条岡山遺跡』(芦屋市文化財調査報告第10集) 芦屋市教育委員会
森岡秀人 編	1980年	『芦屋市埋蔵文化財遺跡分布地区及び地名表(第1分冊)』<芦屋市文化財調査報告第12集> 芦屋市教育委員会
森岡秀人 編	1988年	『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図および利用の手引き』<芦屋市文化財調査報告第16集> 芦屋市教育委員会

- 森岡秀人 編 1993年
『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図および利用の手引き』＜芦屋市文化財調査報告第24集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 編 1994年
『月若遺跡(第18地点)発掘調査報告書』＜芦屋市文化財調査報告第29集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 編 1995年
『平成6年度国庫補助事業芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 月若遺跡(第19地点)』＜芦屋市文化財調査報告第26集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 他 1988年
森岡秀人 他 1989年 a
『三条九ノ坪遺跡第2地点発掘調査中間報告書』 芦屋市教育委員会
『現地説明会ノート』金津山古墳周辺の発掘調査－第2地点における前方部の存在確認－ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 他 1989年 b
森岡秀人・木南アツ子 1995年 a
森岡秀人・木南アツ子 1995年 b
森岡秀人・木南アツ子 1995年 c
森岡秀人・木南アツ子 1995年 d
森岡秀人・木南アツ子 1995年 e
森岡秀人・木南アツ子 1995年 f
森岡秀人・木南アツ子 1995年 g
森岡秀人・木南アツ子 1995年 h
森岡秀人・木南アツ子 1995年 i
森岡秀人・木南アツ子 1995年 j
森岡秀人・木南アツ子 1995年 k
森岡秀人・木南アツ子 1997年 a
森岡秀人・木南アツ子 1997年 b
森岡秀人・木南アツ子 編 1995年
『三条九ノ坪遺跡第2地点発掘調査最終報告書』 芦屋市教育委員会
『寺田遺跡(第41次地点)確認調査概要報告書』 芦屋市教育委員会
『家ノ上遺跡(第1次地点)確認調査概要報告書』 芦屋市教育委員会
『芦屋鹿寺遺跡(W地点)確認調査終了報告書』 芦屋市教育委員会
『小松原遺跡第2次調査地点確認調査概要報告書』 芦屋市教育委員会
『芦屋鹿寺遺跡(第29次地点)確認調査概要報告書』 芦屋市教育委員会
『寺田遺跡(第47次地点)確認調査概要報告書』 芦屋市教育委員会
『月若遺跡(第25次地点)確認調査概要報告書』 芦屋市教育委員会
『月若遺跡(第28次地点)確認調査概要報告書』 芦屋市教育委員会
『久保遺跡(第15次地点)確認調査概要報告書』 芦屋市教育委員会
『月若遺跡(第20次地点)確認調査概要報告書』 芦屋市教育委員会
『寺田遺跡(第55次地点)確認調査概要報告書』 芦屋市教育委員会
『芦屋鹿寺遺跡第45地点(小松家住宅)発掘調査実績報告書』 芦屋市教育委員会
『打出小松遺跡(第24地点)確認調査概要報告書』 芦屋市教育委員会
『平成6年度国庫補助事業市内遺跡発掘調査概要報告書』＜芦屋市文化財調査報告第26集＞ 芦屋市教育委員会
- 高岡秀人・木南アツ子 編 1996年
『平成7年度国庫補助事業市内遺跡発掘調査概要報告書』＜芦屋市文化財調査報告第27集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・後神 豊・高崎正智 1989年
『三条九ノ坪遺跡(第3次地点)試掘』芦屋市埋蔵文化財調査報告書 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・河野豆人 1987年
森岡秀人・院野 豊 1988年
『久保遺跡試掘調査記録』昭和62年度埋蔵文化財調査概要2 芦屋市教育委員会
『月若遺跡第2地点試掘調査記録』昭和63年度埋蔵文化財調査概要16 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・関野 豊 1988年
『三条九ノ坪遺跡第1次試掘調査記録』昭和62年度埋蔵文化財調査概要31 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 1997年
森岡秀人・土井和幸 1988年
『平成8年度寺田遺跡(第40地点)発掘調査実績報告書』 芦屋市教育委員会
『久保遺跡第2地点試掘調査記録』昭和63年度埋蔵文化財調査概要17 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・中井秀樹・濱野俊一 1996年
『庄内式併行土器の様相をめぐる浜津地域の動向(予報)』『庄内式土器研究』Ⅱ－庄内式併行期の土器生産とその動き－『浜津地域』 庄内式土器研究会
- 森岡秀人・西尾嘉英・北村宣子・土井和幸 1998年
『芦屋南寺遺跡K地点発掘調査の概要(第1分掘遺構群)』芦屋市埋蔵文化財調査報告書 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・西原雄大・古川久雄 1988年
『三条九ノ坪遺跡の探検遺物』昭和63年度埋蔵文化財調査概要3 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・白谷啓世 編 1992年
『平成3年度国庫補助事業 芦屋南寺遺跡ほか発掘調査概要報告書』＜芦屋市文化財調査報告第22集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・白谷啓世 編 1993年
『平成4年度国庫補助事業 芦屋市内発掘調査概要報告書』＜芦屋市文化財調査報告第23集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・白谷啓世 編 1994年
『平成5年度国庫補助事業 芦屋市内発掘調査概要報告書』＜芦屋市文化財調査報告第25集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・白谷啓世・西原雄大・土井和幸 1988年
『芦屋鹿寺J地点遺跡試掘調査概要報告書－南トレンチー』昭和62年度埋蔵文化財調査概要23 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・森岡 弘・古川久雄・坂井秀孝・村川行弘 1979年
『三条河山遺跡』＜芦屋市文化財調査報告第10集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・古川久雄・和田秀寿 1989年
森岡秀人・松村賢次・後神 豊 編 1991年
『三条九ノ坪第2地点発掘調査最終報告書』 芦屋市教育委員会
『平成2年度国庫補助事業 芦屋南寺遺跡ほか発掘調査概要報告書』＜芦屋市文化財調査報告第21集＞ 芦屋市教育委員会

- 森岡秀人・和田秀寿 1986年
 森岡秀人・和田秀寿 1989年 a
 森岡秀人・和田秀寿 1989年 b
 森岡秀人・和田秀寿 1989年 c
 森岡秀人・和田秀寿 1990年
 森岡秀人・和田秀寿 1991年
 森岡秀人・和田秀寿 1992年
 森岡秀人・和田秀寿・切尾圭造 1993年
 森岡秀人・和田秀寿・後村 泉 編 1989年
 森岡秀人・和田秀寿・後村 泉 編 1990年 a
 森岡秀人・和田秀寿・後村 泉 編 1990年 b
 森岡秀人・和田秀寿・関野 豊 編 1988年
 森岡秀人・和田秀寿・田口康久 1991年
 森岡秀人・和田秀寿・関野 豊 1988年
 矢口裕之・北原 治 1996年 a
 矢口裕之・北原 治 1996年 b
 安田博幸・森岡秀人 編 1984年
 柳本照男 1983年
 山戸屋遺跡発掘調査団 1981年
 山内紀嗣 1994年
 山田果弘・弘田和司 1996年
 山田博晴・平安昭光・高瀬一嘉 1992年
 山本恒年 1995年
 横田 昭・福島孝行 1997年
 吉田寛大・金沢安孝 1997年 a
 吉田寛大・金沢安孝 1997年 b
 米田文孝 1983年
 米田敬幸 1981年
 米田敬幸 1985年
 米田敬幸 1986年
 米田敬幸 1989年
 米田敬幸 1990年
 米田敬幸 1992年
 米田敬幸 1993年
 米田敬幸 1994年
 米田敬幸 1997年
 六甲山遺跡調査委員会 1992年
 渡辺 昇 1982年
 渡辺 昇 1996年
 『芦屋高寺(B地点)試掘調査概要報告書』 芦屋市教育委員会
 『月若遺跡第8地点試掘調査記録』平成元年年度文化財調査概要17 芦屋市教育委員会
 『月若遺跡第8地点略報』芦屋市埋蔵文化財調査簡報 芦屋市教育委員会
 『三条九ノ坪遺跡第5地点試掘調査記録—仮称三参公園開設予定地—』平成元年年度文化財調査概要8 芦屋市教育委員会
 『三条九ノ坪遺跡第6地点試掘調査略報』芦屋市埋蔵文化財調査簡報 芦屋市教育委員会
 『武六甲の狩人たち—旧石器・縄文時代の人びとと暮らし—』(特別展図録) 芦屋市立美術館
 『東生寺五—山のふもと—』(特別展図録) 芦屋市立美術館
 『古墳と伝承—移りゆく“坂”へのまなざし—』(特別展図録) 芦屋市立美術館
 『昭和63年度国庫補助事業 芦屋高寺遺跡K地点・寺田遺跡第16次発掘調査概要報告書』<芦屋市文化財調査報告書第17号> 芦屋市教育委員会
 『三条九ノ坪遺跡—第2地点発掘調査簡報—』<芦屋市文化財調査報告書第18号> 芦屋市教育委員会
 『平成元年年度国庫補助事業 寺田遺跡第20次地点・金津山古墳段部範囲・構造確認調査・三条九ノ坪遺跡第4地点発掘調査概要報告書』<芦屋市文化財調査報告書第19号> 芦屋市教育委員会
 『芦屋高寺遺跡G・1地点発掘調査概要報告書』<芦屋市文化財調査報告書第16号> 芦屋市教育委員会
 『芦屋の歴史と文化財—歴史資料展示室常設展示図録—』芦屋市立美術館
 『三条九ノ坪遺跡第2次試掘調査記録—三条町189番地—』昭和63年度埋蔵文化財調査概要5 芦屋市教育委員会
 『芦屋市打出岸遺跡(第8地点)発掘調査実施報告書』 芦屋市教育委員会
 『打出岸遺跡(第9地点)』『平成7年度年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事業所
 『兵庫県芦屋市旭塚古墳—波六甲城山群集墳中の一石墳の埋蔵調査とその考証—』<研究会発起20周年記念> 武庫川女子大学考古学研究会
 『古式土器に関する一試考—西原平野東部の資料を中心に—』『ヒストリア』101号(1983年度大会特集) 大阪歴史学会
 『山戸屋遺跡(S2地点)の発掘調査の概要』
 『縄文土器の新例』『大塚参考館報』第7号 大塚大学出版部
 『芦屋高寺遺跡第40地点発掘調査実施報告』 芦屋市教育委員会
 『川除・篠ノ木遺跡』<兵庫県文化財調査報告書第104号> 兵庫県教育委員会
 『兵庫復興都市計画—芦屋市を中心として』『ジュリスト』№1070
 『芦屋高寺遺跡第46地点発掘調査実施報告』 芦屋市教育委員会
 『美平遺跡(第31地点)』『平成8年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事業所
 『兵庫県芦屋市所在 共同住宅建設事業に伴う美平遺跡(第31地点) 発掘調査実施報告書』 芦屋市教育委員会
 『搬入された古式土器—摂津・室水南遺跡を中心として』『関西大学考古学研究所 発掘調査10周年記念 考古学論叢』 関西大学文学部考古学研究室
 『古墳時代前期の土器について』『八尾南遺跡』 八尾南遺跡調査会
 『中河内の庄内式と搬入土器』『考古学論叢』第1集 考古学を学ぶ会
 『雷評「矢部遺跡」』『古代学研究』112 古代学研究会
 『土器の履年 1.近畿』『古墳時代の研究』6 土器部と須恵器 雄山閣
 『邪馬台国時代の土器の移転』『邪馬台国の時代』木耳社
 『庄内播磨型土器の提唱』『庄内式土器研究』III 庄内式土器研究会
 『近畿からみた九州の庄内式土器』『月刊考古学ジャーナル』363 ニューサイエンス社
 『古墳時代前半期の近畿地方の土器類型』『西報考古学』3 西報考古学会
 『庄内式土器研究の課題と展望—庄内式土器研究会の10年—』『庄内式土器研究』XIV 庄内式土器研究会
 『芦屋市 大塚遺跡—第3地点—』
 『芦屋高寺軒瓦の整理ノート』『芦の芽』35 芦の芽グループ
 『長尾遺跡の庄内式土器について—播磨での庄内式土器編年と播磨型土器の存在意』

和田秀寿 1991年 a	『庄内式土器研究』XI 庄内式土器研究会
和田秀寿 1991年 b	『打田岸造り遺跡(第4地点)実態報告書』 芦屋市教育委員会
和田秀寿 1994年	『紫平遺跡 第13地点発掘調査報告書』 芦屋市教育委員会
	「よみがえる津知の歴史Ⅱ(原始・古代編)ー津知遺跡が語るもの」『なりひら』芦屋市立美術館だよりVol.17 '94/12 芦屋市立美術館
和田秀寿・関野 豊・西原雄大 1988年	『三条九ノ坪遺跡第1次第2回試掘調査記録』昭和63年度埋蔵文化財調査概要1 芦屋市教育委員会
和田秀寿・森岡秀人 1989年	『芦屋鹿寺L地点』(芦屋市埋蔵文化財調査簡報) 芦屋市教育委員会

圖 版
PLATE



阪神電鉄橋梁落下の地震被災〔アジア航測株式会社提供〕



震災調査対象地の庭（地震災害）



調査地遠望（北西から） 手前の建設中の復興建物は芦屋廃寺遺跡（第29地点）



調査地近景（南から） 被災家屋の門跡から望む



SB 1, SK 9～12 検出状況（西から）



SK 9～12 完掘状態（西から）



SD 2 発掘状況（南西から）



SD 2 土層断面（西から）



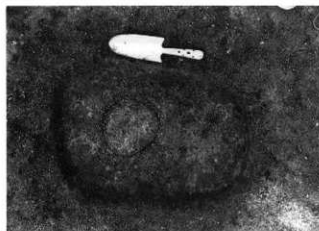
掘立柱建物 SB 1 上面検出状況（西から）



掘立柱建物 SB 1 上面検出状況（南から）



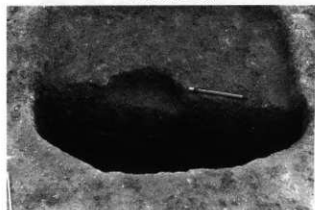
掘立柱建物 SB 1 発掘状況（東から）



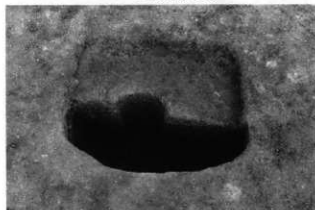
柱穴 S 2(北から)
W2(東から)



柱穴 S 2(南から)
W2(西から)



柱穴 S 1 土層断面（南から）



柱穴 S 1 半掘状況（南から）



SK14 掘削状況と堆積土層断面（南東から）



SK14 完掘状況（東から）



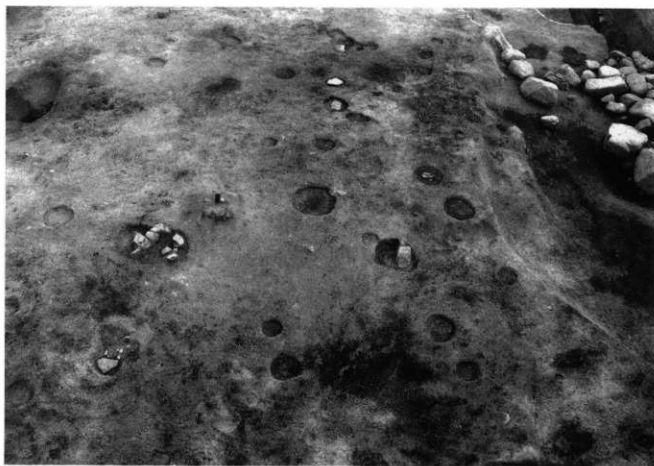
SX 1・SX 2 池状遺構発掘状況（北から）



SX 3・SX 4 発掘状況（北上方から）



西調査区北半土坑・柱穴群検出状況（北東から）



西調査区南半土坑・柱穴群検出状況（西から）



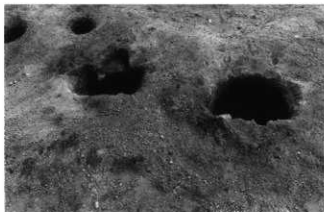
竈1完掘状態（西から）



竈2完掘状態（西から）



遺構掘削状況



B 6区 P 5・P 6（北西から）



土坑検出状態



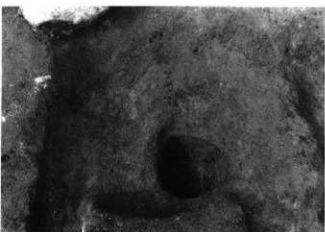
遺物出土状態



古墳時代遺構面・土層断面



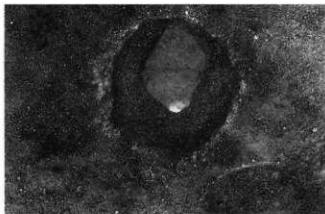
竈2発掘状況（西から）



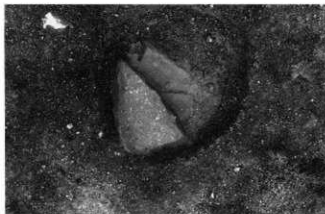
S K 14 遺構検出状態



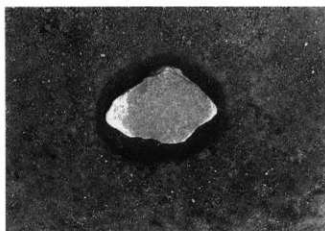
焼土面検出状態



西調査区 南半 土坑検出状態



西調査区 南半 土坑検出状態



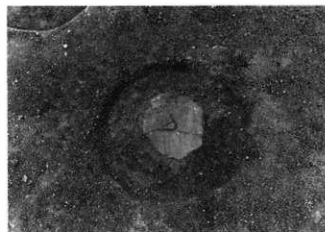
西調査区 南半 土坑検出状態



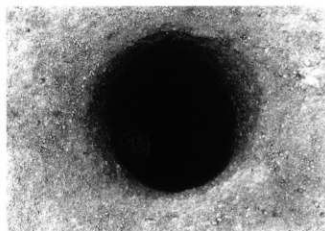
西調査区 南半 土坑検出状態



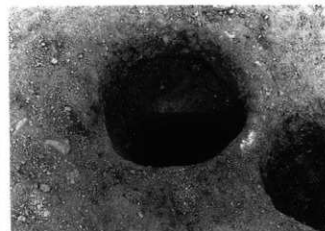
西調査区 南半 土坑検出状態



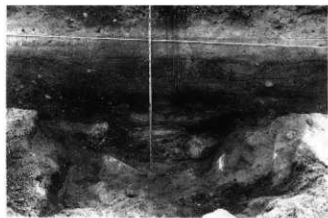
西調査区 南半 土坑検出状態



ビット内土器出土状態



B 6 区 P 20 堆積土層断面（南から）



南壁土層断面 (北から)



南壁土層断面 (北西から)



SX7 (西から)



土層断面



石組 検出状況



底部 検出状況



池状遺構 (北から)



SK 5・SD 4 完掘状況



須恵器集中部遠景（西から）



須恵器集中部近景（西上方から）



土層断面 包含遺物検出状況



SD 1 セクション 遺物出土状況



土器・瓦 遺物出土状況



須恵器杯など 遺物出土状況



SD 1 堆積土内 遺物出土状況



SD 1 4区セクションベルト遺物出土状況



土器など 遺物出土状況



須恵器集中部 遺物出土状況 (西から)



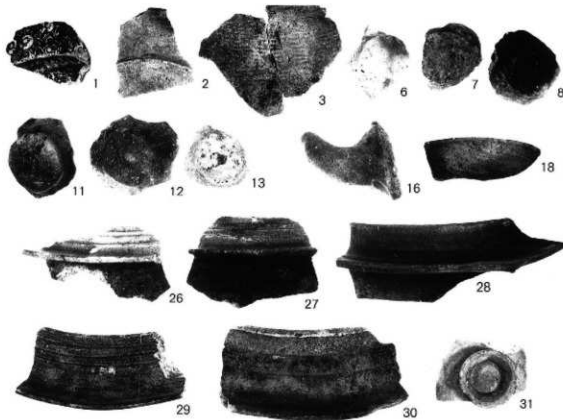
発掘調査風景[1]
（西から）



発掘調査風景[2]
（東から）



出土遺物応急整理風景
（南東から）



弥生土器・土師器 二重口縁釜 (1), 高杯 (2), 甕 (3・6～8・11～13), 土師器 把手 (16), 土師器 碗 (18), 羽釜 (26～30), 肥前染付磁器 碗 (31)



弥生土器 甕

弥生土器 甕

弥生土器 甕

土師質 蛸壺形土器

土師器 小形丸底壺

土師器 小皿

瓦器 碗

土師器 小皿

土師器 皿

土師器 小皿

土師器 皿

土師器 小皿

須恵器 杯蓋



須恵器 杯蓋

35



須恵器 杯蓋

36



須恵器 杯身

37



須恵器 杯身

38



須恵器 杯身

39



須恵器 杯身

40



須恵器 杯身

41



須恵器 杯身

42



須恵器 杯身

43



須恵器 杯身

44



土師器 杯身

55



須恵器 杯身

56



須恵器 脚台

57



須恵器 脚台

58



須恵器 脚台

60



須恵器 高杯

59



須恵器 高杯

61



須恵器 臍

63



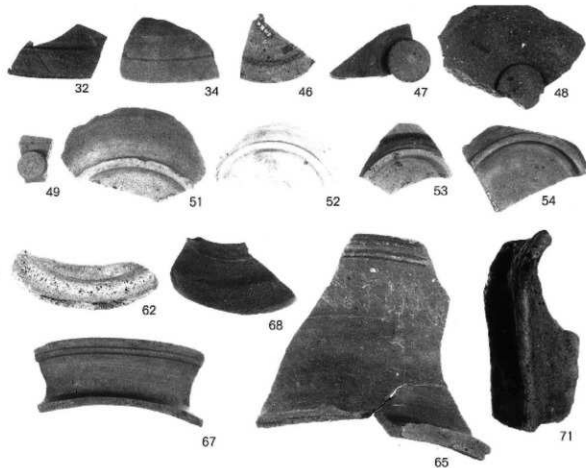
須恵器 平瓶

69



須恵器 長頸壺

70



須恵器 杯蓋 (32・34・46～49), 須恵器 杯身 (51～54), 陶足円面硯 (62), 須恵器 甕 (65・67), 須恵器 短頸壺 (68), 土師器 甕形土器 (71)



64

須恵器 杯身〔線刻文字?〕



72

丸瓦〔凸面〕



73

軒丸瓦〔瓦当〕



74

軒平瓦〔瓦当〕



72

丸瓦〔凹面〕



弥生土器 鉢



弥生土器 高杯



弥生土器 甕 (75・83), 壺 (77), 高杯 (84)



弥生土器 高杯 or 鉢



須恵器 杯蓋 (78・79・81・82・86・89・91・93・96・97)



須恵器 杯身 (100・102・104・106・107・109・111・114・115・118・119)

須恵器 短頸壺 (117),
須恵器 甕 (122・123)



須恵器 杯蓋



須恵器 杯蓋



須恵器 杯蓋



須恵器 杯蓋



須恵器 杯蓋



須恵器 杯蓋



須恵器 杯身



須恵器 杯身



須恵器 杯身



須恵器 杯身



須恵器 杯身



須恵器 杯身



須恵器 杯身



須恵器 高杯



須恵器 甕



須恵器 甕



須恵器 甕〔外面製作痕〕



須恵器 甕〔内面製作痕〕



125



128



129



130



126



127



131



132



133



134

土師器 把手 (125・126),
韓式系土器 把手 (127)

土師器 杯 (128), 土師器 壺 (129), 土師器 甕 (130・131),
瓦質土器 甕 (132), 土師器 皿 (133), 須恵器 埴 (134)



137

砥石



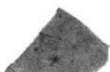
140



141



146



147



138



142



145



148



150



149



151



143



144



152



153



154

弥生土器 壺 (138), 弥生土器 甕
(142・143) 弥生土器 高杯 (144)

須恵器 杯蓋 (140・141・145～154)



155



157



160



161



162



164



165



166



167



168



169



163



170



171



172



173



174



175



176



177



178



179

須恵器 杯身 (155～169)
須恵器 埴 (170)
須恵器 甕 (171)
須恵器 有蓋高杯蓋 (172)
須恵器 高杯 (173・174)
須恵器 短頸壺 (175・176)
須恵器 器種不明 (177)
須恵器 壺 (178・179)

※ 156・158・159 は図版 23
に掲載。



139

土師器 壺



156

須恵器 杯身



158

須恵器 杯身



191

土師器 杯



159

須恵器 杯身



193

土師器 甕



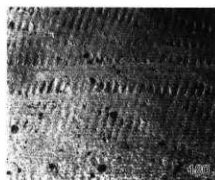
180

須恵器 甕



図無

須恵器 甕

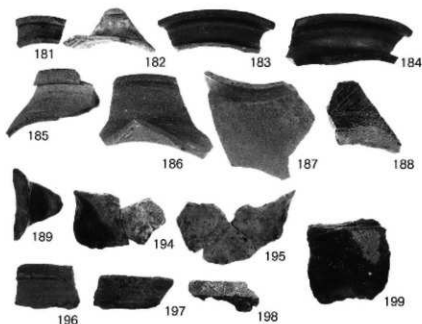


須恵器 甕〔外面調整痕接写〕

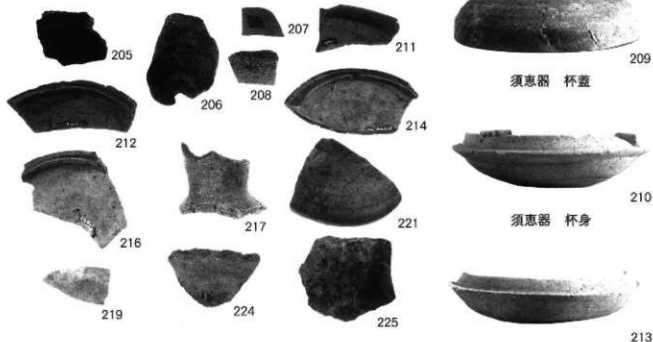


番外

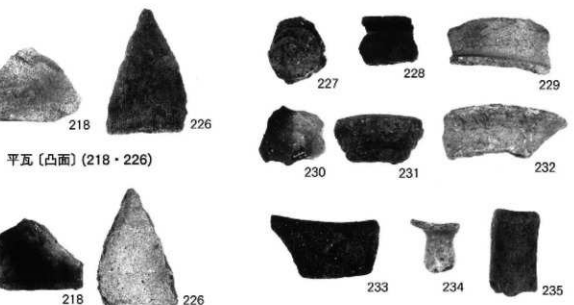
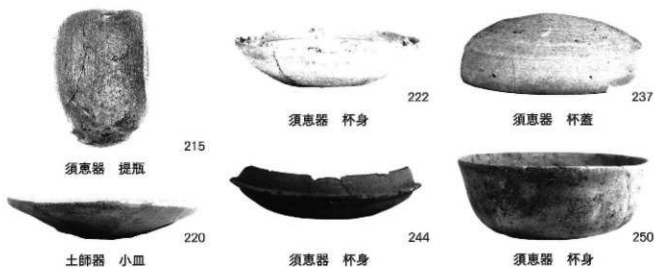
須恵器 甕〔外面調整痕接写〕



須恵器 甕(181~188), 土師器 把手(189), 土師器 甕(194・195), 須恵器 捏鉢(196), 土塼(197), 石塼(198), 丸瓦(199)

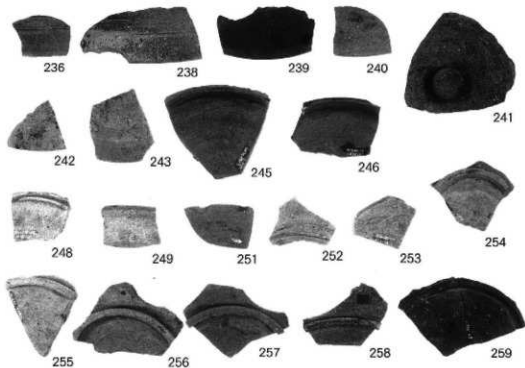


弥生土器 甕 (205), 弥生土器 有孔鉢 (206), 須恵器 杯蓋 (207・208),
須恵器 杯身 (211・212・214), 須恵器 有蓋高杯 (216), 須恵器 平瓶
(217), 土師器 小皿 (219), 須恵器 杯蓋 (221), 土師器 甕 (224・225)

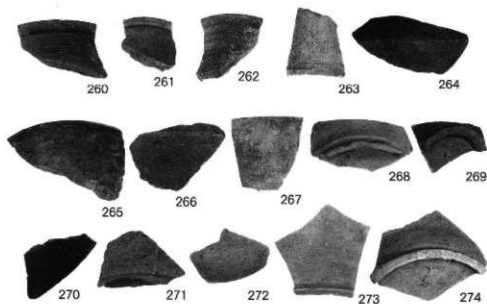


平瓦〔凸面〕(218・226)

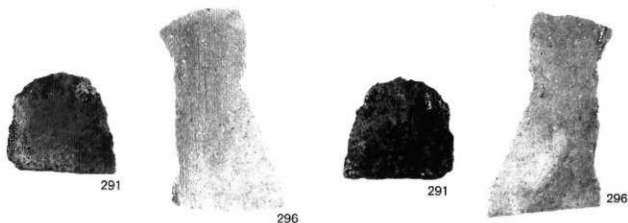
弥生土器 甕 (227), 甕 (228), 土師器 甕 (229・231),
弥生土器 壺 (230), 広口壺 (232), 土師器 壺 (233),
弥生土器 高杯 (234), 弥生土器 高杯 (235)



須惠器 杯蓋 (236・238～243), 須惠器 杯身 (245・246・248・249・251～259)

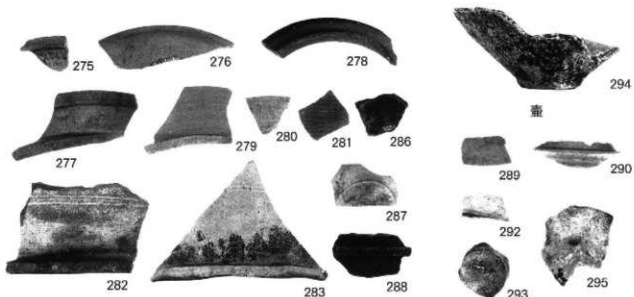


須惠器 広口壺 (260～262), 須惠器 長頸壺 (263～269・271・273・274), 須惠器 甕 (270・272)



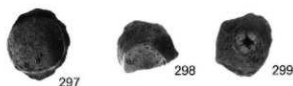
平瓦〔凸面〕(291・296)

平瓦〔凹面〕(291・296)

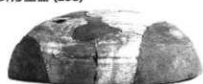


須恵器 甕 (275 ~ 283), 黑色土器 碗 (286), 須恵器 碗 (287), 土師質土器 羽釜 (288)

須恵器 杯蓋 (289), 須恵器 杯身 (290), 古式土師器 甕 (292・293), 鉢形土器 (295)



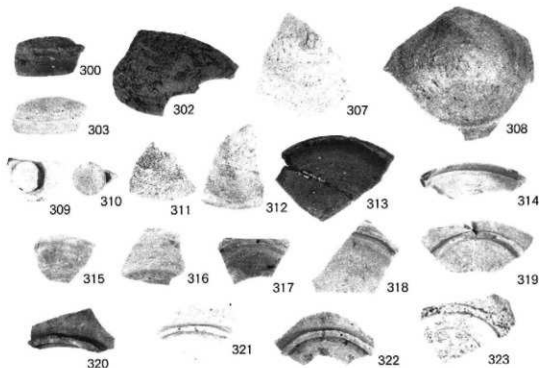
壺・甕 (297・298), 高杯 (299・305・306), 器台 (304)



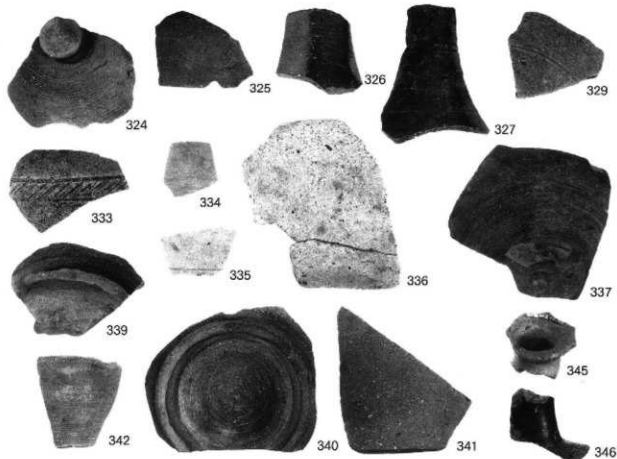
須恵器 杯蓋



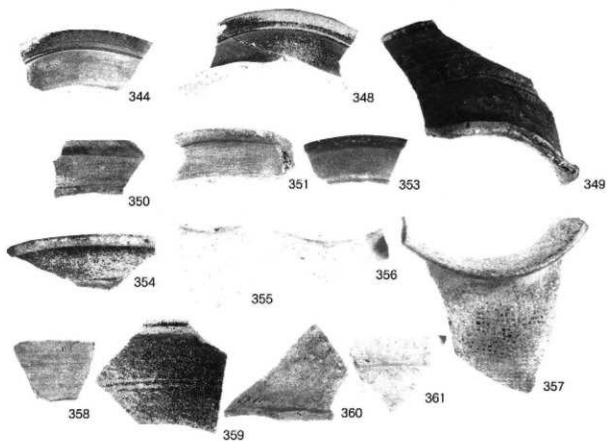
須恵器 壺 or 長頸壺



須恵器 杯蓋 (300・302・303・307 ~ 312), 杯身 (313 ~ 323)



須恵器 有蓋高杯蓋 (324・325), 須恵器 高杯 (326・327), 陶質土器 有蓋高杯蓋 or 比定不能 (329),
 須恵器 壺・長頸壺 (333・336・337・339～341), 須恵器 罐 (334), 器台 or 不詳 (335),
 須恵器 平瓶 (342・345・346)



須恵器 壺 (344・348～351・353～361)



330

須恵器 高杯



331

須恵器 高杯



332

須恵器 高杯



338

須恵器 壺



343

須恵器 平瓶



368

土師器 皿



番外

SD 3 出土 土師皿参考資料



番外

SD 3 出土 土師皿参考資料



番外

SD 3 出土 土師皿参考資料



347

須恵器 平瓶



373

蛸壺形土器



362



364



365



363



366



367



369

土師器 杯 (362・363), 回転台土師器 碗 (364・365),
須恵器 捏鉢 (366), 土師器 皿 (367), 青磁 碗 (369)



370

376



370



371



372

備前焼 摺鉢 [口縁・底部]
(370), 土師器 把手 (371・372),
フイゴ羽口 (376)



377

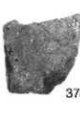


378

平瓦 [凸面] (377・378)



377



378

平瓦 [凹面] (377・378)



380



385



393



395

平瓦 [凸面] (380・385・393・395)



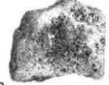
380



385

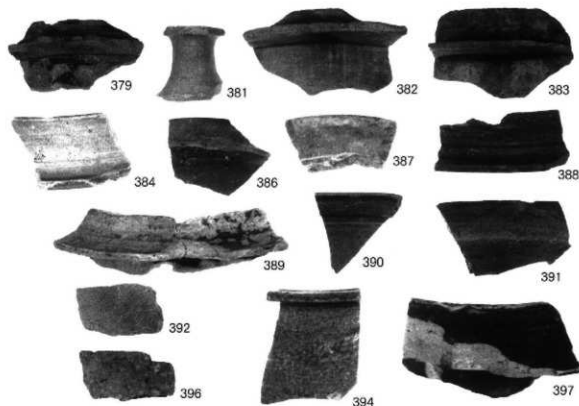


393

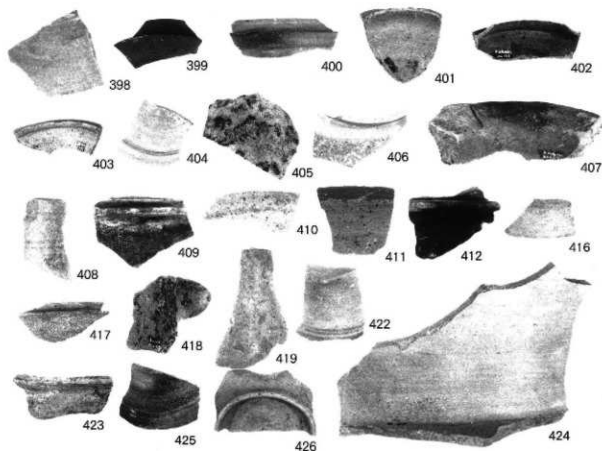


395

平瓦 [凹面] (380・385・393・395)



瓦質土器 羽釜 (379・388・389・397), 須恵器 高杯 (381), 土師質羽釜 (382~384), 備前焼 播鉢 (386), 瓦質土器 (387), 須恵器 器台 (390), 備前焼 甕 (391), 須恵器 甕 (392), 信楽焼 甕 (394), 縄文土器 (396)

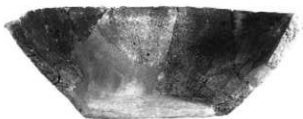


須恵器 杯蓋 (398・404・405・416), 須恵器 杯身 (399~403・417), 須恵器 短頸壺 (406), 瓦質土器 (407), 須恵器 高杯 (408・422), 瓦質羽釜 (409・412), 須恵器 捏鉢 (410・411), 土師器把手 (418), 高杯 (419), 土壺 (423), 須恵器 甕 (424), 須恵器 台付壺 (425), 須恵器 碗 (426)



備前焼 擂鉢〔外面〕

413



備前焼 擂鉢〔内面〕

413



414



415



456

平瓦〔凸面〕(414・415・456)



414



415



456

平瓦〔凹面〕(414・415・456)



420

須恵器 杯蓋



421

須恵器 台付壺



428

須恵器 杯蓋

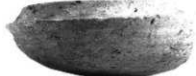


427



434

須恵器 杯身



435

須恵器 杯身



432



433



437

古式土師器 鉢(427), 古式土師器
高杯(432・433・437)



436

須恵器 杯身



438

須恵器 杯身



444



447

瓦質土器 羽釜(444・447)



448

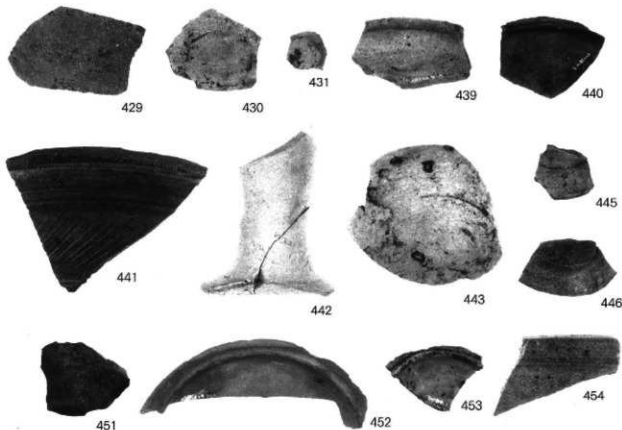


449

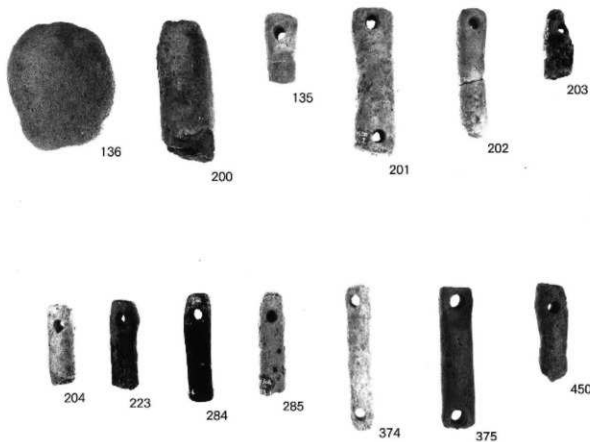


455

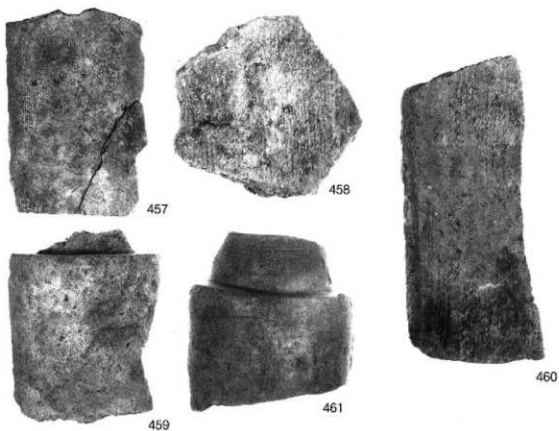
陶質土器 把手(448) 土師器 把手(449), 埴(455)



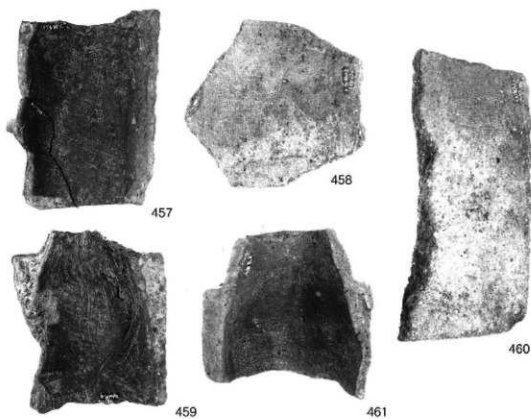
須恵器 杯蓋 (429・430・431), 須恵器 杯身 (439・440・452・453), 須恵器 甕 (441・454),
須恵器 長頸壺 (442), 須恵器 平瓶 (443), 須恵器 高杯 (445・446), 甕 (451)



管状土鏝 (136・200), 有孔棒状土鏝 (135・201・204・223・284・285・374・375・450)



丸瓦〔凸面〕(457・459・461), 平瓦〔凸面〕(458・460)



丸瓦〔凹面〕(457・459・461), 平瓦〔凹面〕(458・460)



調査地近景〔西側駐車場部分〕（北西から）



震災により住宅が全壊した調査地東側の現状（北西から）



東調査区Ⅴ層上面遺構掘削状況（西から）



東調査区Ⅵ層上面遺構掘削状況（西から）



東調査区Ⅶ層上面遺構完掘状態（東から）



西調査区完掘状態（西から）

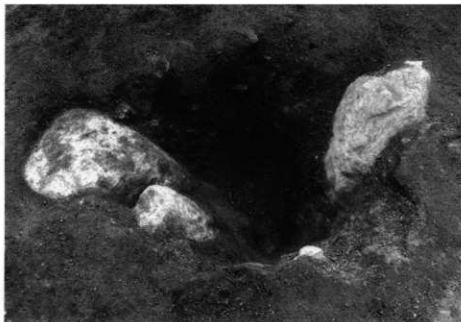


西調査区北壁土層断面（南東から）



東調査区北壁土層断面（南東から）

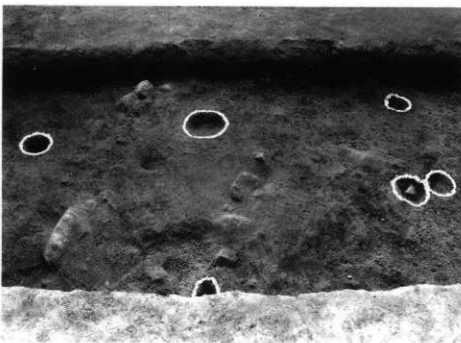
調査区中央V層上面 SK02 検出状態
（北から）

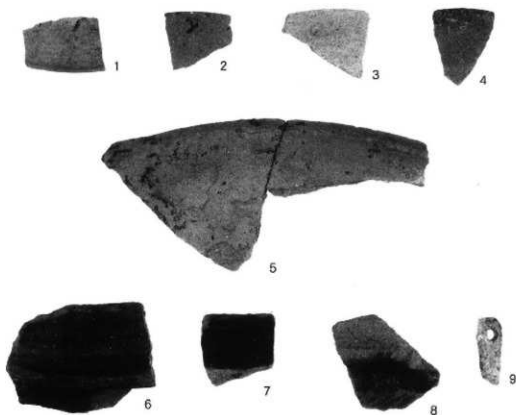


東調査区東半Ⅶ層上面完掘状態
（東から）

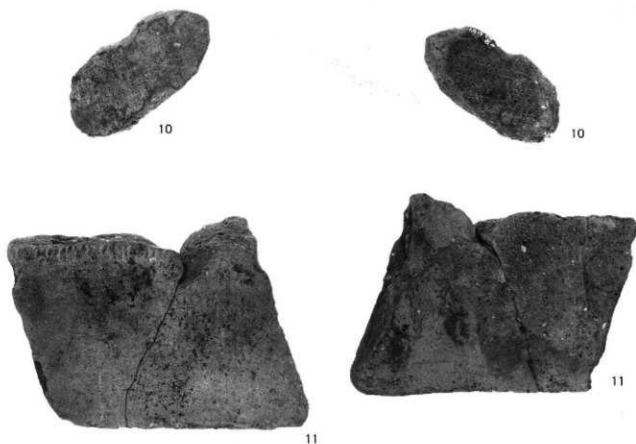


東調査区東半Ⅶ層上面完掘状態
（北から）





須恵器 杯蓋 (1), 須恵器 杯身 (2・3), 須恵器 壺 (4), 須恵質土器 片口鉢 (5), 瓦質羽釜 (6・7), 羽釜 (8), 棒状有孔土鏝 (9)

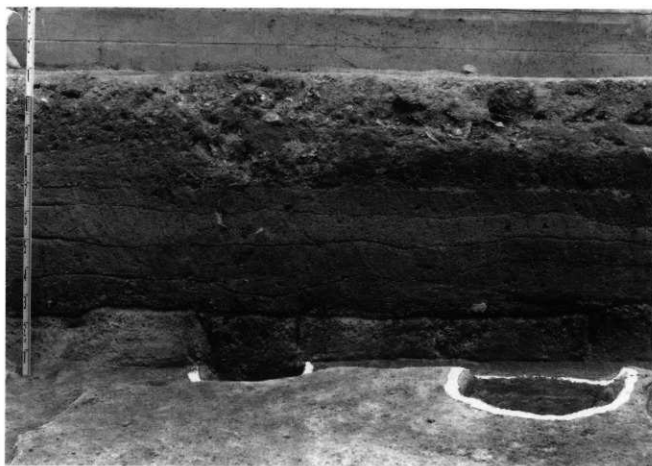


丸瓦〔凸面〕(10), 平瓦〔凸面〕(11)

丸瓦〔凹面〕(10), 平瓦〔凹面〕(11)



調査地の現状（南西から）



西壁（2）南端土層断面（東から）



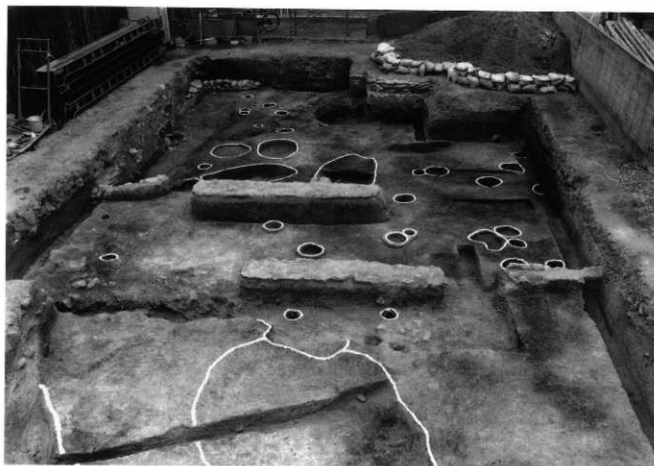
上層遺構完掘状態（北から）



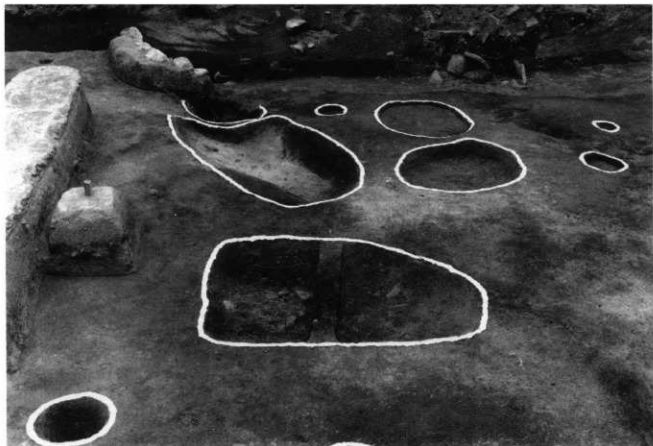
上層遺構電発掘状況近景（南から）



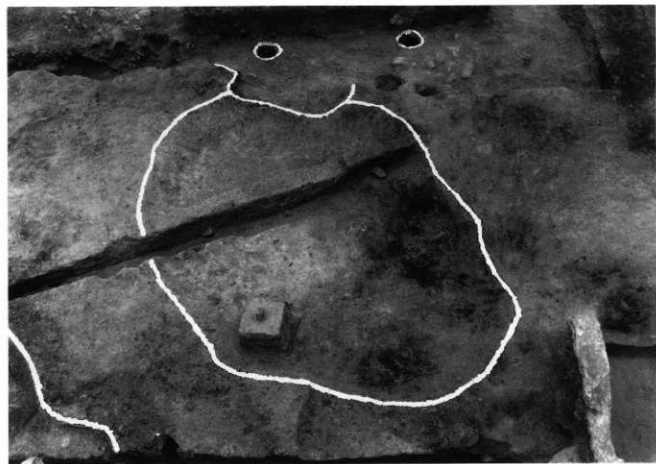
下層遺構完掘状態（南から）



下層遺構完掘状態（北から）



SK02・05～07 掘削状況（西から）



SK04 掘削状況（北から）



SK02 土層断面
(南から)



SK04 土層断面
(北から)



SK06 断ち割り状況
(北から)



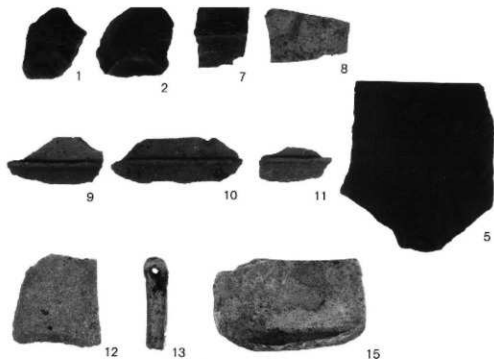
SX01 検出状態
（西から）



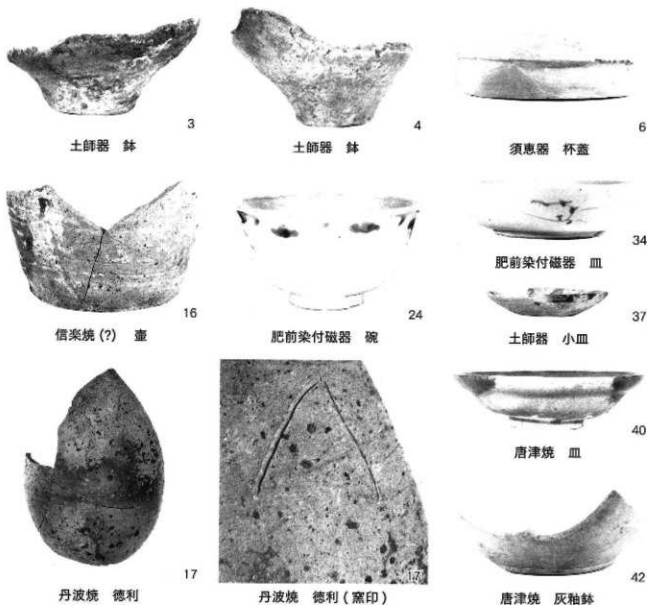
SX01 検出状態
（南西から）



SX02 完掘状態
（西から）



古式土師器・土師器 鉢 (1), 古式土師器・土師器 鉢 or 甕 (2), 古式土師器・土師器 甕形土器 (5),
須恵器 杯蓋 (7), 須恵器 短頸壺蓋 (8), 須恵器 杯身 (9~11), 須恵器 短頸壺 or 平瓶 (12),
棒状有孔土埴 (13), 土師質土器 羽釜 (15)



土師器 鉢

土師器 鉢

須恵器 杯蓋

信楽焼(?) 壺

肥前染付磁器 碗

肥前染付磁器 皿

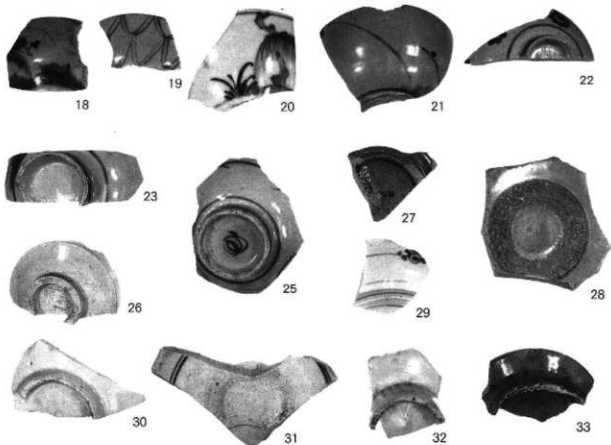
土師器 小皿

丹波焼 德利

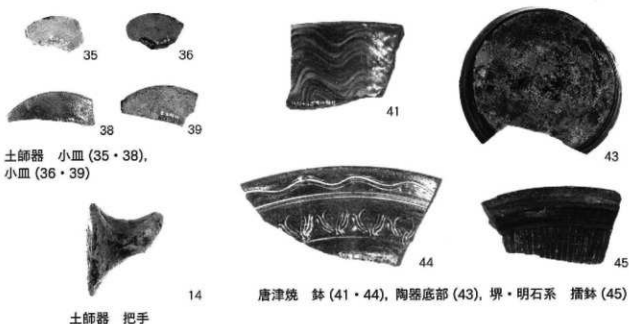
丹波焼 德利(窯印)

唐津焼 皿

唐津焼 灰釉鉢



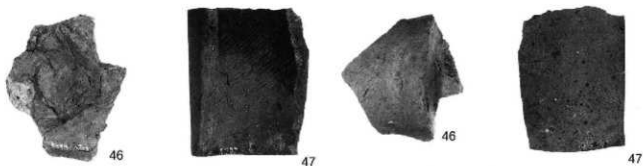
肥前染付磁器 碗 (18), 肥前染付磁器 碗 (19 ~ 23・25), 肥前染付磁器 筒形碗 (26), 染付 碗 (27), 肥前染付磁器 皿 (29), 肥前染付磁器 皿 (28・30 ~ 32), 肥前磁器 青磁仏花瓶 (33)



土師器 小皿 (35・38), 小皿 (36・39)

土師器 把手

唐津焼 鉢 (41・44), 陶器底部 (43), 堺・明石系 播鉢 (45)



丸瓦 (凸面) (46・47)

丸瓦 (凹面) (46・47)



発掘前の調査地現況（南東から）



発掘作業風景（西から）



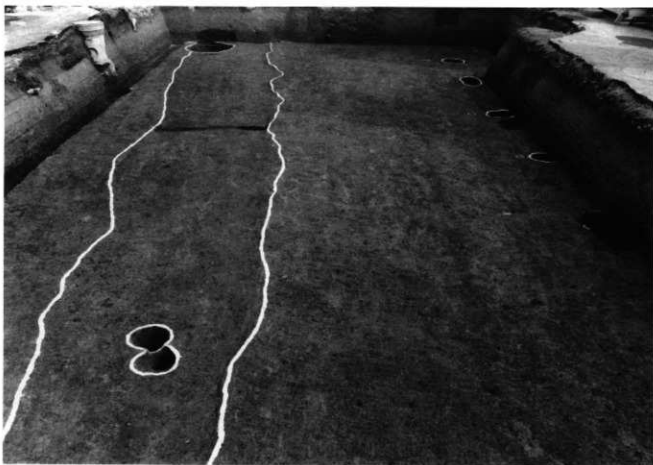
西区Ⅰ・Ⅱ区第1調査面犁溝耕作痕検出状況（東から）



西区Ⅱ区第1調査面犁溝耕作痕完掘状態（北西から）



西区Ⅰ・Ⅱ区第2調査面遺構掘削状況（東から）



西区Ⅰ・Ⅱ区第2調査面遺構掘削状況（西から）



東区II区第2調査面遺構掘削状況（西から）



東区 SA01 東半完掘状態（西から）



西区Ⅰ・Ⅱ区第3調査面遺構掘削状況（東から）



西区Ⅱ区第3調査面 SK06 上面検出状態（南西から）



西区Ⅰ区第3調査面落ち込み掘削状況（東から）



西区Ⅰ区第3調査面落ち込み土層断面（南から）



西区Ⅱ区第3調査面 SK06 完掘状態（南から）



西区Ⅱ区第3調査面 SK06 完掘状態（西から）



東区Ⅱ区第3調査面遺構掘削状況（西から）



東区Ⅰ・Ⅱ区第3調査面遺構掘削状況（東から）



西区Ⅰ・Ⅱ区第4・5調査面遺構掘削状況（東から）



西区Ⅰ・Ⅱ区第4・5調査面遺構掘削状況（南東から）



西区II区第5調査面 SX01 遺物出土状態（南から）



西区II区第5調査面 SX01 遺物出土状態（西から）



SX01 土器出土状態【部分】（南から）



SX01 土器出土状態【部分】（南から）



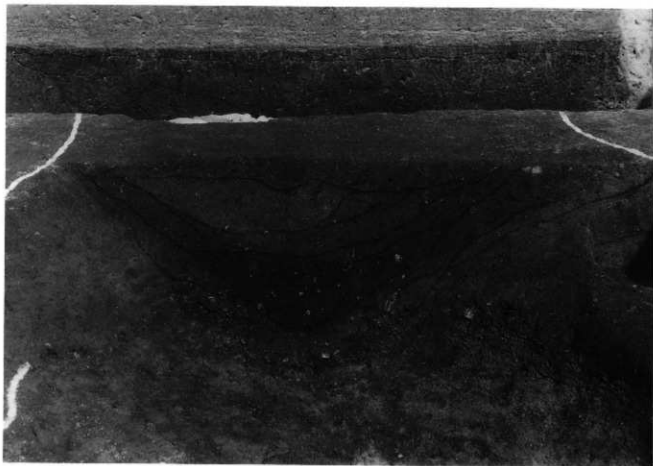
東区Ⅰ・Ⅱ区第5調査面遺構掘削状況(西から)



東区Ⅰ・Ⅱ区第5調査面遺構掘削状況(南東から)



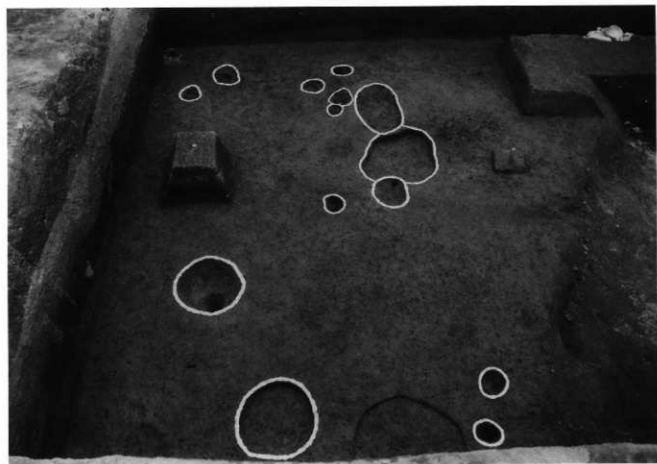
東区Ⅱ区第5調査面 SD07 完掘状態（南西から）



東区Ⅱ区第5調査面 SD07 堆積土層断面（南から）



東区Ⅰ・Ⅱ区第6調査面遺構掘削状況（西から）



東区Ⅰ区西半第6調査面 SP49・50 他遺構完掘状態（南から）



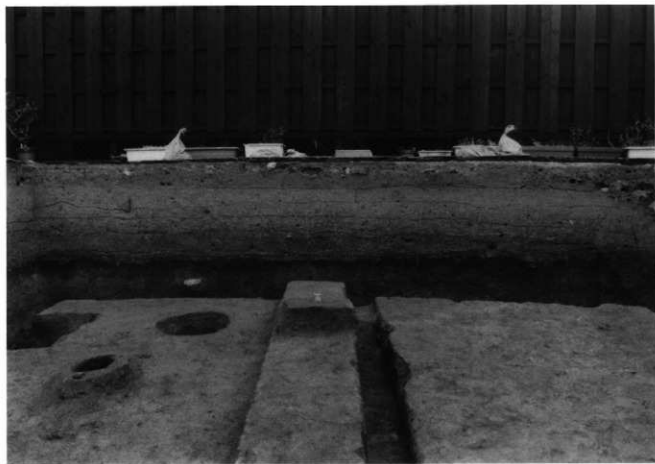
西区Ⅰ・Ⅱ区8層上面遺構掘削状況（東から）



西区Ⅰ・Ⅱ区8層上面遺構掘削状況（西から）



調査区南壁土層断面（北西から）



調査区西壁土層断面（東から）



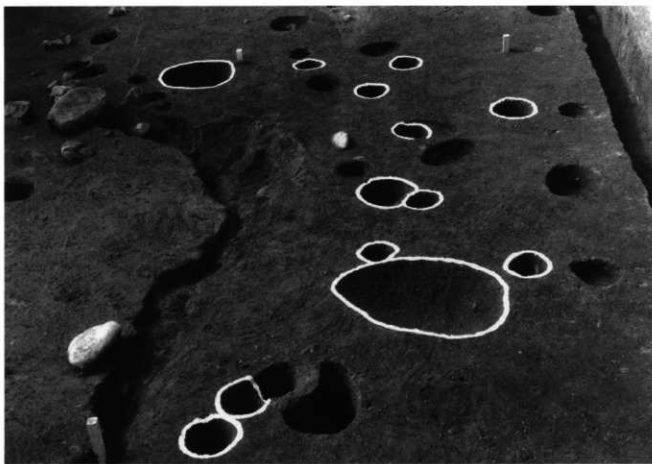
西区Ⅰ・Ⅱ区北壁土層断面（南西から）



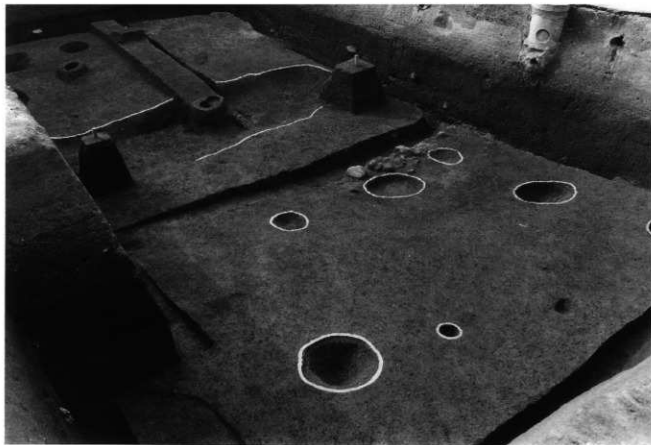
西区Ⅱ区東壁土層断面（西から）



西区Ⅰ・Ⅱ区第4調査面遺構掘削状況（東から）



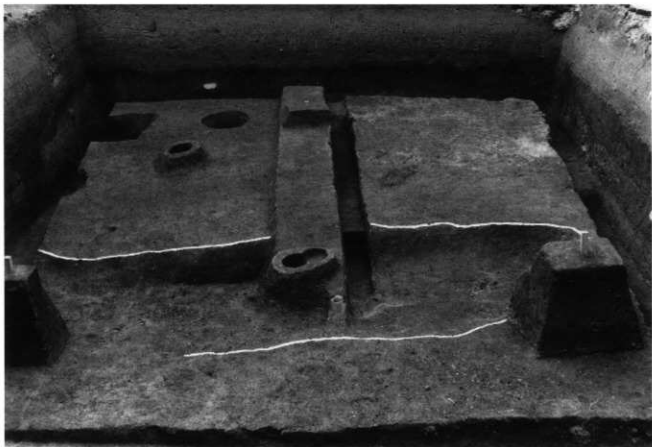
西区Ⅱ区第4調査面遺構掘削状況（東から）



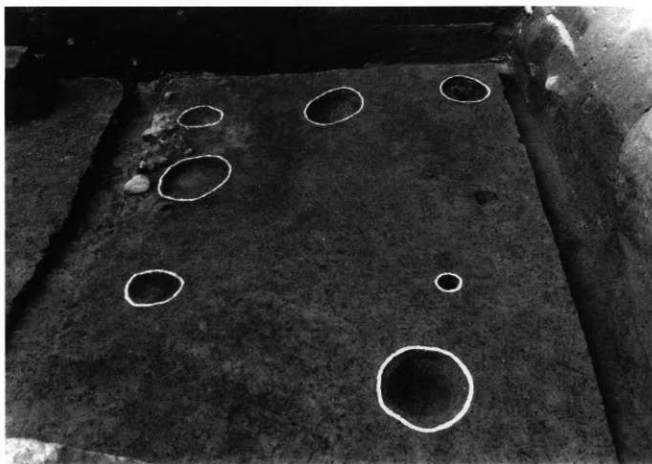
西区Ⅰ・Ⅱ区第6調査面遺構掘削状況（南東から）



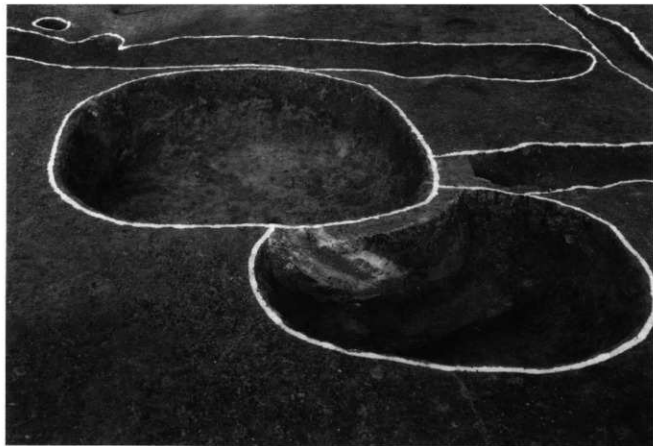
西区Ⅱ区第6調査面遺構掘削状況（西から）



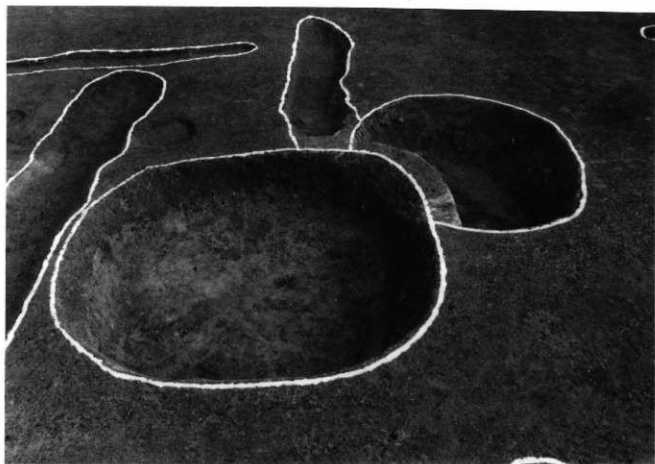
西区第6調査面 SD03 完掘状態（東から）



西区第6調査面 SP38～40 完掘状態（南から）



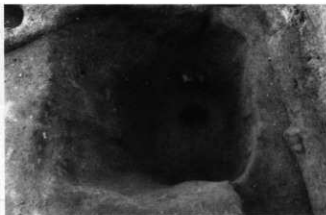
東区第3調査面 SK10・11 完掘状態（西から）



東区第3調査面 SK10・11 完掘状態（北から）



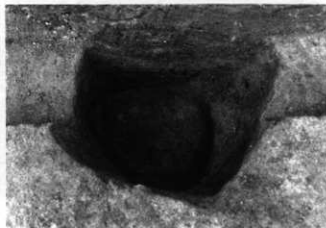
西Ⅰ区第4調査面 SK04 堆積土層断面(西から)



西Ⅰ区第4調査面 SK04 完掘状態(西から)



東Ⅰ区第3調査面 SK07 東半(東から)



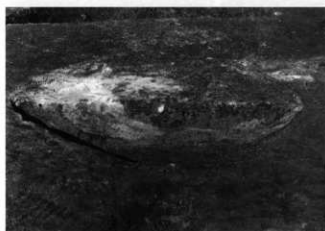
西Ⅰ区第4調査面 SK08 完掘状態(北から)



東Ⅱ区第2調査面 SK09 完掘状態(北西から)



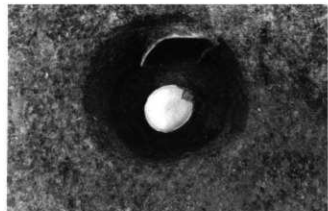
東Ⅰ区第3調査面 SK10 堆積土層断面(北東から)



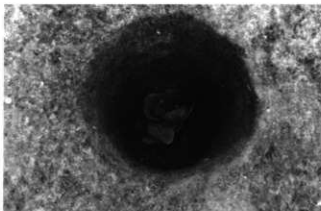
東Ⅰ区第3調査面 SK11 堆積土層断面(南西から)



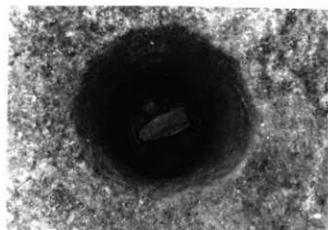
Ⅰ区第3調査面 SK 参考 堆積土層断面(南から)



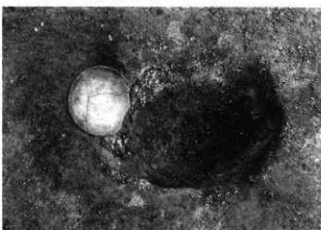
西Ⅰ区第3調査面 SP03 上層土器出土状態（南から）



西Ⅰ区第3調査面 SP03 中層土器出土状態（南から）



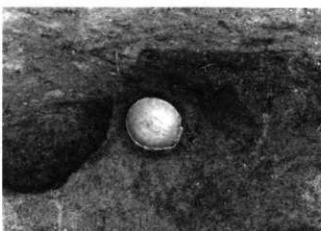
西Ⅰ区第3調査面 SP03 下層土器出土状態（南から）



西Ⅰ区第3調査面 SP22 周辺土器出土状態（西から）



西Ⅱ区第3調査面 SK06 堆積土層断面（北東から）



Ⅰ区東壁沿いサブトレレンチ内土器出土状態（西から）



Ⅰ区第11層土器出土状態（西から）



Ⅰ区南壁沿いサブトレレンチ内土器出土状態（北から）



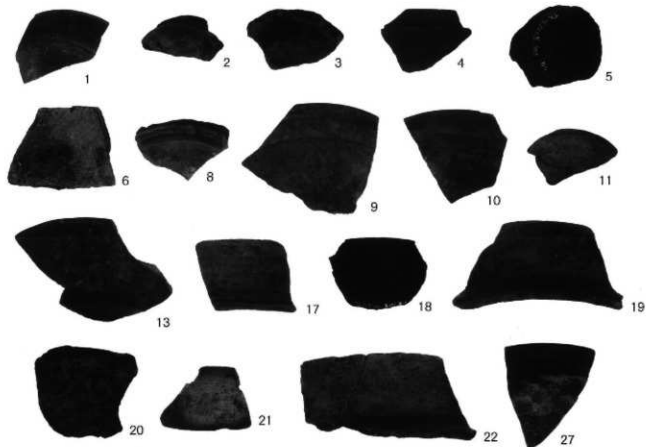
小型丸底壺など土器出土状態
（東から）



高杯出土状態
（北から）



調査区南壁際須恵器甕出土状態
（北から）

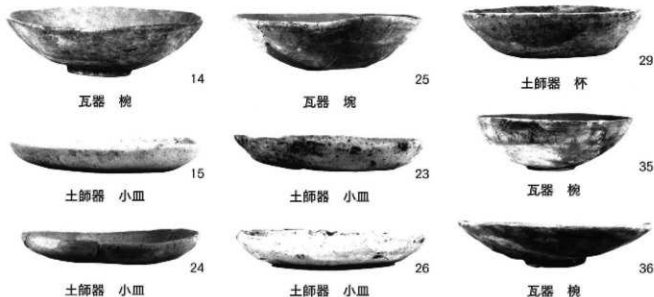


須惠器 無蓋高杯(1), 黑色土器 椀(2・18), 回轆台土師器 椀(3), 須惠器 杯身(4・8), 弥生土器(5), 須惠器 甕(6), 瓦器 椀(9・10・13・27), 土師器 小皿(11), 甕(17・19・22), 土師器 杯(20・21)



平瓦〔凸面〕(7・16・62)

平瓦〔凹面〕(7・16・62)



瓦器 椀

瓦器 椀

土師器 杯

土師器 小皿

土師器 小皿

瓦器 椀

土師器 小皿

土師器 小皿

瓦器 椀



43

土師器 中皿



48

土師器 中皿



49

土師器 中皿



51

土師器 中皿



55

土師器 中皿



57

土師器 中皿



28



30



31



32



33



37



38



40



41



42

44



44



45



46



47



52



53

54



56



58



59



60



61



63

64



65



66



67



68



69

70

弥生土器 高杯(28), 瓦器 椀(30), 土師器 皿(31~33), 瓦器 椀(37・38), 土師器 中皿(40~42・44~47・52~54), 土師器 小皿(56・58~61), 須恵器 椀(63), 棒状有孔土甕(64), 鉢(65), 甕(66), 高杯(67), 土師器 椀(68), 黑色土器 碗(69), 緑釉陶器 皿(70)



34

土師器 二重口鉢



72

土師器 二重口鉢



71

土師器 甕



73

土師器 二重口縁壺



77

土師器 甕



78

土師器 甕



94

土師器 鉢



87

土師器 高杯



88

土師器 高杯



89

土師器 高杯



90

土師器 高杯



91

土師器 高杯



92

土師器 高杯



93

土師器 高杯



74



75



76



79



80



81



82



83



84



85



86



97

土師器 二重口縁壺 (74 ~ 76), 土師器 甕 (79 ~ 84), 土師器 高杯 (85 ~ 86), 土師器 杯 (97)



95

土師器 小型丸底壺



96

土師器 小型丸底壺



98

土師器 製塩土器(変形)



104

須恵器 杯蓋



111

須恵器 杯身



112

須恵器 杯身



113・114

須恵器 杯身



115

須恵器 杯身



116

須恵器 杯身



117

須恵器 杯身



119

須恵器 器台



118

須恵器 壺



120

須恵器 壺



113・114

須恵器 杯身(ヘラ記号接写)



100



101



102



105



107



108



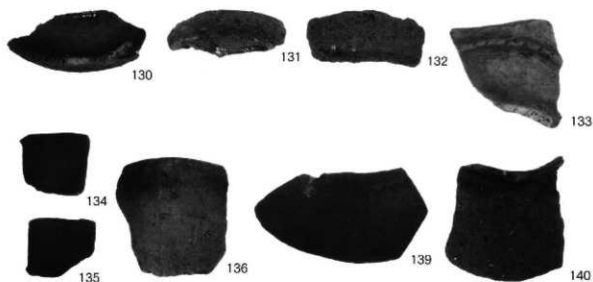
109

須恵器 杯蓋(100～102・105), 須恵器 杯身(107～109)



韓式系土器 把手(121), 土師器 把手(122~124), フイゴ羽口(129)

棒状有孔土錘(125~128)



土師器 壺または器台(130), 土師器 二重口縁壺(131・133~135), 土師器 壺?高杯?(132)
土師器 壺(136・139・140)



137

土師器 二重口縁壺



138

土師器 壺



141

土師器 甕



151

土師器 甕



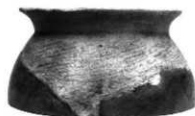
144

土師器 甕



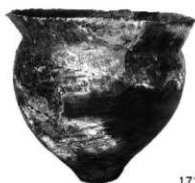
146

土師器 甕



152

土師器 甕



171

土師器 鉢



173

土師器 底部



211

土師器 鉢



174

土師器 底部



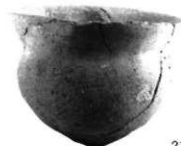
184

土師器 底部



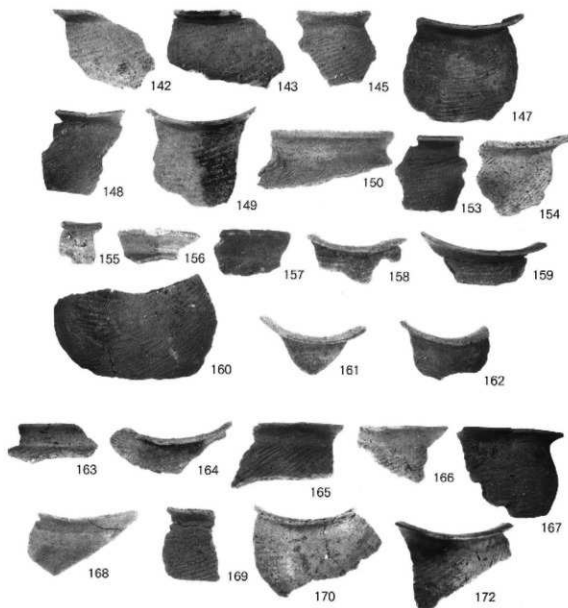
188

土師器 底部

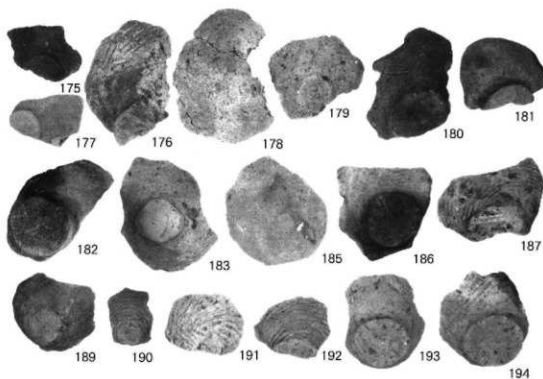


212

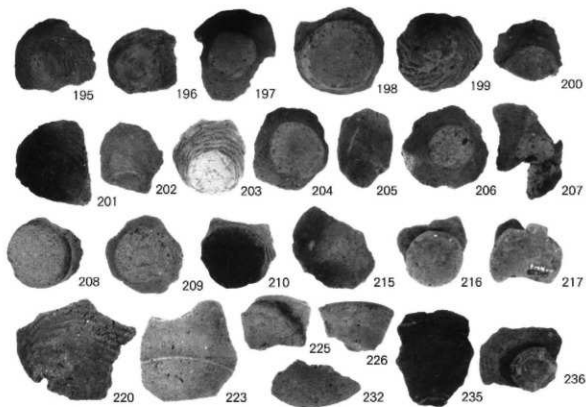
土師器 鉢



土師器 甕・鉢 (142・143・145・147～150・153～170・172)



土師器 底部 (175～183・185～187・189～194)



底部 (195 ~ 210), 鉢 (215 ~ 217), 有孔鉢 (220), 杯 (223), 器台 (225・226), 高杯 or 器台 (232), 器種不明 鉢 (235), 器種不明 製壺土器 (236)



土師器 鉢



土師器 鉢



土師器 鉢



土師器 有孔鉢



土師器 有孔鉢



有孔鉢



土師器 高杯



高杯



高杯



224



230



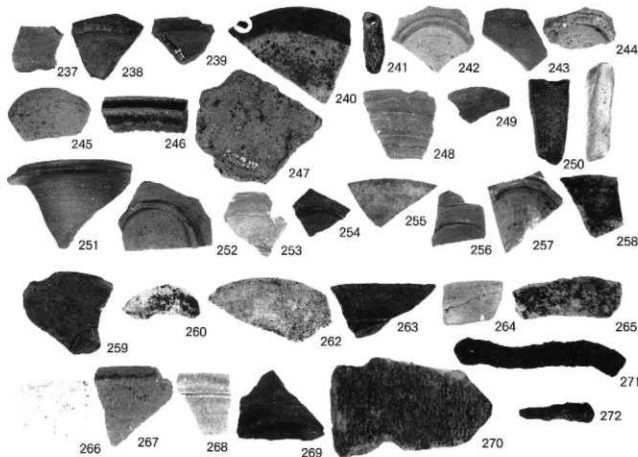
231



233



234



須惠器 杯蓋(237), 須惠器 碗(238・252), 須惠器 杯身(239・248), 瓦器 碗(240・254), 棒狀有孔土錐(241), 灰釉陶器 碗(242) 綠釉陶器 碗(243・244・253), 土師器 小皿(245), 須惠器 鉢(246・266), 平瓦(247・270), 瓦器 皿(249・255・258・259), 瓦器 三足釜(250), 須惠器 長頸壺(251), 綠釉陶器(256・257), 土師器 皿(260・262・264・265), 土師器 土鍋(263), 須惠器 捏鉢(267), 白磁碗(268), 備前焼 壺(269), 鉄製品(271), 鉄製品 鉄釘(272)



須惠器 杯



土師器 小皿



土師器 小皿



須惠器 高杯



土師器 小皿



土師器 小皿



土師器 小皿



土師器 小皿



土師器 直口壺



土師器 小皿



土師器 小皿



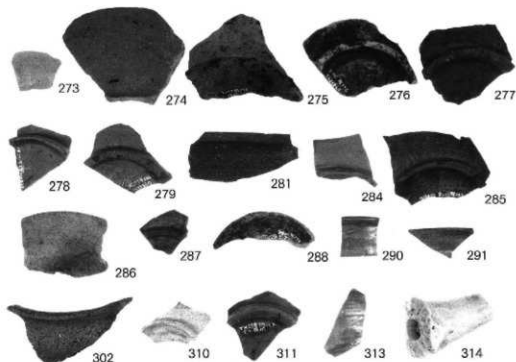
須惠器 杯蓋



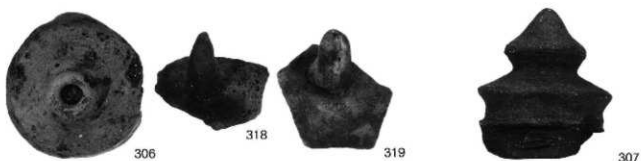
須惠器 皿



須惠器 長頸壺

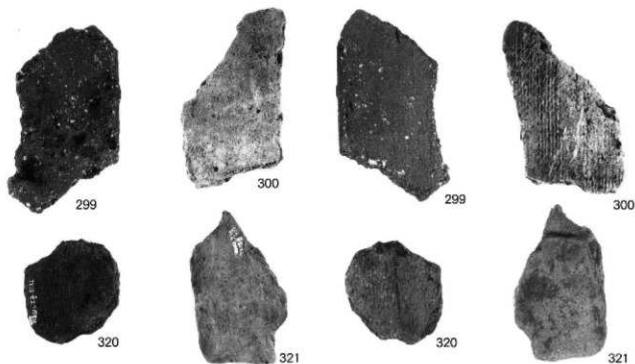


緑釉陶器 皿(273), 回転台土師器 椀(274), 須恵器 壺(275・277), 須恵器 椀(276・279), 緑釉陶器 碗(278・290・291・310・311), 須恵器 高杯(281・284・285), 土師器 杯(286), 椀 高台(287), 黒色土器 椀(288), 土師器 壺(302), 緑釉陶器 碗 or 皿(313), 緑釉陶器 注口(314)



弥生土器 高杯(306), 把手(318・319)

須恵器 2段構えの宝珠つまみ



平瓦〔凹面〕(299・300・320), 丸瓦〔凹面〕(321)

平瓦〔凸面〕(299・300・320), 丸瓦〔凸面〕(321)



308

須恵器 台付長頸壺



309

須恵器 長頸壺



317

白磁 碗



312

土師器 杯



315

土師器 杯



316

土師器 碗



325

須恵器 高杯

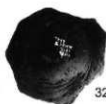


327

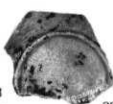
須恵器 甕



322



323



324



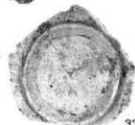
326



328



329



330



331



335



337



341



342



347



348



349



353



358



359



360



361

弥生土器 甕 (322・323), 黒色土器 碗 (324・330), 土師器 杯 (326・359), 須恵器 壺 (328), 土師器 皿 (329), 土師器 甕 (331・358), 土師器 壺 (335), 加飾器台 (337), 底部 (341・342), 二重口縁壺 (347), 「く」の字状口縁壺 (348), 甕 (349), 緑釉陶器 碗 (353), 黒色土器 (360), 土師器 大皿 (361)



333

土師器 高杯



334

土師器 高杯



336

土師器 加飾口縁壺



332

須恵器 杯身



338

土師器 鉢



339

土師器 高杯



340

土師器 壺



343

土師器 底部



344

土師器 底部



345

土師器 底部



346

土師器 高杯



350

土師器 甕



354

土師器 甕



355

土師器 高杯



356

土師器 台付鉢



351

土師器 甕



352

土師器 壺



357

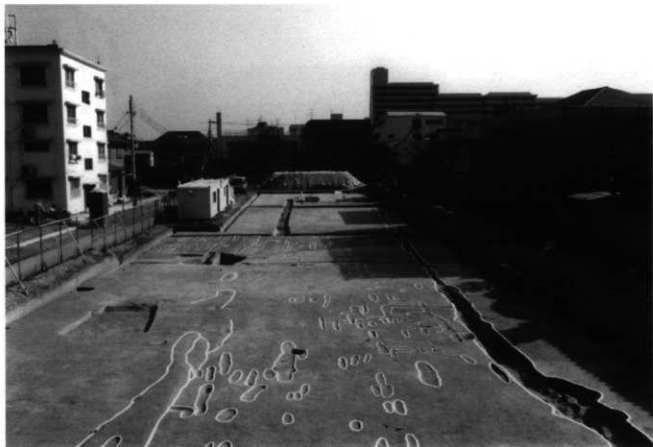
土師器 器台



発掘調査前の遺跡の現状（南から）



発掘調査前の遺跡の現状（北から）



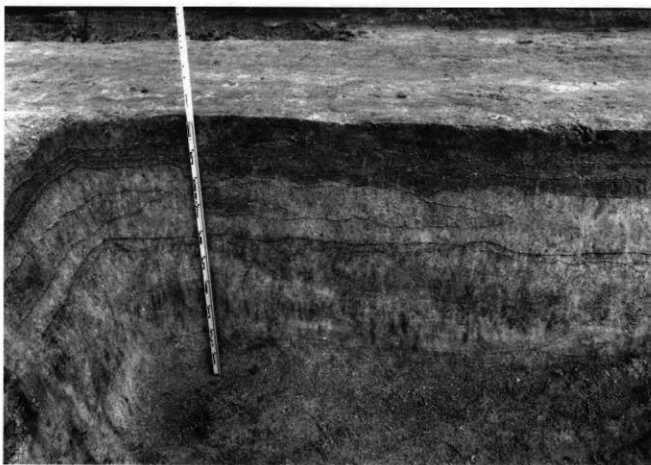
第2面中世水田面検出状況（北から）



第2面中世水田面検出状況（南から）



テストトレンチ掘削状況（南から）



テストトレンチ基本堆積土層（西から）



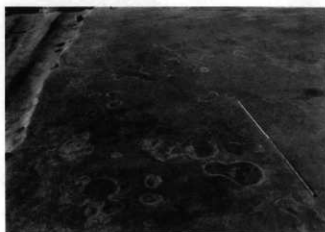
Ⅰ区耕土・床土除去状況（北から）



Ⅰ区耕土・床土除去状況（南から）



Ⅰ区第2面畦状耕作痕（南東から）



Ⅰ区第2面荷重痕（主要部）



Ⅰ区第2面中世水田面耕作痕（北から）



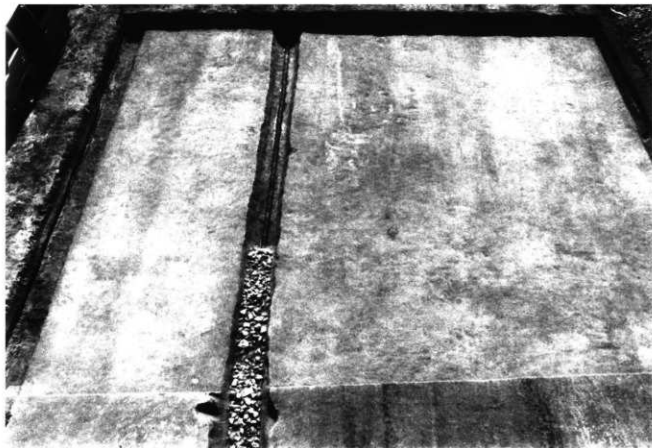
Ⅰ区第2面中世水田面耕作痕（南から）



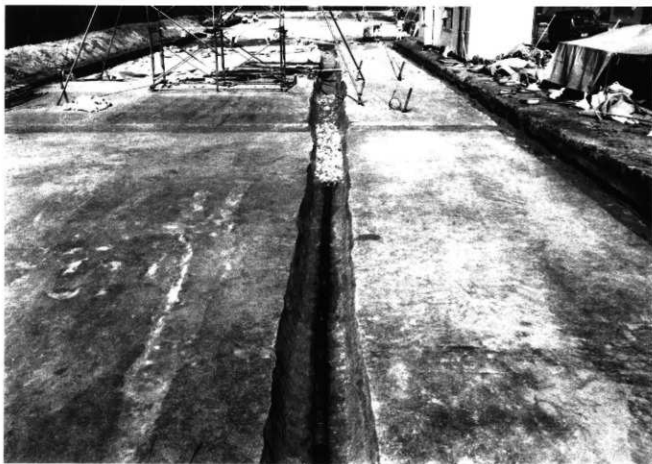
Ⅰ区第2面中世水田面耕作痕（細部）



Ⅰ区南半中世水田面（南から）



Ⅱ区2号暗渠配水管と配石埋設状況（北から）



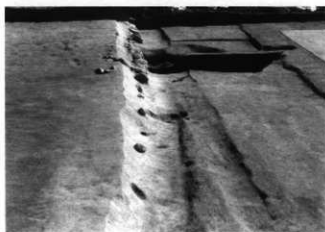
Ⅱ区2号暗渠配水管と配石埋設状況（南から）



I 区 1・2号溝検出状態（東から）



I・II区第2面中世水田面（南から）



I 区 1・2号溝検出状態（西から）



II区4号溝〔暗渠〕検出状態（南から）



I 区 1号溝堆積土層断面（東から）



II区3号溝掘削状態（南から）



II区3号溝堆積土層断面（南から）



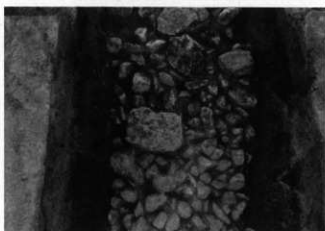
II区暗渠北半上面検出状態（東から）



II区暗渠北半完掘状態（東から）



II区暗渠割石敷布部分と瓦質土管（北から）



II区暗渠上部割石配石状態（南から）



II区暗渠下部配石状態（北から）



II区暗渠下部配石状態（東から）



II区南壁暗渠埋設状況土層断面（北から）



II区暗渠瓦質土管検出状態（東から）



II区河川跡発掘状況(南東から)



II区河川跡出土品発掘風景(南から)



II区1号河道掘削状況（西から）



II区2号河道掘削状況（南西から）



Ⅱ区河川跡中央土手西側壁土層断面（西から）



Ⅱ区河川跡発掘調査風景（南東から）



II区3号河道遺物出土状況（北東から）



II区3号河道遺物出土状況（北東から）



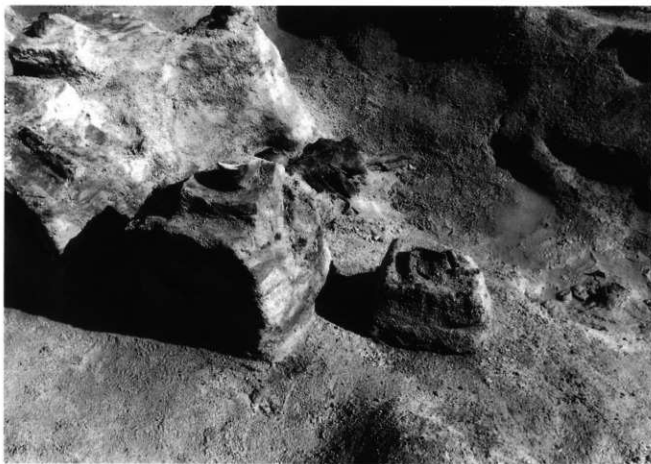
Ⅱ区河道4遺物出土状態(南から)



Ⅱ区河道3・4西半遺物出土状態(南から)



Ⅱ区3号河道遺物出土状況（東から）



Ⅱ区3号河道遺物出土状況（枢要部）



II区3号河道堰状遺構（北から）



II区3号河道堰状遺構（南東から）



Ⅱ区3号河道遺物出土状態 [木器 27 など] (南東から)



Ⅱ区3号河道遺物出土状態 [木器 27 など] (東から)



Ⅱ区3号河道木器 12 出土状態（南から）



Ⅱ区3号河道木器 11 出土状態（南から）



Ⅱ区3号河道土器8・木器出土状態（北から）



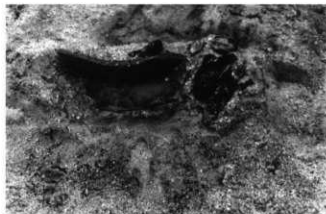
Ⅱ区3号河道木器15出土状態（北から）



Ⅱ区河川跡完掘状況全景（東から）



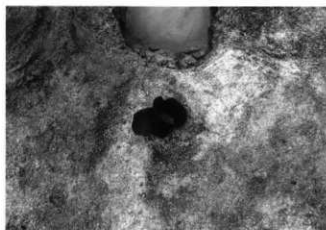
Ⅱ区河川跡西壁土層断面（東から）



Ⅱ区河道2土器出土状態（概要部）



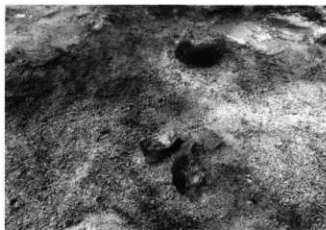
Ⅱ区河道3土器36・37出土状態（北から）



Ⅱ区河道3土器4出土状態（北から）



Ⅱ区河道3土器22出土状態（北から）



Ⅱ区河道3土器33出土状態（北から）



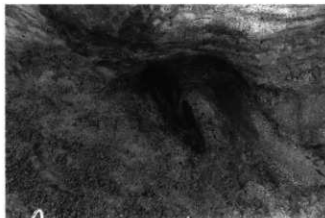
Ⅱ区河道3土器66出土状態（南東から）



Ⅱ区河道4土器65出土状態（南西から）



Ⅱ区河道4土器67他出土状態（南西から）



II区河道3堰状遺構(西壁部分、東から)



II区河道3堰状遺構(北東から)



II区河道3木器2出土状態



II区河道3木器3出土状態(西から)



II区河道3木器5出土状態(東から)



II区河道3木器6出土状態



II区河道3木器10出土状態(南から)



II区河道3自然遺物出土状態(枢要部)



1

甕



3

広口壺



5

直口壺



2

広口壺



4

直口壺



7

広口壺



8

二重口縁壺



9

二重口縁壺



10

二重口縁壺



6

広口壺



11

細頸壺



12

小型壺



13

小型壺



14

脚台



16

鉢



22

壺



17

壺



18

鉢



19

壺



20

壺



21

壺



24

壺



25

壺



27

壺



26

壺



33

壺



34

壺



35

壺



38

壺



39

底部



40

底部



36

甕



37

甕



42

底部



44

底部



45

底部



46

底部



41

底部



48

鉢



50

鉢



57

高杯



51

直口鉢



52

直口鉢



53

片口直口鉢



54

鉢



鉢

56



高杯

58



高杯

59



高杯

60



器台

61



広口壺

62



広口壺

63



小型壺

64



鉢

65



甕

66



鉢

67



高杯

69



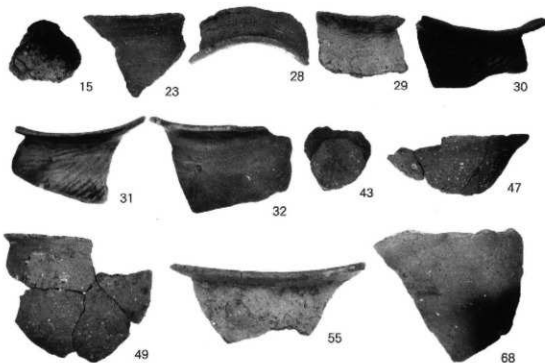
高杯（脚柱部から脚部）

70

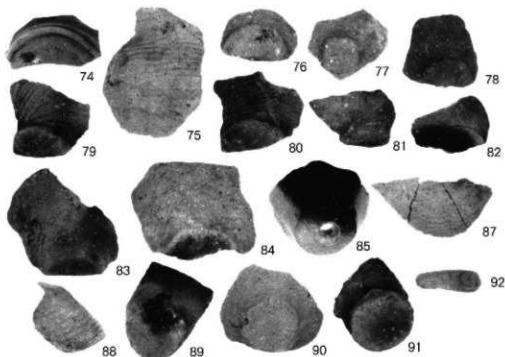


高杯（脚柱部から脚部）

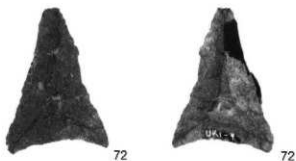
71



土師器 甕 (15), 小型甕 (23), 甕 (28・29・43), 中型甕 (30～32), 小型鉢 (47), 中型鉢 (49), 大型鉢 (55), 鉢 (68)



須恵器 杯身 (74), 小型甕か鉢 (75), 壺 (77・78), 壺 (76・79～82・87・88), 鉢 (83～85), 甕 or 鉢 (89～91), 器台か壺 (92)

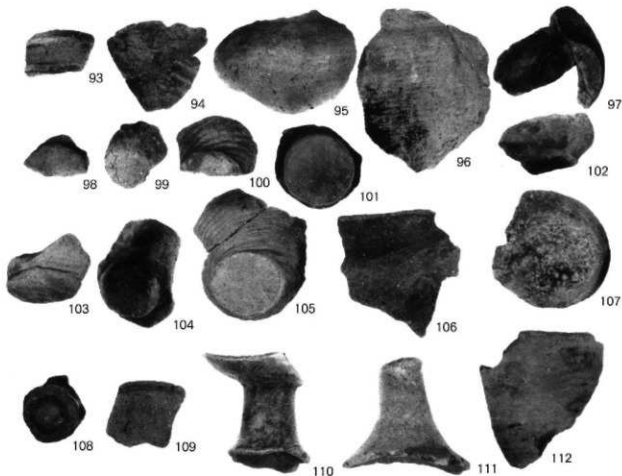


打製石鏃〔A面〕

打製石鏃〔B面〕



二重口緑壺 or 広口壺



壺 (93～95), 甕 (96・106), 壺・甕・鉢などの底部 (97～105・107・108), 高杯 (109～111), 大型鉢 (112)



113

細頸壺 (口頸部)



114

広口壺



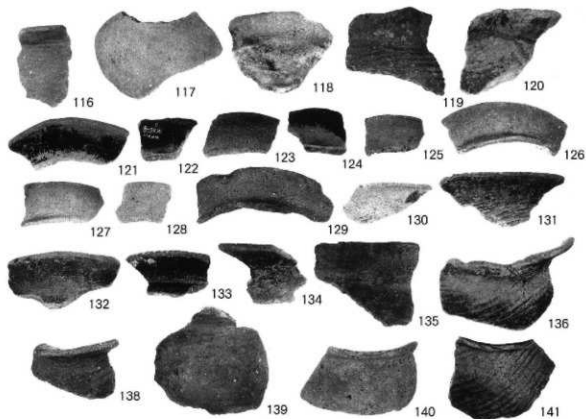
115

甕

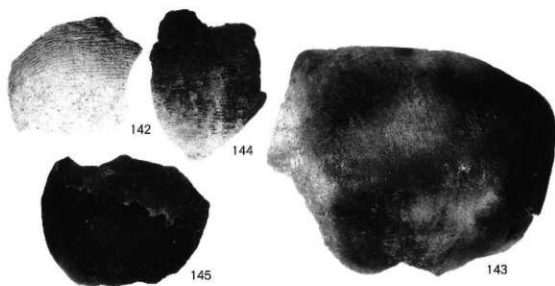


137

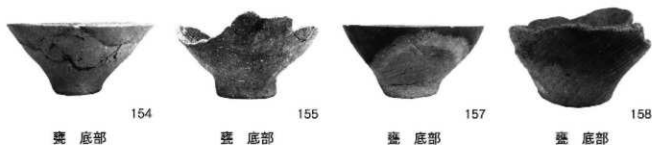
甕

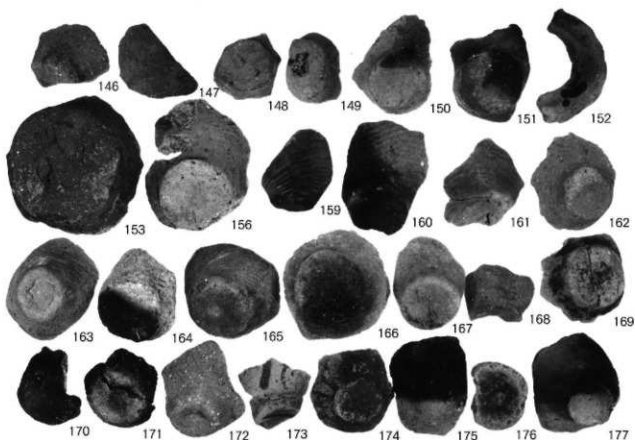


甕 口縁部および体部 (116・119～136・138～141), 細頸壺 肩部 (117), 複合口縁壺 (118)

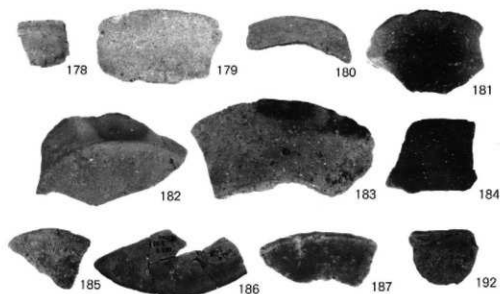


甕 体部 (142～145)

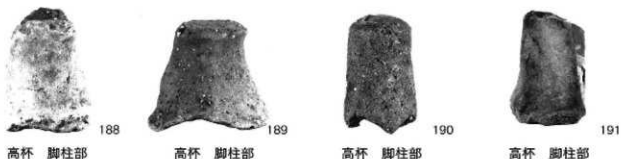




壺・鉢・甕 底部 (146 ~ 153・156・159 ~ 177)



鉢 口縁部 (178・179), 高杯 杯部 (180 ~ 184), 裾部 (186), 器台 (185・187), 器種不明 (192)

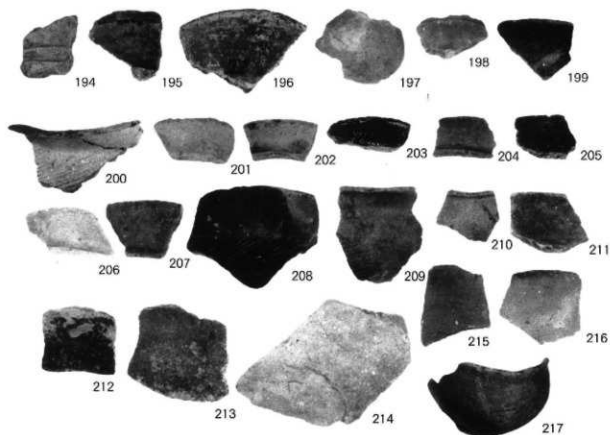


高杯 脚柱部

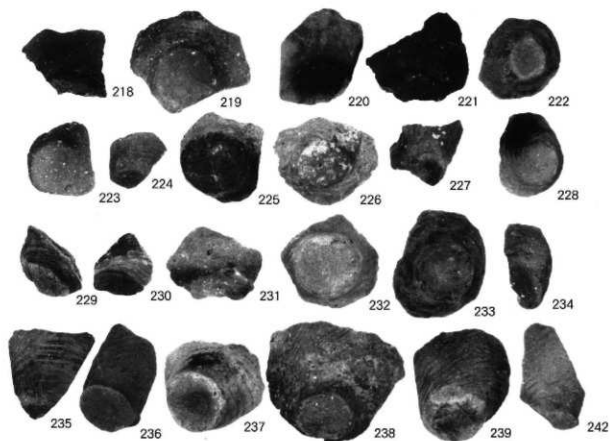
高杯 脚柱部

高杯 脚柱部

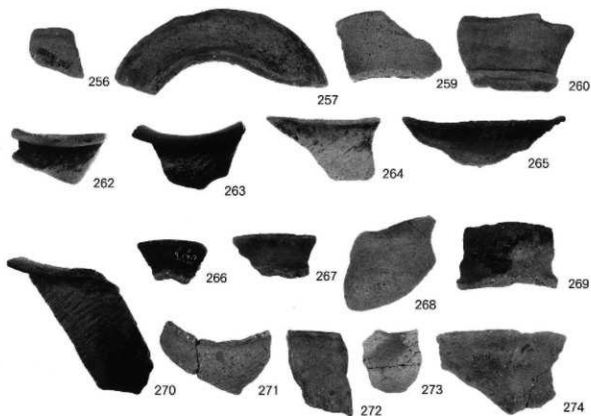
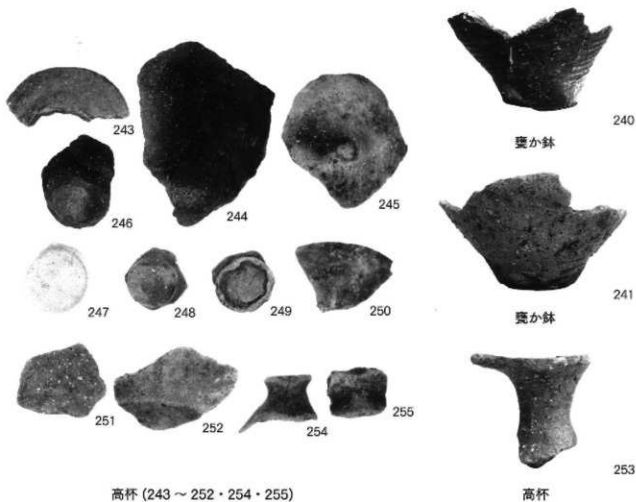
高杯 脚柱部

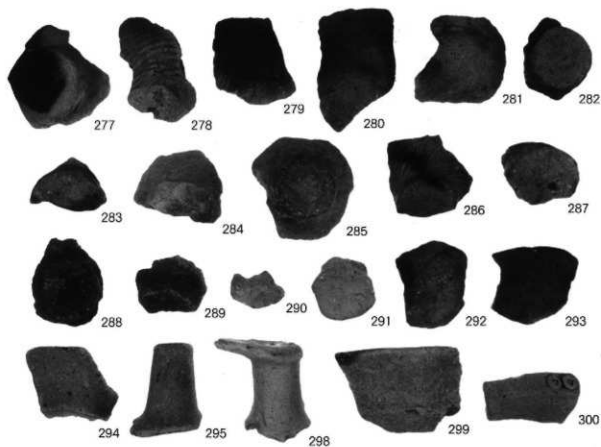


広口壺か直口壺（194），広口壺（195・196），壺（197），甕（198～211），鉢（212～217）



甕・鉢・体・底部（218～239・242）





壺(277), 甕か鉢(278~292), 高杯(293~295・298~299), 器台(300)



広口壺



高杯



高杯



甕



高杯 口縁部



土師皿



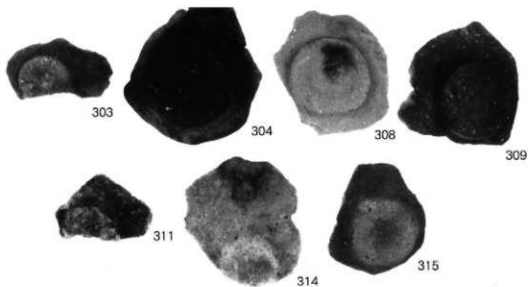
壺



甕か鉢



壺か甕か鉢 底部



鉢 底部 (303), 壺 底部 (304), 甕・甕・鉢 底部 (308・309・311・314・315)



310

壺 or 甕 or 鉢 底部



312

壺 or 甕 or 鉢 底部



313

壺 or 甕 or 鉢 底部



73



193



302



306

有溝土錘 (73), 管状土錘 (193・302・306)



幣外

銅錢 (表面)



幣外

銅錢 (裏面)



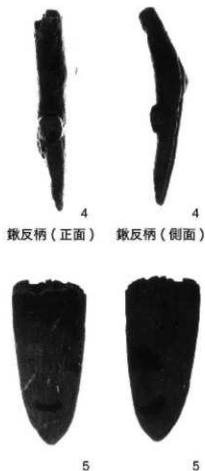
甕 体部外面調整痕



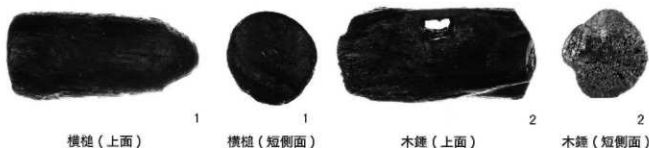
甕 頸部外面調整痕



不明木製品（3）、柄（6）、鍬身（7）、杭（11～13）、板材（14・15）



鍬反柄（正面） 鍬反柄（側面）
鍬身（表面） 鍬身（裏面）

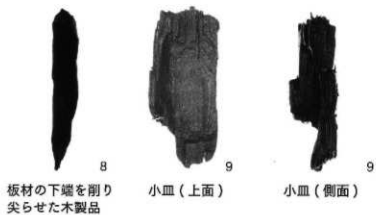


横槌（上面）

横槌（短側面）

木錘（上面）

木錘（短側面）



小皿（上面）

小皿（側面）

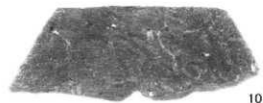
板材の下端を削り
尖らせた木製品



四方転びの箱 側板（表面）



不明木製品（綱台目盛板接写） 上（上から）下（横から）



四方転びの箱 側板（裏面）



調査地近景
（北東から）



発掘区重機掘削状況
（南西から）



調査地全景【発掘完了後】
（西から）

調査区南壁の基本層位
（北から）



調査区東壁の基本層位
（西から）



暗渠検出状態
（北から）





第1区透視面検出状態
（南から）



第1区遺構完掘状態全景
（南から）



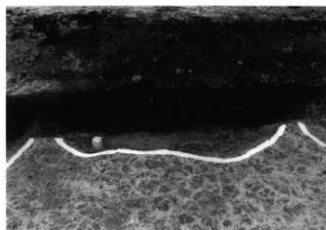
第1区遺構完掘状態全景
（西から）



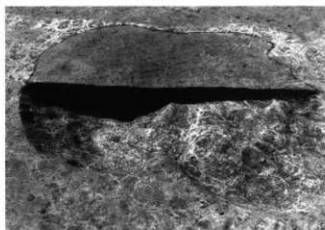
SD 1~3 検出状況(東から)



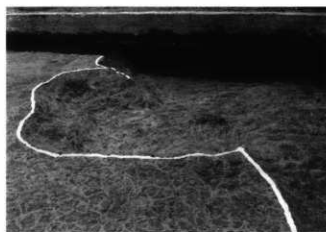
SD 1~3 堆積土層断面(南東から)



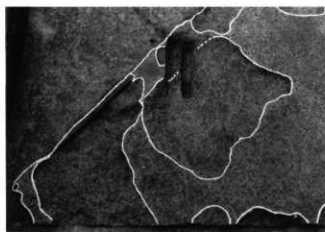
SK 4 堆積土層断面(西から)



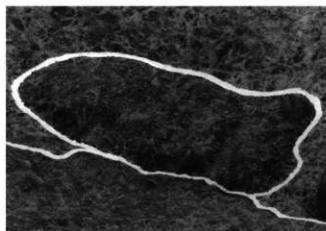
SK10 堆積土層断面(北東から)



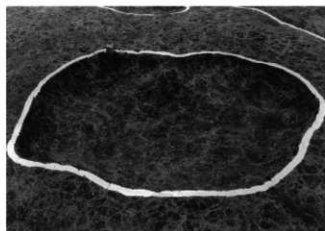
SK 1~3 完掘状態(南から)



SK 6・7 完掘状態(東から)



SK 8 完掘状態(北から)



SK 9 完掘状態(北から)



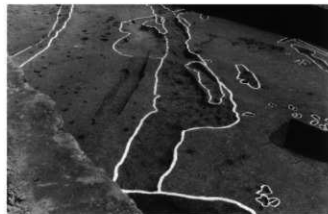
第2・3区完掘状態全景
（東から）



第2・3区完掘状態全景
（南から）



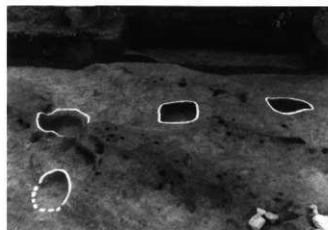
第2・3区完掘状態全景
（南東から）



SD 5 完掘状態（北東から）



SD 5 堆積土層断面（北から）



SK13 ~ 16 完掘状態（北から）



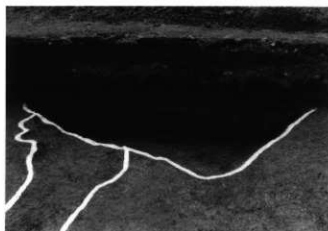
SK14 ~ 16 完掘状態（東から）



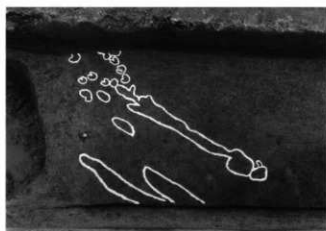
SK17 完掘状態（南東から）



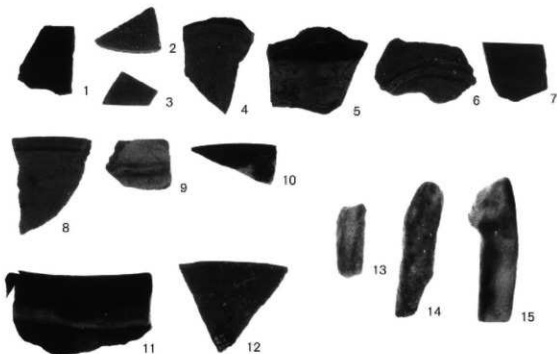
SK17 堆積土層（東から）



SK18 堆積土層断面（南から）



第2区犁跡と牛の足跡（南から）



須恵器 杯蓋(1・2), 須恵器 杯身(3・4・6), 須恵器 壺(5), 須恵器 鉢(7), 須恵器 捏鉢(片口鉢)(8), 土師質土器 羽釜(9), 瓦質土器 鍋(10), 瓦質土器 羽釜(11), 丹波焼 攪鉢(12), 瓦質土器 三足釜(13~15)



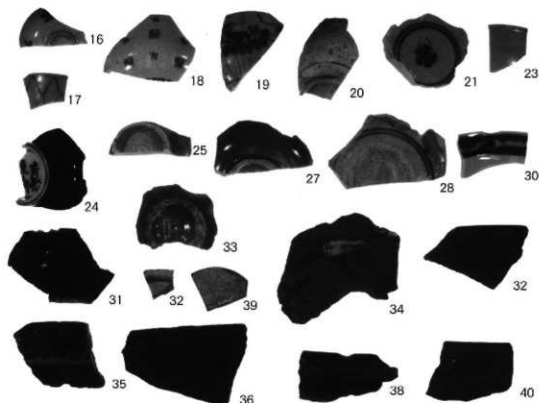
肥前染付磁器 小皿東碗



肥前磁器 白磁碗



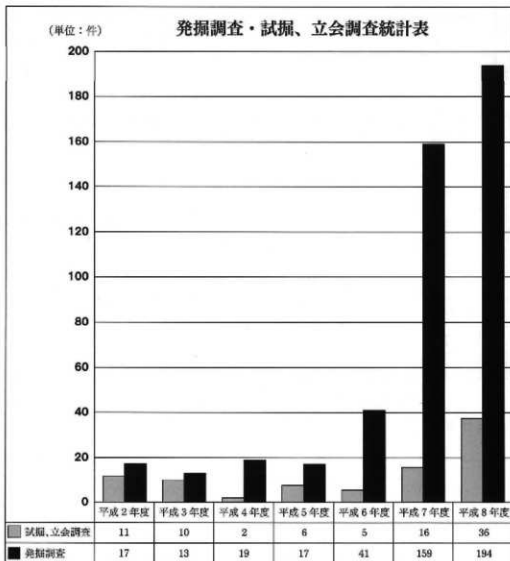
肥前染付磁器 鉢



肥前染付磁器 碗(16~20・21・24), 肥前磁器 端反り碗(23), 肥前磁器 碗(25), 肥前染付磁器 皿(27・28), 肥前染付磁器 鉢(30), 瀬戸・美濃焼 鉄釉天目茶碗(31), 施釉陶器 皿(32), 唐津焼 碗(33), 唐津焼 大鉢(34), 備前焼 攪鉢(35), 堺・明石焼系 攪鉢(36), 丹波焼 甕(38), 土師器 皿(39), 土師器 焙烙(40)

報 告 書 抄 録

ふ り が な	はんしん・あわじだいしんさいふっきゅう・ふっこうじぎょうにともなうまいぞうぶんかざいはつくつちようさがいようほうこうしよ	
書 名	阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書	
副 書 名	平成7年度 国庫補助事業	
巻 次		
シ リ ー ズ 名	芦屋市文化財調査報告	
シ リ ー ズ 番 号	第 28 集	
編 著 者 名	森岡秀人・木南アツ子	
編 集 機 関	芦屋市教育委員会 社会教育部文化財課	
所 在 地	〒 659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号	TEL 0797-31-9066
発 行 年 月 日	西暦 1997 年 (平成 9 年) 3 月 31 日	



所収遺跡名		あしやはいじいせき 芦屋庵寺遺跡 (W地点)		発掘・整理担当者		長屋 幸二・佐藤 康二 森岡 秀人・木南アツ子					
所在地		ひょうごけんあしやしにしやまちょう 兵庫県芦屋市西山町 120 番地・121 番地									
コード		北 緯		東 経		調査期間		調査面積		調査原因	
市町村		遺跡番号		34° 73' 57"		135° 29' 82"		19951204~ 19960226		680 m ² 共同住宅 建設工事	
28206		070033									
所収遺跡名		種 別		時 代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
芦屋庵寺 遺跡		集 落 跡 官 衙 跡 複 合 遺 跡		弥生・古墳時代 奈良・平安時代 中世・近世		竪立柱建物 竪穴住居 土坑・柱穴・溝 石組		弥生土器・土師器 須恵器・須恵質土器 瓦質土器・瓦・土甕 陶磁器		古墳時代の集落域判明。 平安時代前期の竪立柱 建物1棟検出。 芦屋庵寺関連建物跡。	

ふ 所 収 遺 跡 名	あしやはいじいせき 芦屋庵寺遺跡 (第 29 地点)		発掘・整理担当者		長屋 幸二・岡本 泰典 森岡 秀人・木南アツ子	
ふ 所 在 地	ひょうごけんあしやしにしやまちょう 兵庫県芦屋市西山町 117 番地1・2					
コ 一 ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号	34° 73' 58"	135° 29' 80"	19951005～ 19951019	58.8 m ²	共同住宅 建設工事
28206	070033					
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
芦屋庵寺 遺跡	集 落 跡 官 衙 跡 複 合 遺 跡	古墳時代 中世・近世	土坑・柱穴・杭穴 溝	須恵器・須恵質土器 瓦質土器・瓦・土甕	芦屋庵寺跡の寺域東限 を確認。	

所収遺跡名	つきわかいせき 月若遺跡 (第 20 地点)		発掘・整理担当者 森 正・岡本 泰典 森岡 秀人・木南アツ子		
所在地	ひょうごけんあしやしつきわかちょう 兵庫県芦屋市月若町 38 番地 14				
コード	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号	34° 73' 56"	135° 29' 93"	19960219~ 19960305	140 m ² 個人住宅 建設工事
28206	070034				
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構	主な遺物	特記事項
月若遺跡	集 落 跡 複 合 遺 跡	弥生・古墳時代 中世・近世 近代	竪・土坑・柱穴	弥生土器・土師器 須恵器・瓦質土器 土甕・陶磁器	環濠状大溝のコーナ ー部分を確認。電柱遺構 発掘。

所 収 遺 跡 名		つきわかいせき 月若遺跡(第28地点)		発掘・整理担当者 森 正・岡本 泰典 森岡 秀人・木南アツ子		
所 在 地		ひょうごけんあしやしにしあしや 兵庫県芦屋市西芦屋町1番地3・6				
コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号	34° 73' 53"	135° 29' 87"	19960111~ 19960306	190 m ²	集合住宅 建設工事
28206	070034					
所収遺跡名		種 別	時 代	主な遺構	主な遺物	特記事項
月若遺跡	集 落 跡 複 合 遺 跡	弥生・古墳時代 奈良・平安時代 中世・近世	土器溜り 溝・土坑 柱穴・枕穴	弥生土器・土師器 須恵器・須恵質土器 瓦質土器・瓦器 土鏝・陶磁器	大量の古式土師器が 出土。礫濠と落ち込み。 阪神間最古の埴形製塩 土器	

所 収 遺 跡 名		うちできしづく いせき 打出岸造り遺跡(第9地点)		発掘・整理担当者 矢口 裕之・北原 治 森岡 秀人・木南アツ子		
所 在 地		ひょうごけんあしやしおおはらちよう 兵庫県芦屋市大原町 104 番地・105 番地				
コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号			19951002～ 19951208	1,250 m ²	共同住宅 建設工事
28206	070040	34° 73′ 71″	135° 30′ 67″			
所収遺跡名		種 別	時 代	主な遺構	主な遺物	特記事項
打出岸 造り遺跡		水 田 跡 流 路 跡 複 合 遺 跡	弥生・古墳時代 中世・近世 近代	大溝・溝・土坑 水田・堰	弥生土器・土師器 須恵器・瓦器 陶器・磁器	古墳時代前期初頭の 人工的流路と堰。摂津産 庄内河内型甕の初検出。

所収遺跡名	く び いせき 久保遺跡(第15地点)		発掘・整理担当者		和田 秀寿・竹村 忠洋 森岡 秀人・木南アツ子
所在地	ひょうごけんあしやししんのうづかちょう 兵庫県芦屋市親王塚町65番地				
コード	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号				
28206	070043	34° 73' 58"	135° 31' 22"	19960311～ 19960329	280㎡ 集合住宅 建設工事
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久保遺跡	水 田 跡 流 路 跡 複 合 遺 跡	奈良時代 中世 近世～近代	土坑 流路 埴溝	須恵器・土師器 瓦器・磁器・陶器	古代の遺構を初めて 検出。 方位を一定にする 流路・埴溝など。

あとがき ー編集後記にかえてー

悪夢のような阪神・淡路大震災から早2年以上の歳月が経過した。早い時の流れであったことを痛感する。多くの貴重な人家があつと言う間に失われ、とまどう人々の渦、叫び声もやがては、歴史上の一出来事として後世に引き継がれてゆく。奪われた尊い命は、6,400名。負傷した者およそ34,900名。この数字もやがて時の経過とともに増減の改変が加わることだろう。

地震発生直後のインフラストラクチュアに関しても、市街地の公共交通機関や路線バスなどの寸断・運休や電気・水道・都市ガスなどのいわゆるライフラインの甚大な被害、それに対応する形で活発化したボランティアの力強い動き、徒歩と代替バスによる兵庫県埋蔵文化財調査事務所への近くて遠い何回もの出張などが昨日のこのように、時として思い起こされる。

被害の著しかった芦屋市では、今なお空き地に雑草が目立つ住まいの復興の遅れた土地が散見され、大原町や前田町・清水町・津知町などでは、かつての人家の密集を想像できないでいる。しかし、埋蔵文化財所在地における開発行為のスピーディかつ急激な増加は、市内における復旧・復興事業の早期着手を如実に物語っており、窓口における山積みされる書類審査の職務をとおして、それを体感している。

円滑を大原則とする震災復興調査という未知の世界に入り込み、かつ経験なしの仕事と取組み、加えて拙速を要求される報告書の刊行とまだまだ先行きがみえぬ前途多難な状況にあるが、とにかく無我夢中のうちに歳月だけが流れているように思われてならない。

本事業を乗り切るために市内翠ヶ丘町公共用地の一角には、半壊状況の廃屋を活用して調査整理基地が作られ、復興調査で続々と出土する遺物を緊急避難させる場所がなんとか確保された。隣接して建てたプレハブ整理作業所とともに応急措置のことであり、人と物品がひしめき合っ手狭ではあるが、本書はそこでデータバタとして作られた復興調査の概報の第1冊ということになる。

遺物の写真撮影も、図版や挿図のトレース、レイアウトもままならなかった。整理場や資料収納場がまともにはなかったのである。工夫や精度の面からは全く落第の報告書となってしまったが、その責はすべて私のいたらない点に帰せられる。今は、条件整備のない非常時の作業であるという弁解しか持ち合わせていない。

地権者並びに周辺住民の方々の充分なご理解とご協力のもとに、事前調査および本書が成ったことをここに銘記し、深く感謝の意を表しますとともに、収載された概要報告の個々が微力ながらも埋蔵文化財に対する理解と保護の一助とならんことを祈念いたします。

末尾になりましたが、瓦礫の山が各所に残る震災の街で発掘調査を精力的に担当された全国からの支援職員の方々、並びに調査や遺物整理に参加、ご協力して頂いた各位に衷心からお礼申し上げますとともに、今後とも埋蔵文化財の保護・育成に格別のご指導・ご協力を賜わりたく存じます。

(森岡 秀人)

- 表紙写真 ▶ 阪神・淡路大震災の原因となった淡路島野島断層の動き
(田畑に大きな地割れが生じている象徴的な写真。アジア航測撮影)
- 裏表紙写真 ▶ 震災の爪跡をふり返る
(「わたしたちのまち芦屋」社会科副読本、芦屋市教育委員会から)

芦屋市文化財調査報告 第 28 集

阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
(平成 7 年度分)

概 要 報 告 書

芦屋庵寺遺跡 (W 地点) 芦屋庵寺遺跡 (第 29 地点)
月若遺跡 (第 20 地点) 月若遺跡 (第 28 地点)
打出岸造り遺跡 (第 9 地点) 久保遺跡 (第 15 地点)

平成 9 年 3 月 31 日 印刷発行

発行者 芦屋市教育委員会
〒659 兵庫県芦屋市穂道町 7 番 6 号
TEL.0979-31-9066

編集者 芦屋市教育委員会 社会教育部 文化財課文化財係
〒659 兵庫県芦屋市穂道町 7 番 6 号 TEL.0979-31-9066

印刷所 株式会社 旭 成 社
〒651 神戸市中央区琴ノ緒町 1 丁目 5-9 TEL.078-222-5800 併



28

Ashiya Archaeological Record



1997.3

Ashiya City Board of Education, Japan

